

明海大学大学院 博士 (応用言語学) 学位論文

言語景観の形成過程に関する社会言語学的研究

主 査

井上史雄 明海大学教授

副 査

原口庄輔 明海大学教授

山下暁美 明海大学教授

ダニエル・ロング 首都大学東京准教授

江 源

(学籍番号 86080001)

明海大学大学院 応用言語学研究科

応用言語学専攻 博士後期課程

2011年3月

目次

要旨 (和文)	i
要旨 (中文)	vi
要旨 (英文)	ix
表リスト	xiv
図リスト	xvi
写真リスト.....	xviii
本 文	
1 はじめに.....	1
1.1 言語景観とは何か.....	1
1.2 言語景観研究の背景.....	3
1.2.1 言語と社会の関係.....	3
1.2.2 社会言語学的視点.....	3
1.3 先行研究.....	4
1.3.1 日本国内における研究.....	4
1.3.1.1 地理学的研究.....	4
1.3.1.2 社会言語学的研究.....	4
1.3.1.3 経済言語学的研究.....	6
1.3.1.4 言語サービスの研究.....	6
1.3.2 海外における研究.....	8
1.3.2.1 バンコクに関する調査.....	8
1.3.2.2 国際比較研究.....	9
1.3.3 先行研究の問題点及び課題.....	10
1.3 論文構成.....	11
1.4 研究成果.....	13

2 研究概要	14
2.1 研究目的.....	14
2.2 研究対象.....	14
2.2.1 調査概況及び写真データの数值化.....	15
2.2.1.1 地域.....	17
2.2.1.2 業種.....	18
2.2.1.3 言語種.....	19
2.2.1.4 表記法.....	20
2.2.1.5 文字種.....	21
2.3 研究方法.....	22
2.3.1 理論的分析視点.....	22
2.3.1.1 批判理論的視点と実証科学的視点.....	22
2.3.1.2 量的方法と質的方法.....	23
2.3.1.3 共時的研究と通時的研究.....	23
2.3.2 分析技法.....	24
2.3.2.1 単純集計.....	24
2.3.2.2 指数.....	24
2.3.2.3 三角グラフ.....	25
2.3.3.4 多変量解析.....	26
3 横断的考察	27
3.1 単純集計.....	28
3.1.1 言語種と業種.....	28
3.2 指数.....	30
3.3 三角グラフ.....	33

3.4 多変量解析.....	36
3.4.1 業種と言語種.....	36
3.4.2 業種と文字種.....	38
3.4.3 業種と表記法.....	40
3.4.4 総合的考察.....	42
3.4.4.1 次元1と次元2.....	44
3.4.4.2 各次元の組み合わせごとの考察.....	47
4 日本における言語景観.....	49
4.1 地域概況.....	50
4.1.1 東京.....	50
4.1.2 大阪.....	53
4.1.3 総合.....	55
4.2 単純集計.....	56
4.2.1 言語種.....	56
4.2.2 文字種.....	58
4.2.3 表記法.....	60
4.3 多変量解析.....	62
4.3.1 地域と言語種.....	62
4.3.2 地域と文字種.....	64
4.3.3 地域と表記法.....	66
4.3.4 総合的考察.....	69
4.4 通時的考察.....	73
4.4.1 文字種.....	73
4.4.2 指数.....	76

4.4.2.1	多言語・多文字指数による散布図.....	76
4.4.2.2	文字指数に見られる通時的変化.....	78
4.4.3	言語種による三角グラフ.....	81
5	中国における言語景観.....	84
5.1	地域概況.....	85
5.1.1	上海.....	85
5.2.2	香港.....	88
5.2.2.1	ストリートビューの応用.....	89
5.2.2.2	歴史及び言語政策.....	90
5.2	単純集計.....	91
5.2.1	言語種.....	91
5.2.2	文字種.....	93
5.2.3	表記法.....	96
5.3	多変量解析.....	98
5.3.1	地域と言語種.....	98
5.3.2	地域と文字種.....	100
5.3.3	地域と表記法.....	102
5.3.4	総合的考察.....	104
5.4	通時的考察.....	107
5.4.1	指数.....	107
5.4.1.1	旧上海租界の紹介.....	107
5.5.1.2	多言語・多文字指数.....	108
5.5.2	言語種による三角グラフ.....	110

6 結び.....	113
6.1 言語景観研究の位置づけ.....	113
6.1.1 言語景観の定義.....	114
6.1.2 言語景観の方法論について.....	115
6.1.3 言語変化の現象.....	116
6.2 結論.....	118
6.3 今後の課題.....	119
参考文献（和文）.....	120
参考文献（英文）.....	122
謝 辞.....	124

付 録

要旨 (和文)

言語景観は言語と社会との複雑な関わりをいくつか可視化したものとして捉えられる。グローバリゼーションが進むとともに、言語景観はこのような時代の変化を敏感に反映し、グローバリゼーションを測る指標になりつつある。すなわち、言語は社会活動の産物であり、言語使用状況は社会状況の縮図でもある。本研究は、景観に見られる言語使用の実態を考察することによって、その社会的形成過程を解明しようとするものである。本論文は、1) はじめに、2) 研究概要、3) 横断的考察、4) 日本における言語景観、5) 中国における言語景観、6) おわりにとの6章で構成されている。以下、各章の内容に沿って概要を述べる。

第1章では、言語景観の定義と本研究の背景、そして言語景観に関する先行研究の分析と現状の問題点について述べた。

理論的出発点によって、日本における先行研究を地理学的研究、社会言語学的研究、経済言語学的研究、言語サービスの研究というように4種類に分類し、紹介した。同時に、海外でもさまざまな視点や方法による調査研究がなされてきた。これらの先行研究は、研究目的によって、データの採集方法がそれぞれ異なる点が多いため、直接比較するのを控えたほうがよいと思うが、1つの地域あるいは複数の地域を1つの全体としてとらえる研究がほとんどであり、複数の地域を比較する研究はまだ十分でないようである。言語景観の形成に影響する要因を考えた時、社会経済的属性の役割は重要である。そしてその実態を把握する上で、言語景観における言語的属性と非言語的属性の相関関係の研究は重要な意味を持つ。これまでの先行研究では、非言語的属性に着目した研究は少なく、また複数国の言語景観を比較して、その共通性に着目したものはほとんどない。

具体的には、まず、先行研究は方法論がそれぞれ異なるため、他人による研究と客観的に比較することが困難である。先行研究のような共時態の現状記述は必要不可欠なものであり、これまでの言語景観研究の果たした意義は大きい。しかし一方で、言語景観における通時的研究という視点を導入する必要があることも事実である。つまり、言語景観における言語使用の変化を進行中の言語変化現象と捉えるべく、将来的変化予測も含めた使用傾向変化を捉える視点を導入すべきだと考える。

次に、言語景観における言語あるいは言語使用そのもの、いわゆる言語内的な側面に焦点を当てたものが多いが、言語景観に含まれる社会的側面、いわゆる言語外的な側面にも関心を払うべきである。

また、特殊な地域における特殊な個々の看板に着眼したものが多く、世界範囲で言語景観使用傾向の共通性、言語景観の成り立ち方、すなわち形成の法則性を探るものは見当たらない。

以上のことから、本稿では、筆者の調査によるデータのほかに、先行研究および歴史的写真集、また他の研究者に提供されたデータも活用した。多言語・多文字指数、文字種の組み合わせ方、使用言語種（母国語、英語、その他）の比率を算出し、可能な範囲で筆者のデータと比較することによって、言語景観研究の方法論の確立を図りながら、言語景観研究を理論的に位置づけていくことにする。

第2章では本研究の研究目的、研究対象、研究の具体的調査方法について述べた。

言語景観の形成過程を含めて、言語景観の全容を、たとえ概説的にでもとらえたとすると、それは、単に言語の問題だけにとどまらない。社会や文化の問題から、さらに政治・経済の問題などまでも関連してくる。言語内の側面だけでは、十分なものとはいえない。したがって、本研究の一番の目的は、社会言語学的観点から景観に見られる言語使用の実態を考察することによって、その形成過程を解明することである。そして、もう1つの狙いは言語景観に見られる言語使用を考察することによって、言語景観の定義を新たに定め、実証的に国際化・英語化・多言語化等の社会的変化の進行状況を測定することである。

調査は、路上観察や予備調査を重ね、以下の4都市の16地域における言語景観について行った。2007年6月から12月にかけて東京都23区内にある銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町で、2009年2月には上海市にある南京路、豫園、新天地で、3月には大阪市にある道頓堀、心斎橋、日本橋電気街で、2010年6月には香港にある旺角、油麻地、尖沙咀、銅羅湾、蘭桂坊である。考察項目は言語景観を2つの非言語的属性（地域、業種）、3つの言語的属性（言語種、文字種、表記法）という5つの項目に設定した。また、実地調査のほかに、補足調査として、歴史的写真集との対比を実施している。さらに、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、本調査結果の分析を補足し、比較するための資料とした。

研究方法は、言語景観に関する研究方法を理論的分析視点と分析技法との2つの側面から論じた。

本研究では、単純集計の結果と照らし合わせながら、指数、三角グラフ、コレスポンデンス分析によって得られたグラフをマクロ的視点で総合的に考察していく。

第3章では、先行研究の問題点を踏まえて、国別、地域別で細かく考察する前に、筆者の調査によるすべての地域及び関連資料によるデータを分析し、言語景観における業種と言語使用の相関関係、共通性、通時的変化等を考察する。

まず、言語景観における各考察項目について単純集計をし、現状を把握する。

次に、各地域の言語景観の多言語指数・多文字指数を散布図で表し、考察を行った。多言語化と多文字化の進み具合で、各地域は3つのグループに分けられ、それぞれ多言語化・多文字化到達レベルの低、中、高を示す。香港の各地域は多言語・多文字指数の点数がともに高いことが目立つ。これは長年イギリスの植民地であったことから、英語の使用が浸透した結果だと考えられる。

また、各地域言語景観に使用された言語を母国語、英語、その他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の3種に分類し、三角グラフの作成を試みる。本論では、各地域言語景観に使用された言語を母国語、英語、その他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の3種に分類した。3種類の言語の相関関係を捉えるために、三角グラフを作成してみた。以下のことが読み取れる。まず、母国語使用は、原点である。ほとんどの場合、中国では中国語を使用し、日本では日本語を使用する。次に、英語使用増加は、国際化の象徴である。また、多様化した国際化の風潮はその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の言語の使用を盛んにしている。つまり、言語使用の趨勢は母国語の使用から出発し、一旦英語使用が増加し、上に向かい、またその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の取り入れによる共同作用で、バランスが取れた位置に到達するというプロセスである。歴史事情と照合し近代から現代までの言語景観における言語使用の変遷が見られ、将来の変化の進行方向も推測できる。

最後に、各地域のデータを同時に多変量解析にかけ、考察した結果は言語景観の多言語使用パターンは多用される言語の特徴を基準に、欧米志向型、折衷志向型、本国志向型（日本志向か中国志向）の3つに分類できることが考えられる。具体的には、言語使用の視点から総合的に考察すると、調査地域をヨーロッパ諸言語と英語を多用するグループ、母国語の日本語・中国語また英語を満遍なく使用するグループ、母国語の日本語あるいは中国語を中心に使用するグループの3つに分類できる。こ

の3つのグループは言語的特徴により、それぞれ言語景観の欧米志向型、折衷志向型、本国志向型（日本志向か中国志向）と名付けてみた。この分類から、言語景観の言語使用においては、国が異なるものの、共通している使用パターンがあると推察される。そして、社会が言語に影響するという観点から考えると、各グループの特徴は、言語的属性項目の使用状況は社会的属性項目の共同作用でもたらした結果であり、逆に言えば、社会的属性項目はいかに言語景観の形成に影響するかが言語的属性項目の使用状況により、解明される。まず、欧米志向型のグループでは、欧米諸語またローマ字が多用されており、左横書き表記もそれに応じて多く用いられていることがわかる。業種ファッション関係、医療、健康、美容関係は欧米から多くのものを摂取しているため、英語及びヨーロッパ諸言語使用の多いことがこの結果に表れている。次に、折衷志向型のグループでは、バラエティーに富んだ業種に対応する多言語と多文字種の併用が多数存在している。そして、本国志向型のグループでは、漢字あるいは繁体字（中国語）ならびに、縦書き表記と右横書き表記が主であることが特徴的である。

第4、5章では、第3章の考察結果を踏まえて、国・地域でさらに細かく分析、考察した。まず、地域別で各言語的属性の使用率を見た。そして、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、通時的変化の考察を試みた。再び各地域のデータを多変量解析にかけ、考察した結果は日本（東京と大阪）の言語景観における言語使用パターンは使用言語の種類を基準に、本国志向型、欧米志向型、アジア志向型の3つに分類し、中国（上海と香港）における言語景観の言語使用パターンは本国志向型と欧米志向型の2つに分類した。

第6章では、本研究の結びとして、言語景観研究の理論的位置づけを述べたのち、本研究の研究結果をまとめ、今後の課題を提示した。

本章では、第3、4、5章の考察の結果を踏まえて、言語景観研究の定義、方法論、言語景観の言語使用に見られる言語変化の現象、より普遍的な言語景観研究の理論的枠組みについて、改めて総括し、言語景観研究を理論的に位置づける。第1章でも指摘したように、在来の定義には様々な問題点がある。社会的属性項目（地域、業種）がいかに言語景観にける言語的属性項目（言語種、文字種、表記法）の使用に影響を及ぼすかの法則性がわかったことから、言語景観とは景観における言語の社会的属性を包括的に表現したものと新たに定義できる。

言語変化の現象には収斂と分散の2つの流れがある。言語景観の言語使用においては、どのような言語変化がみられるかを再び多変量解析法のコレスポネンス分析で得られたグラフを内省して考えてみた。日本と中国はそれぞれ母国語としての日本語あるいは中国語の使用から出発し、英語の国際化を背景に、一旦、英語の使用が増加する。この変化は英語の国際化に伴う現象と解釈できる。次に、英語を使用するだけでは、意思伝達あるいは雰囲気作りの役割がはたしきれないことがあるため、英語からそれぞれヨーロッパ諸言語、アジア諸言語に向かう2本の矢印が示してあるように、英語のはたしきれない役割をヨーロッパ諸言語あるいはアジア諸言語に分担してもらっていることが考えられる。例えば、フランス製、イタリア製のブランド品を扱うファッション関係の店舗はやはり英語よりもフランス語、イタリア語をそのまま使用することが多い。同様に、韓国料理の飲食店は、英語でなく、ハングルを店名看板に起用するだろう。この現象は英語の国際化以外に、多様化した国際化を意味する。

以上のような内的考察の結果をみても、言語景観における使用言語種の取捨において、母国語使用から英語使用への収斂、そして英語使用からヨーロッパ諸言語あるいはアジア諸言語使用へ分散という言語変化の現象が見られる。この現象についての解釈は三角グラフによる推測と一致する。

最後に、今後の課題として、本研究の成果を生かした言語景観研究の理論的枠組みの構築を完成させたい。また、言語景観の資料をさらに充実させ、本研究の資料とあわせることによって、世界の言語景観を対象としたコレスポネンス分析を行い、地域性、業種による経済性以外に、言語景観の形成に影響をもたらす要因を抽出し、より広い視野に立って、言語景観研究の国際比較を行っていく必要性を感じた。

キーワード：言語景観、形成過程、社会言語的研究、言語的属性、非言語的属性

要旨 (中文)

关于语言景观形成过程的社会语言学研究

摘 要

语言景观可以看做是把语言和社会之间的种种复杂关系可视化之后的产物。随着全球国际化的推进,能够敏感反映这种时代变化的语言景观也成为测量国际化程度的一个指标。换言之,语言即是社会活动的产物,相应的语言使用状况也是社会活动状况的缩影。本研究通过考察景观的语言使用,来阐明语言景观的形成过程。本论文由 1) 开篇, 2) 研究概要, 3) 横向考察, 4) 日本的语言景观, 5) 中国的语言景观, 6) 余言这 6 个部分组成。以下简要概括各章内容。

第 1 章, 首先介绍语言景观的定义和本研究的背景, 并就先行研究的不足之处进行论述。

按照理论依据的不同, 把日本的先行研究分为地理学研究、社会语言学研究、经济语言学研究、语言服务研究这四类, 并对这四类进行了阐述。同时, 在日本以外的其他国家也有使用各种各样不同观点和方法论进行的研究。纵观这些先行研究, 虽然说根据研究的目的和方法论的不同, 尽量避免直接地比较, 但还是可以看出大部分都是针对一个区域或者是把几个区域当成一个整体去研究, 缺少区域间比较的不足之处。在考虑影响语言景观的形成有哪些因素时, 可能想到其中社会经济因素起到了相当重要的作用。另外, 在把握了语言景观的实际状态的基础上, 关于语言景观的语言属性和非语言属性的关联的研究也很有必要。至今为止的先行研究之中, 着眼于非语言属性的研究很少, 通过区域间比较来探求一般规律的研究也很少。

具体来说, 首先, 先行研究间由于各自方法论不同, 很难与其他人的研究进行客观地比较。先行研究中多见的现状记述必不可少, 也很有意义。但是另一方面, 在语言景观的研究中导入历时比较的视点也很有必要。总之, 笔者认为应该把语言景观的语言使用的变化看作一种行进中的语言变化的现象, 也应该导入预测语言使用的未来发展趋势的视点到语言景观的研究中来。

其次, 在语言景观的研究中把焦点放在语言使用本身上, 换言之, 对语言属性这个侧面的比较多, 与此同时, 也应该把一部分焦点放在语言景观所包含的社会性, 所谓非语言属性之上。

此外,着眼于位于特殊地域的特殊招牌这样个例上的研究很多,在全球范围探求语言景观使用倾向的共性、语言景观的形成及形成规律的研究少之又少。

综上所述,在此研究之中,除了使用笔者的调查所获得的数据以外,同时也灵活运用了一些先行研究、历史记录影集之中的数据,以及其他研究人员所持有的数据。

第2章,主要论述了本研究目的,研究对象,研究具体调查方法。

即使只是试图简介包括言语景观的形成过程的语言景观全貌,也不仅仅是语言这一个方面的问题。它涉及到从社会、文化到政治、经济等诸多方面。仅就语言这一个侧面切入还远远不够。因此,本论文的目的就是通过用社会语言学的观点来考察语言景观,来阐明语言景观的形成过程。此外,另一个目的就是通过对考察语言景观的语言使用,重新定义语言景观,并进一步考证国际化、英语化、多语言化等当代社会变化的进程。

在实行了路面观察和预备调查的基础上,调查了以下4个城市共计16个地域的语言景观。首先在2006年6月到12月期间,调查了位于东京23区的银座、表参道、新宿、秋叶原和门前仲町,随后于2009年2月调查了位于上海的南京路、豫园和新天地,同年3月调查了位于大阪的道顿堀、心宅桥和日本桥电器街,于2010年6月调查了位于香港的旺角、油麻地、尖沙咀、铜锣湾和兰桂坊。关于言语景观的考察项目设定为2个非语言属性项目(地域、行业)、3个语言属性项目(语言、文字、标记法)。此外,为了补充实地调查的不足,还实施了与历史记录影集的对比研究。再者,还灵活运用了先行研究、以及其他研究人员所持有的数据来与笔者的数据进行比较分析。

关于言语景观的研究方法,从理论和分析技法两个角度进行了探讨。本研究之,在对照简单统计结果的同时,还尝试了指数分析、三角图、对应分析等方法来进行宏观研究。

第3章,在认清先行研究不足之处的基础上,进入以国家,地域为单位进行微观分析之前,首先就笔者收集的相关资料的数据进行分析,考察言语景观的语言使用和行业的关系、共性、历史性变化等课题。

首先,通过对语言景观的各项考察项目进行统计,以此把握现状。

其次,把各区域语言景观的多语言指数和多文字指数用散布图描述,并进行考察。根据多语言和多文字化进程,可以将各区域划分为三个组别,分别代表多语言和多文字化进程程度的低,中,高水平。

其中香港各区域的示点之高十分引人注目。这是在长期作为英国殖民地的历史背景下，英语使用高度发达的表现。

再者，把各地语言景观所使用的语言分为三类(本国语、英语、其他)，尝试做了三角图，通过此三角图可以读取以下信息。一，可以把本国语的使用作为起点，大多情况下，在中国主要用中文，在日本主要用日语。二，随着英语使用的增加是国家化的一个主要特征。三，广义的国际化也带来了英语以外的各种语言使用的增加。总之，语言使用的趋势是先从本国语的使用出发，经过英语使用的推广，最后在英语以外的各种语言使用的作用下达到一个平衡位置。对照历史背景，可以观察到至今为止的语言使用变迁过程，同时也可以由此推测将来的变化趋向。

最后，使用多变量分析法对全部数据进行考察的结果就是可以将语言景观的语言使用类型分为欧美志向型、折衷志向型、本国志向型(日本志向或是中国志向)这三个类别。

具体地说，从语言使用的角度考察，可以把各区域分为较多使用欧洲各国语言区域、较多使用本国语言和英语区域、较多使用本国语言区域这三个类别。通过此分类来看，笔者认为在不同国家也能进行同样的归类。从社会影响语言使用这个观点来考察，可以看到语言使用状况是各种社会因素影响的结果，反之，可以通过语言使用状况来阐明各种社会因素是如何影响语言景观的语言使用的。

第4, 5章，在第3章考察结果的基础上，进一步按照国家、地域单位进行细致考察。首先，通过对于语言景观的各项考察项目进行统计，以此把握现状。再者，通过灵活运用先行研究、以及其他研究人员所持有的数据来与笔者的数据进行比较分析，考察各国、各地域言语景观的语言使用历史性变化等课题。再次运用各地域数据进行多变量分析法所考察的结果是可以将日本(东京、大阪)语言景观的语言使用类型分为本国志向型、欧美志向型、亚洲志向型这三种类别，中国(上海、香港)语言景观的语言使用类型分为本国志向型、欧美志向型、亚洲志向型这两种类别。

第6章，在3、4、5章考察结果的基础上，就语言景观研究的定义、方法论、从语言景观可以观察到的语言变化现象、构筑更有普遍性的语言景观研究的理论框架等课题重新进行了总结与探讨，并展望了今后的课题。

关键词：语言景观，形成过程，社会语言学研究，语言属性，非语言属性

要旨 (英文)

A sociolinguistic Study of the Formation Process of the Linguistic Landscape

Abstract

Linguistic landscape can be viewed as the result of the visualization of the complex connections between language and the society. With the globalization, linguistic landscape that sensitively reveals the changes of time becomes an indicator of internationalization level. In other words, languages are the results of social activities and the relevant using behaviors are the miniatures of social behavior as well. This study aims to explain the forming process of linguistic landscape through the investigation of language vista's usage. This paper consists of 6 chapters. Chapter one is the introduction of this research; Chapter is the outline of this research. Chapter 3 is about the horizontal observation of language vista research. Chapter 4 is about the linguistic landscape in Japan. Chapter 5 observes the linguistic landscape in China; and chapter is the summary of the whole research. The following is the main idea of each part..

Chapter 1 introduces the concept of “linguistic landscape” and the background of this research, and then we go over the previous researches and we make comment on the limitation of those researches as well..

Based on the differences of theoretical background, we divide previous researches in Japan into geographic-linguistics, sociolinguistics, economic-linguistics and language-based service researches, which are introduced as well. Meanwhile, researchers in other countries have carried out relative researches with various methodologies from different viewpoints. After observing these previous researches, we found that with different research purpose and methods, there is no obvious comparison among them, but most of them are researches that are confined to just one area or several areas as a whole, which leads to the lack of comparison among different areas. When considering factors that affect the formation of linguistic landscape, we think that the social-economic factor may play a critical role. Besides, we think that it is necessary to carry put research into inter-relation between linguistic properties and nonlinguistic properties of linguistic landscape after the real situation of linguistic landscape is grasped. Researches focusing on non-linguistic properties are limited, which is the same to researches which investigate general commonalities through comparing different areas situation..

To be more specific, firstly, it is difficult to compare those previous researches due to the different methods they each adopt. The common illustrations of current situations are essential and crucial. However, the introduction of diachronic comparison into linguistic landscape research is necessary as well. In a word, we think that the varying of language using of linguistic landscape shall be viewed as a phenomena of language change in process and the forecasting of future development of language using should be introduced into linguistic landscape researches as well.

Secondly, the linguistic landscape research should focuses on the using of language itself,. In other words, many researches focus on linguistic properties. We recommend the sociality that linguistic landscape possessed should be focused as well, which is an also known as non-linguistic property.

Thirdly, researches focusing on particular examples are abundant. Researches which explore the commonalities, the formation and the forming principles of language vista are limited.

Therefore in this research, along with the data we got through our research, we flexibly adopt statistics that offered by some previous researches, historical records and some researchers.

Chapter2 is about the research purpose, research objects and the concrete research methodology.

Even if we are just trying to introduce a complete picture of linguistic landscape, which includes the forming process of linguistic landscape, it is not only an issue of language itself. The linguistic landscape involves many aspects such as social factors, cultural factors, political factors and economical factors. It is far insufficient to carry on this research exclusively focusing on language itself. The purpose of this thesis is to investigate linguistic landscape from the perspective of sociolinguistics and then clarify the forming process of linguistic landscape. In addition, this paper is to redefine linguistic landscape through investigating language use of linguistic landscape and then to investigate the process of the contemporary social changes including globalization, Anglicization, multi-lingualization and the like.

Based on pavement observation and pilot study, we investigated the linguistic landscape of the following sixteen regions from four cities. Firstly, from June to December in 2006we investigated Ginza, Omotesando, Shinjuku, Akihabara and Monzen-nakachō, all of which are all located Tokyo. In February, 2009, we investigated

Nanking Road, Yuyuan and Newland in Nanjing. We investigated Dotonbori, Shintaikubashi and Denki Town in Osaka in March of the same year, and also *Mong Kok*, *Tsim Sha Tsui*, *Causeway Bay* and *Lan Kwai Fong* in Hong Kong in June, 2010. The project of inspecting linguistic landscape is divided into two non-linguistic subproject (including region and profession) and three linguistic subprojects (including language, culture and notation). Moreover, in order to supplement the shortage of the field survey, comparison with the data of historical record was also conducted. Furthermore, previous researches are flexibly referred to and statistics offered by other researchers was also adopted for comparison.

As to research methodology of linguistic landscape, we discuss it from the following two perspectives-theory and analysis techniques. In addition to the simple comparison among statistical results, Index Analysis, Triangular Plot and Correspondence Analysis are used for macro-research on linguistic landscape.

In Chapter3, based on the recognition of the shortcomings of previous researches, before taking nations or regions as units to make a micro-analysis, statistics collected by us are analyzed for investigation into those subjects, including language use of linguistic landscape and the interrelationship among professions, commonalities and historical changes and the like.

Firstly, in order to grasp the present situation, we make statistics of different investigation items of linguistic landscape. Next, multilingualization index and multigraphization index of linguistic landscape are described with scatter diagram and the relevant investigations are conducted. According to the process of multilingualization and multigraphization, each region could be divided into three levels which are respectively represented as low, medium and high level. Hong Kong is the highest in terms of the three indexes. The reason maybe considered as follows: because it was a colony of England in the past, English was used frequently no matter in which field.

Then, language used in linguistic landscape in different places are divided into three types (including the native language, English and other languages), and a triangular plot is presented. This triangular plot presents the following information: Firstly, the use of the native language could be regarded as a daily thing and in most cases Chinese people, for example, mainly use Chinese in China and Japanese people mainly use Japanese in Japan. Secondly, one of the indicators of nationalization is the increasing use of English language. Thirdly, the

internationalization in broad sense promotes the use of other languages as well. In a word, the tendency of language use was starting from the use of the native language. A balanced position under the action of using other languages along with English is achieved. By comparing with historical background, the changing process of language use could be observed and the trend in the future can be forecasted simultaneously.

Finally, the result of multiple discriminate analyses in investigating all those data is that the language use of linguistic landscape falls in three types—Western language orientation, the Compromising orientation and the Native language orientation (Japanese language orientation or Chinese language orientation).

To be specific, from the perspective of language use, each region could be classified into three types: European language using region, native-language-and-English-using region, and native language-using region. According to this classification, I think that the same criterion could be adopted in different countries. While from the perspective of society affecting language use, the situation of language use is the result of the influence of different social factors. On the contrary, based on language use, the process of how different social factors affect the language use of linguistic landscape can be explained.

In Chapter 4 and 5, based on the researching results introduced in Chapter 3, further researches among nations or regions are conducted.

Firstly, in order to grasp the present situation, statistics of different investigation items are summed up. Then previous researches are flexibly referred to and statistics offered by other researchers was also adapted for comparison, as a way to inspect the historical change of language use of linguistic landscape in different nations and regions. And again, the result of multiple discriminate analyses to investigate all those data is that the language use of linguistic landscape in Japan falls into three types-- Native language orientation, Western language orientation and Asian language orientation. The language use in China(Shanghai & Hong Kong) falls into native language orientation , western language orientation and Asian language orientation.

In Chapter6, based on the research results introduced in chapter3, 4 and 5, the methodology of studying linguistic landscape, the language change that can be observed from linguistic landscape and the more general theoretical framework of studying linguistic landscape are summarized and discussed. Future tasks are presented as well.

Keywords:

Linguistic landscape, Formation process, Sociolinguistic study, Linguistic properties, Non-linguistic properties

表リスト

表 1	言語景観の地域別サンプル数内訳.....	17
表 2	言語景観の業種一覧表.....	18
表 3	言語景観の地域・言語種別サンプル数内訳.....	19
表 4	言語景観の地域・表記法別サンプル数内訳.....	20
表 5	言語景観の地域・文字種別サンプル数内訳.....	21
表 6	多言語指数点数表・多文字指数点数表.....	24
表 7	文字種点数（日本）.....	25
表 8	業種別の言語種内訳.....	28
表 9	言語種組み合わせかたによる分類.....	28
表 10	業種別の言語種内訳（言語種組み合わせかたによる分類）.....	29
表 11	多言語・多文字指数得点一覧表.....	30
表 12	多言語指数点数表・多文字指数点数表.....	31
表 13	言語景観における言語種使用割合の内訳.....	33
表 14	コレスポネンス分析による言語種ポイントの概要.....	36
表 15	コレスポネンス分析による文字種ポイントの概要.....	38
表 16	コレスポネンス分析による表記法ポイントの概要.....	40
表 17	コレスポネンス分析による全項目ポイントの概要.....	42
表 18	言語景観の地域・言語種別 01 型データサンプル数内訳.....	56
表 19	言語景観の地域・文字種別 01 型データサンプル数内訳.....	58
表 20	言語景観の地域・表記法別 01 型データサンプル数内訳.....	60
表 21	コレスポネンス分析による言語種ポイントの概要（日本）.....	62
表 22	コレスポネンス分析による文字種ポイントの概要（日本）.....	64
表 23	コレスポネンス分析による文字種ポイントの概要 a（日本）.....	66

表 24	コレスポネンス分析による表記法ポイントの概要 b (日本)	67
表 25	コレスポネンス分析による全項目ポイントの概要 (日本)	69
表 26	各研究における文字種の内訳	73
表 27	日本における言語景観の地域別多言語・多文字指数平均値内訳	76
表 28	多言語指数点数表・多文字指数点数表	76
表 29	日本における言語景観の地域別文字指数平均値内訳	78
表 30	日本における言語景観の地域別文字指数平均値内訳続き	79
表 31	文字指数点数表	79
表 32	日本の言語景観における言語種使用割合の内訳	81
表 33	中国における言語景観の地域・言語種別 01 型データサンプル数内訳	91
表 34	中国における言語景観の地域・文字種別 01 型データサンプル数内訳	94
表 35	中国における言語景観の地域・表記法別 01 型データサンプル数内訳	96
表 36	コレスポネンス分析による言語種ポイントの概要 (中国)	98
表 37	コレスポネンス分析による文字種ポイントの概要 (中国)	100
表 38	コレスポネンス分析による表記法ポイントの概要 (中国)	102
表 39	コレスポネンス分析による全項目ポイントの概要 (中国)	104
表 40	中国における言語景観の地域別多言語・多文字指数平均値内訳	108
表 41	多言語指数点数表・多文字指数点数表	108
表 42	中国における言語景観の地域別・三角グラフ用言語種割合内訳	110

図リスト

図 1	業種別の言語種.....	29
図 2	多言語・多文字指数折れ線.....	31
図 3	多言語・多文字指数散布図.....	32
図 4	言語景観における言語種使用割合.....	34
図 5	言語種（母国語・英語・その他）使用割合による三角グラフ.....	35
図 6	コレスポンデンス分析による業種と言語種.....	37
図 7	コレスポンデンス分析による業種と文字種.....	39
図 8	コレスポンデンス分析による業種と文字種.....	41
図 9	コレスポンデンス分析による全項目（次元 1 と次元 2）.....	44
図 10	コレスポンデンス分析による全項目（次元 1 と次元 2）.....	46
図 11	コレスポンデンス分析による全項目（次元 1 と次元 3）.....	47
図 12	コレスポンデンス分析による全項目（次元 2 と次元 3）.....	48
図 13	コレスポンデンス分析による地域と業種（東京）.....	51
図 14	コレスポンデンス分析による地域と業種（大阪）.....	53
図 15	コレスポンデンス分析による地域と業種（日本）.....	55
図 16	地域別言語種割合（日本）.....	57
図 17	地域別文字種割合（日本）.....	59
図 18	地域別表記法割合（日本）.....	61
図 19	コレスポンデンス分析による地域と言語種（日本）.....	63
図 20	コレスポンデンス分析による地域と文字種（日本）.....	65
図 21	コレスポンデンス分析による地域と表記法 a（日本）.....	66
図 22	コレスポンデンス分析による地域と表記法 b（日本）.....	68
図 23	コレスポンデンス分析による全項目（日本）.....	70

図 24	文字種の通時的変化.....	74
図 25	多言語・多文字指数散布図（日本）	77
図 26	文字指数折れ線（日本）	80
図 27	日本の言語景観における言語種使用割合	82
図 28	日本における言語種（母国語・英語・その他）使用割合による三角グラフ	83
図 29	コレスポネンス分析による地域と業種（上海）	87
図 30	コレスポネンス分析による地域と業種（香港）	88
図 31	地域別言語種割合（中国）	92
図 32	地域別文字種割合（中国）	94
図 33	地域別表記法割合（中国）	97
図 34	コレスポネンス分析による地域と言語種（中国）	99
図 35	コレスポネンス分析による地域と文字種（中国）	101
図 36	コレスポネンス分析による地域と表記法（中国）	103
図 37	コレスポネンス分析による全項目（中国）	105
図 38	多言語・多文字指数散布図（中国）	109
図 39	中国の言語景観における言語種使用割合	111
図 40	中国における言語種（母国語・英語・その他）使用割合による三角グラフ	112
図 41	言語、景観、社会の関係	114
図 42	コレスポネンス分析による全項目（次元 1 と次元 2）	116

写真リスト

写真 1 銀座・写真 2 新宿	52
写真 3 門前仲町.....	52
写真 4 表参道・写真 5 秋葉原	52
写真 6 心齋橋.....	54
写真 7 日本橋電気街.....	54
写真 8 道頓堀.....	54
写真 9 南京路・写真 10 新天地	86
写真 11 豫園.....	86

1 はじめに

言語景観は言語と社会との複雑な関わりをいくつか可視化したものとして捉えられる。グローバリゼーションが進むとともに、言語景観はこのような時代の変化を敏感に反映し、グローバリゼーションを測る指標になりつつある。すなわち、言語は社会活動の産物であり、言語使用状況は社会の縮図でもある。本研究は、景観に見られる言語使用の実態を考察することによって、その社会的形成過程を解明しようとするものである。

1.1 言語景観とは何か

『日本国語大辞典』（1998）では、景観を①「(ドイツ *Landshaft* 英 *Landscape* の訳語) 植物学、地理学用語で風景を主として植物相、地形の観点から眺めた場合の認識像をいう」、②「観賞する価値のある眺め。また、比喩的に、社会のある部面を眺め渡したとき見て取れる状況をいう」と定義している。

一方、言語景観研究で扱う言語景観は、景観の下位概念に属する都市景観に見られる書き言葉を指すものが多く、さらに、景観工学の観点から見る都市景観とは、都市における人造物の造形をいい、都市を構成する自然や人工的建築物や工作物などの物理環境の眺めについての主として視覚的イメージをいう。広義に解釈するときには、都市における諸活動や、市民生活を反映した雰囲気など含まれているイメージをもいう（石井・元田，1993）。

日本では、言語景観という用語を使い始めたのは地理学者の正井泰夫である（正井，1972:153-158）。正井（1972）は「言語およびその視覚表現である文字からみた都市景観のことである」と定義している。このような定義ができる理由について、後に正井（1983）の論文では、「都市景観は、建築物（高さ、色彩、材料、様式など）、道路網、緑、土地利用、住民など、さまざまな構成要素をもつ」、「言語は文字という媒体を通して視覚に訴えることができる。その結果、景観要素となりうるのである。日本の都市のように、きわめて多くの看板が用いられているところでは、この言語景観が主要な景観要素の1つとなっている。」、「言語景観はまた、異なる文化（圏）の認知にも役立つ。」と説明した。

言語景観に相当する英語の「linguistic landscape」に関する社会言語学者 R.Landry & R.Y. Bourhis (1997) の記述を参考にして、バックハウス (2005) は言語景観を「道路標識、広告看板、地名表示、店名表示、官庁の標識などに含まれる可視的な言語の総体」と定義している。また、バックハウス (2005) は、言語景観を「日本語しか含まない単一言語表示」と「日本語以外、あるいは日本語の代わりに、ほかの言語を含む多言語表示」と述べており、また公的表示 (道路標識、地名表示、官庁の標識など) と私的表示 (店名表示、広告看板など) にそれぞれ二分類している。この定義は抽象化されておらず、適用の範囲も限られている。

以上述べたように、言語景観研究には少なくとも、言語、景観、社会との3つの側面に焦点を当て、複眼的視点が必要となる。さらに、言語景観の定義もそれに対応して、新たに定める必要があるだろう。

1.2 言語景観研究の背景

言語景観の形成過程を含めて、言語景観の全容を、たとえ概説的にでもとらえたとすると、それは、単に言語の問題だけにとどまらない。社会や文化の問題から、さらに政治・経済の問題なども関連してくる。言語内の側面だけでは、十分なものとはいえない。

1.2.1 言語と社会の関係

研究テーマは、社会言語学的研究となるが、方法論あるいは視点を示している。社会言語学とは簡単に言えば、言語と社会の関係を明らかにしようという学問である。言語と社会の関係について、①社会が言語に影響する、②言語が社会に影響する、③2つは相互に影響しあう、④2つは無関係だという4つの説が知られているが、言語景観の形成に関しては、①社会が言語に影響するという説にあてはまると筆者は考えている。

1.2.2 社会言語学的視点

研究内容は、調査者が言語か社会か、そのどちらに焦点を置いて分析するかというと、今まで人々の話すことばの特徴を綿密に調査するという点にある。言語が社会でどのように使われているかに関する初期の研究は、いわゆる方言学・言語地理学・方言地理学・地理言語学等と呼ばれる分野で発達してきた。さらに、細かい言語特徴を個人レベルの記述・分析しようとする立場をミクロ的研究と呼び、言語調査の焦点が個人よりも社会全体に置かれる研究をマクロ的研究と呼ぶことがある。言語景観研究にも同様に、ある地域範囲において、1つ1つの言語景観を1人1人のインフォーマントと見なし、研究の主眼をどこに置くかの違いにより、ミクロ的研究（言語内容）とマクロ的研究（言語と社会）がある。

1.3 先行研究

1.3.1 日本国内における研究

理論的出発点によって、先行研究を地理学的研究、社会言語学的研究、経済言語学的研究、言語サービシ的研究というように4種類に分類した。これらの先行研究は、研究目的によって、データの採集方法がそれぞれ異なる点が多いため、直接比較するのを控えたほうがよいと思うが、1つの地域あるいは複数の地域を1つの全体としてとらえる研究がほとんどであり、複数の地域を比較する研究はまだ十分でないようである。

1.3.1.1 地理学的研究

先駆的な調査として、地理学者の正井（1969/1972）が1962年に新宿で実施したものがある。調査の対象は店名看板で、それを言語別、文字別、そして業種を踏まえて分析した。その研究の目的は「あまりにも地理学的研究ということにこだわるつもりはない。むしろ単にさまざまな言語、さまざまな文字が新宿という盛場において、いかなる状態で実在しているかを考察したい。」としている。正井（1969）は、「新宿では当時、未だ漢字が圧倒的に多く使用されていたという分析の結果があるが、一時代前はより漢字的な文化景観が見られたという点を考慮すると、1962年の新宿はローマ字によって代表されるような国際性・異国情緒がかなり見られるというべきだろう」と指摘する。

1.3.1.2 社会言語学的研究

1990年代後半よりほぼ10年の間に、言語景観は社会言語学において世界的に注目され始めた分野であると言われている。さまざまな研究が世界中で行われてきた。日本においても、染谷（2002）、金（2005/2007）、オバタ・ライマン（2005）、ダニエル・ロング（2006）、バックハウス（2006/2007）などを挙げるることができる。以下に詳しくまとめていく。

染谷 (2002) は「看板の文字表記」というテーマで、小田急線沿線を中心に行った。染谷 (2002) はターミナル駅をなるべく避け、日常生活の匂いがする商店街から駅周辺の看板をデジタルカメラで撮影し、採集した。看板の文字体系の使用傾向と、表記法の実態について考察した結果は日常生活において漢字の勢力が大きいことと、日本語のローマ字表記というより、外国語のローマ字表記が押し寄せていることが判明された。

金 (2005/2007) の一連の研究では、東京や大阪などの大都会で日本に在住する外国人が主にコミュニティ内の情報交換のために掲げる表示というところに注目して、これを中心に考察した。

オバタ・ライマン (2005) は「表参道店名の表記」を時間と空間とテーマ (企業名) の3観点から観察し、ここに現れる日本語の共時的・通時的変化と来たるべき時代の流れを比較考察した。特に、「街や通りのイメージ作りに表現としての店名表記は重要な要素である」という指摘に注目したい。

ダニエル・ロング (2006) は、奄美の言語景観の目を地域言語に向けて、「目に付く方言」の実態を探った。具体的には奄美でどのような言語景観が形成されているかを、それと関わっているいくつかの言語学的や社会言語学的要因から考察した。

バックハウス (2006/2007) は外国語表示が特に多い場所の一つの東京都内に焦点をあて、山手線の日暮里駅以外の28駅の周辺で、調査を行った。バックハウス (2006/2007) は一定地域にあるすべての表示が使われている言語ごとに分類して、①「だれによつての多言語景観」、②「だれのための多言語景観」という2つの問題意識から検証した。

1.3.1.3 経済言語学的研究

言語は商品であり、値段が付くものだという経済言語学の観点から、日本の言語景観を経済原理とのかかわり、すなわち言語景観を支配する背後の原理を探るものとして、井上 (2000/2001/2005/2007) の研究がある。近代の表記を

①漢字優勢タイプ

②カタカナ優勢タイプ

③アルファベット優勢タイプ

④アルファベットプラスタイプ

の4段階に分けている。一連の研究の結果をふまえた上で、戦後のカタカナ使用への傾斜、さらに現代のアルファベット使用への傾斜があると述べている。また、「地域差は、日本全体の周圏論でなく、むしろ都市空間構成内部の地域差」(井上 2007) という指摘にも注目したい。他には、井上 (2009) がある。

1.3.1.4 言語サービスの研究

来日した外国人は、さまざまな問題に直面している。その1つとして、言葉の問題があげられる。言語政策の一環として、外国人が日本社会で順調に生活していけるように、日本人側から言語サービスを提供する必要がある。外国人に対する情報伝達という言語サービスの1つとしては、道路標識、街区表示板、地下鉄案内板、避難標識等のような外国人のための多言語表示である (河原 2004)。これらの問題を扱った研究としては、平野 (1996)、バックハウス (2004)、庄司博史・金美善 (2007)、田中 (2007)、田中・上倉・秋山・須藤 (2007)、田中・上倉・新坂 (2007) 小野原信善 (2007)、田中 (2009)、山城 (2009) らの研究が挙げられる。

具体的には、河原（2004）は、外国人、視覚障害者の観点から研究が行われているなか、日本の公的看板に日本語、英語、中国語、韓国語の4カ国語が増えた理由として、2002年に日韓共催 FIFA ワールドカップが行われたのが理由だと説明している。

河原（2004/2005）は、言語サービスを「外国人が理解できる言語を用いて、必要とされる情報を伝達すること」と定義している。自治体による言語サービスは、できるだけ多くの言語が使われるのが理想であるが、予算、その言語への需要、翻訳者が存在するか否かによって決定されていると説明している。

田中（2009）は、首都圏を走る鉄道の駅構内に設置されている表示類のうち、多言語化の進んでいる「出口案内」と「トイレ案内」を調査した。

山城（2009）は、JR 山手線各駅の点字表示を例にとり、言語景観を研究している。

1.3.2 海外における研究

1.3.1 節では、日本における言語景観研究を地理学的研究、社会言語学的研究、経済言語学的研究、言語サービスの研究というように4種類に分類し、紹介した。実際に海外でもさまざまな視点や方法による調査研究がなされてきた。言語景観に焦点を絞った論文集として、『*Linguistic Landscape : Expanding the Scenery*』(2009)と『*Linguistic Landscape in the City*』(2010)がある。

『*Linguistic Landscape : Expanding the Scenery*』(2009)の中では、言語景観研究が下記のように分類されている。

- ①理論的展望
- ②方法論的観点
- ③言語政策的観点
- ④社会心理的観点
- ⑤可能性と課題

ここでは、『*Linguistic Landscape : Expanding the Scenery*』(2009)に収録された2つの論文を事例として紹介する。

1.3.2.1 バンコクに関する調査

バンコクはタイ王国の首都であり、政治的、経済的、文化的中心地でもある。バンコクの人口は主体であるタイ人のほか、数多くの華人、アジアと欧米から来た各種言語を母語とする人に構成されている。

バンコクの言語景観に関する研究は、まず Smalley (1994) によるものが挙げられる。調査対象はバンコク市内3つの地区における店名看板である。店名看板に見られる①文字使用②言語使用③ビジネス対象の言語使用に着目し、分析を行った。その結果として、住民構成の違いによって文字使用と言語使用の地理的傾向があることが観察された。

また、Huebner (2006) は都市における言語の多様性に焦点を当て、バンコク郊外 15 ヶ所を調査し、言語景観を公的表示と私的表示に分けて分析を行った。公的表示にはタイ文字の使用率が高く、私的表示にはローマ字の使用率が高いことが観察された。

1.3.2.2 国際比較研究

Scollon & Scollon (2003) は都市景観をディスコースの多様性による「記号論的結合体」(semiotic aggregate) と見なし、世界的範囲で調査を行った。「記号論的結合体」の概念を例証するために、彼らはアジアに位置する香港、北京、ヨーロッパに位置するウィーン、パリ、アメリカのワシントン D.C.を調査し、比較した。

Scollon & Scollon (2003) は都市空間におけるディスコースを①地方自治体主導ディスコース、②地方自治体公共事業ディスコース、③広告的ディスコース、④反社会的 (transgressive) ディスコースとの 4 種に分類した。さらに、記号論的機能を①コード優先 (code preference)、②言語内容 (inscription)、③物理的位置 (emplacement) との 3 つの視点から各地言語景観の異同を考察した。

1.3.3 先行研究の問題点及び課題

ここでは、先行研究の問題点及び課題を検討していく。

まず、先行研究は方法論がそれぞれ異なるため、他人による研究と客観的に比較することが困難である。

先行研究のような共時態の現状記述は必要不可欠なものであり、これまでの言語景観研究の果たした意義は大きい。しかし一方で、言語景観における通時的研究という視点を導入する必要性があることも事実である。つまり、言語景観における言語使用の変化を進行中の言語変化現象と捉えるべく、将来的変化予測も含めた使用傾向変化を捉える視点を導入すべきだと考える。

次に、言語景観における言語あるいは言語使用そのもの、いわゆる言語内的な側面に焦点を当てたものが多いが、言語景観に含まれる社会的側面、いわゆる言語外的な側面にも関心を払うべきである。

また、特殊な地域における特殊な個々の看板に着眼したものが多く、世界範囲で言語景観使用傾向の共通性、言語景観の成り立ち方、すなわち形成の法則性を探るものは見当たらない。

以上のことから、本稿では、筆者の調査によるデータのほかに、先行研究および歴史的写真集、また他の研究者に提供されたデータも活用した。多言語・多文字指数、文字種の組み合わせ方、使用言語種（母国語、英語、その他）の比率を算出し、可能な範囲で筆者のデータと比較することによって、言語景観研究の方法論の確立を図りながら、言語景観研究を理論的に位置づけていくことにする。

1.3 論文構成

本論文は、1) はじめに、2) 研究概要、3) 横断的考察、4) 日本における言語景観、5) 中国における言語景観、6) おわりに、あわせて6章から構成されている。以下、各章の内容に沿って概要を述べる。

第1章では、言語景観の定義と本研究の背景、そして言語景観に関する先行研究の分析と現状の問題点について述べる。言語景観の形成過程において働く要因を考えたとき、社会経済的属性の役割は重要である。そしてその実態を把握する上で、言語景観における言語的属性と非言語的属性の相関関係の研究は重要な意味を持つ。これまでの先行研究では、非言語的属性に着目した研究は少なく、また複数国の言語景観を比較して、その共通性に着目したものはほとんどない。

第2章では本研究の研究目的、研究対象、研究方法具体的調査方法について述べる。調査は、路上観察や予備調査を重ね、以下の4都市の16地域における言語景観について行った。2007年6月から12月にかけて東京都23区内にある銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町で、2009年2月には上海市にある南京路、豫園、新天地で、3月には大阪市にある道頓堀、心斎橋、日本橋電気街で、2010年6月には香港にある旺角、油麻地、尖沙咀、銅羅湾、蘭桂坊である。考察項目は言語景観を2つの非言語的属性（地域、業種）、3つの言語的属性（言語種、文字種、表記法）という5つの項目に設定した。また、実地調査のほか、補足調査として、歴史的写真集との対比を実施した。さらに、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、本調査結果の分析を補足し、比較するための資料とした。

第3章では、先行研究の問題点を踏まえて、国別、地域別で細かく考察する前に、筆者の調査によるすべての地域及び関連資料によるデータを分析し、言語景観における業種と言語使用の相関関係、共通性、通時的変化等を考察する。

まず、言語景観における業種と言語使用について単純集計をし、現状を把握する。次に、各地域の言語景観の多言語指数・多文字指数を散布図で表し、考察を行う。各地域言語景観に使用された言語を母国語、英語、その他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の3種に分類し、三角グラフの作成を試みる。また、各地域のデータを同時に扱い、多変量解析にかけ、各地域の言語景観に見られる言語使用の法則性を探る。

第4、5章では、第3章の考察結果を踏まえて、国・地域でさらに細かく分析、考察した。まず地域別で各言語的属性の使用率を見た。そして、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、通時的変化の考察を試みる。

第6章では、本研究の結びとして言語景観研究の理論的位置づけを述べたのち、本研究の研究結果をまとめ、今後の課題を提示する。

1.4 研究成果

結論を先取りすれば、本研究の成果としては、以下のように、4点ほどが挙げられる。

第1に、言語景観の実態が様々な調査・分析法で把握できた。

第2に、言語景観のパターンを本国志向型、折衷志向型、欧米志向型に分類し、共通性を示した。

社会経済的要因がいかに関言語景観の形成に影響しているかを解明し、一定の法則性を見出した。

第3に、本研究では、言語景観資料を数値化する方法を自ら開発し、はじめて三角グラフ、多変量解析法のコレスポネンス分析を言語景観研究に導入し、方法論の確立に貢献した。

第4に、最後の部分では、言語景観を新たに定義し、そして言語景観の言語使用に見られる言語変化の現象等について、言語景観研究を理論的に位置づけることにより、言語景観研究の理論的枠組みの構築に貢献した。

2 研究概要

2.1 研究目的

言語景観の形成過程を含めて、言語景観の全容を、たとえ概説的にでもとらえたとすると、それは、単に言語の問題だけにとどまらない。社会や文化の問題から、さらに政治・経済の問題なども関連してくる。言語内の側面だけでは、十分なものとはいえない。

したがって、本研究の一番の目的は、社会言語学的観点から景観に見られる言語使用の実態を考察することによって、その形成過程を解明することである。そして、もう1つの狙いは言語景観を観察することによって、言語景観の定義を新たに定め、実証的に国際化・英語化・多言語化等の社会的変化の進行状況を測定することである。

2.2 研究対象

言語景観は言語と社会との複雑な関わりをいくつか可視化したものとして捉えられる。本研究では、研究項目は言語景観を2つの社会的属性（地域、業種）、3つの言語的属性（言語種、文字種、表記法）という5つの項目に設定した。単純集計の結果と照らし合わせながら、指数、三角グラフ、コレスポネンデンス分析によって得られたグラフをマクロ的視点で総合的に考察する。また、実地調査のほか、補足調査として、歴史的写真集との対比を実施している。さらに、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、本調査結果の分析を補足し、比較するための資料とした。

なお、筆者のデータ以外に使用した資料及びデータは下記に示す。

- ①井上（私家版）
- ②正井（1969/1972）、染谷（2002）
- ③本間（2010）
- ④写真集 1850-2010 跨越世纪的上海城市影像(英文版)

(1850-2010A Photo Contrast of Past Glories and New Accomplishments)

2.2.1 調査概況及び写真データの数値化

調査は、路上観察や予備調査を重ね、以下の4都市の16地域における言語景観について行った。2007年6月から12月にかけて東京都23区内にある銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町で、2009年2月に上海市にある南京路、豫園、新天地で、3月に大阪市にある道頓堀、心斎橋、日本橋電気街で、2010年6月に香港にある旺角、油麻地、尖沙咀、銅羅湾、蘭桂坊である。この16地域を対象とした理由は一般知名度が高く、質量ともに代表的な商業集積地域であり、社会経済活動が集中しているからである。

まず、最初の観察や予備調査では、「商業施設の言語景観には経済原理が反映されやすいため、言語的多様性は公的表示よりバラエティーに富んでいる」(井上 2007)ということから、東京都内23区にある商業集積地域から選ぶことにした。具体的には、「東京の商業集積地域(商業統計調査報告～商業集積地域別集計編～)平成9年」により、区ごとに商店数が多い商業集積地域上位3位までをリストアップした。次に商店総数が多い区のランキングから1位の中央区にある銀座地域(当区1位)、11位の港区にある青山通り表参道周辺(当区3位)、3位の新宿区にある新宿駅東口(当区1位)、10位の千代田区にある秋葉原(当区1位)、15位の江東区にある門前仲町周辺(当区2位)という5つの地域のメインストリートを選んだ。ここで取り上げた5つの調査地域の一般的イメージは、一言でいえば、銀座が高級感溢れる古くからの繁華街、表参道が外国高級ファッションブランド店の林立するおしゃれな町、新宿が活気溢れる新興繁華街、秋葉原が世界各地からの人々を引きつける電気街、門前仲町が下町情緒豊かな場所と言われている。本研究では、各地域の言語景観に見られる言語使用の状況はどの程度このイメージを反映しているのかにも注目したい。考察の結果は、この5つの地域における言語景観に見られる言語使用パターンを本国志向(銀座、新宿、門前仲町)、欧米志向(表参道)、アジア志向(秋葉原)に分けられたことである。そして日本の他の都市も、あるいは他の国の都市もこの考察の結果と同様にパターン化されるかどうかを検証したいという問題意識で、後に、大阪、上海、香港で東京の3パターンの5つの地域に類似した地域をそれぞれ選び、調査を行った。

調査対象は調査地域のメインストリートに面した両側の明瞭に見られるすべての店名表示、広告看板などの商業看板が主体となる非公的言語景観で、デジタルカメラで撮影した。¹夜間になると、景観上また変わってくるため、調査の時間帯は昼間（主に午後1時から4時まで）に限定した。

本研究では、採集した写真データを地域、言語種、表記法、文字種の組み合わせ方、業種という5つの項目に分けて、統計ソフトSPSS（15版）による相関分析という多変量解析法に適用できるように、それぞれコード²を与えて、数値化した。本節では、写真データの数値化の方法を説明する。

共時的実地調査のほか、通時的調査も可能とするために、日本に関しては、他の研究者が集めたデータ、中国に関しては、歴史写真が収録された写真集を活用した。詳細は各関連章節で説明していく。

¹ いわゆる公的表示は本研究の対象外だが、今後の研究のために、同時に撮影した。ただし、永久的、半永久的ではないと判断した看板は調査対象から排除した。また、ほとんど目立たない小さなもの（原則的に、手書きのメニューなどA4サイズより小さいもの）は排除した。なぜならば、都市景観の構成要素としては、不適切と判断したからである。筆者個人の判断による誤りの可能性があることを指摘しておく。

² データの形は、入力時と地域別延べ数及び2項目組み合わせごとの相関分析を行う際には、カテゴリ・アイテム型で、一方、全項目の相関分析を行う際には、01（ゼロイチ）型とした。

2.2.1.1 地域

実地調査の対象とする地域別のサンプル数内訳は表1のようである。詳しい説明は後に各章で行い、ここでは省略する。

表 1 言語景観の地域別サンプル数内訳

地域名		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	銀座	493	14.6	14.6	14.6
	表参道	258	7.6	7.6	22.2
	新宿	203	6.0	6.0	28.2
	秋葉原	304	9.0	9.0	37.1
	門前仲町	323	9.5	9.5	46.7
	南京路	363	10.7	10.7	57.4
	新天地	78	2.3	2.3	59.7
	豫園	281	8.3	8.3	68.0
	道頓堀	291	8.6	8.6	76.6
	日本橋電気街	102	3.0	3.0	79.6
	心齋橋	220	6.5	6.5	86.1
	旺角	138	4.1	4.1	90.2
	油麻地	91	2.7	2.7	92.9
	尖沙咀	48	1.4	1.4	94.3
	銅羅湾	128	3.8	3.8	98.1
	蘭桂坊	66	1.9	1.9	100.0
	合計	3387	100.0	100.0	

2.2.1.2 業種

先行研究では、業種による言語景観の違いについて言及した研究に正井(1969/1972)、染谷(2002)、金(2005/2007)、オバタ・ライマン(2005)等のものがある。しかし、業種を分類するには共通した基準がないようで、本研究では、筆者が先行研究を参考にし、調査した地域の具体的状況を考慮した上で、14種類に分類した。その分類法は表2で示した。

言語景観において、業種による違いがいかに関与するかを分析することで、言語外的な要因、主に社会経済的要因が言語使用にもたらす影響を考察する。

表2 言語景観の業種一覧表

業種
飲食関係(和食、洋食、喫茶店、食料品等)
ファッション関係(服、バック、靴、ウェディング等)
事務所等(会社、組織等)
医療、健康、美容関係(エステ、美容院、病院、クリニック、薬店、マッサージ、ジム等)
建物の名称(ビル等)
デパート、モール等
銀行、金融関係
芸術、工芸品関係(博物館、ギャラリー、ジュエリー、時計等)
娯楽施設(クラブ、カラオケ、ゲームセンター、パチンコ等)
書店
電気製品(売場)
その他(神社、教会堂、コンビニ等、不明)
ホテル・旅館
複合・総合ショップ

2.2.1.3 言語種

今回の調査において、出現したすべての言語種と複数の言語種の組み合わせは表 3 のようである。ただし、仏語、伊語、西語、独語、露語等はヨーロッパ諸言語（ヨ）としてまとめ、韓国語、タイ語、ヒンディ語等はアジア諸言語（ア）としてまとめた。³

表 3 言語景観の地域・言語種別サンプル数内訳

地域名と言語種のカテゴリ表

地域名	言語種																			合計
	J	E	C	ヨ	ア	E+ヨ	E+C	E+C+ア	C+ヨ	C+ア	J+E	J+E+C	J+ヨ	J+C	J+ア	J+C+E+ヨ	J+E+C+ア	J+E+C+ヨ+ア		
銀座	318	77	9	46	1	0	0	0	0	0	31	0	9	0	2	0	0	0	0	493
表参道	82	88	2	67	0	2	0	0	0	0	11	0	4	0	1	1	0	0	0	258
新宿	125	47	0	13	2	0	0	0	0	0	12	0	4	0	0	0	0	0	0	203
秋葉原	195	58	3	5	1	1	0	0	0	0	32	4	1	0	0	0	3	1	0	304
門前仲町	260	33	6	3	0	0	0	0	0	0	20	0	1	0	0	0	0	0	0	323
南沢路	16	24	126	17	0	0	166	0	9	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	363
新天地	1	29	12	10	0	0	24	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	78
猿園	1	10	180	3	0	0	84	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	281
道頓堀	218	20	0	0	0	0	0	0	0	0	42	0	0	0	3	0	6	2	0	291
日本橋電気街	61	18	1	2	0	0	0	0	0	0	13	0	1	0	0	0	6	0	0	102
心斎橋	108	50	0	34	0	0	0	0	0	0	26	0	1	0	1	0	0	0	0	220
旺角	13	7	71	1	0	0	41	0	0	0	3	0	0	2	0	0	0	0	0	138
油麻地	0	2	55	0	0	0	34	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	91
尖沙咀	2	16	0	19	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	48
銅鑼湾	8	45	27	21	0	0	20	0	0	0	6	1	0	0	0	0	0	0	0	128
蘭桂坊	0	46	3	13	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	66
合計	1408	570	495	254	4	3	384	1	9	3	200	7	21	2	7	1	15	3	0	3387

バックハウス（2005）は「日本語以外、あるいは日本語の代わりに、ほかの言語を含む多言語表示」という定義があり、言語景観が単一言語表示か多言語表示かという観点からすると、表示に日本語が含まれていても、実際には他の言語と結合している場合、日本語以外の言語の項に分類している。このように分類法はまだ議論する必要があると思われるため、本研究では、採用しなかった。

³ 本研究では、主に電話番号に使われる数字や、「TEL」、階を表す「F」等の略号は調査対象に含めない、あるいは言語として認めないことにする。

2.2.1.4 表記法

飛田(2002)は、「表記とは、一定の文字列と一定の言語単位とが対応することによって、空間に固定された言語表現をいう。その言語表現を書き表す文字と符号の文字列のきまりを表記法という。」と定義している。本研究での表記法という用語は特に言語景観における縦書き、左横書き、あるいは縦書きと横書きを組み合わせたもの、右横書きという4種の言語表記のいずれかを指すものである。ただし、横書きで九十度回転した状態で縦の形で表示している看板も横書きの項に分類した。

01型データで多変量解析法のコレスポネンス分析を行う際に、両方（縦書きと横書きを組み合わせたもの）を情報として単純化するために、それぞれ縦書きと左横書きにばらした。

表 4 言語景観の地域・表記法別サンプル数内訳

地域名 と 表記法 のクロス表

度数		表記法				合計
		縦書き	左横書き	両方	右横書き	
地域名	銀座	196	261	36	0	493
	表参道	14	236	8	0	258
	新宿	80	104	19	0	203
	秋葉原	59	218	27	0	304
	門前仲町	100	201	22	0	323
	南京路	38	286	34	5	363
	新天地	8	60	10	0	78
	豫園	5	234	12	30	281
	道頓堀	73	184	30	4	291
	日本橋電気街	24	73	5	0	102
	心齋橋	27	176	17	0	220
	旺角	7	109	7	15	138
	油麻地	2	68	1	20	91
	尖沙咀	0	46	2	0	48
	銅羅湾	4	118	3	3	128
	蘭桂坊	3	62	0	1	66
	合計	640	2436	233	78	3387

本研究での表記法という用語は特に言語景観における縦書き、右横書き、左横書きあるいは縦書きと横書きを組み合わせたものという4種の言語表記のいずれかに指すものである。なぜこの表記法に

注目したかという、縦書きと右横書きは中国語と日本語伝統の表記習慣であり、左横書きは欧米諸語表記の影響を受けたものであり、両方は前述のとおり、融合したものだからである。つまり、左横書きは欧米（西洋）志向のシンボルで、縦書きと右横書きは本国志向のシンボルで、縦書きと横書きを組み合わせたものは両方に配慮を加えたものだというを前提とした。

2.2.1.5 文字種

本研究では、使用されている言語種の組み合わせ方を示しておいたが、実際の言語景観における言語使用では、文字種も言語種に相応していくつかを組み合わせている。ただし、英語、仏語、伊語、西語、独語、露語等の文字はローマ字としてまとめた。韓国語、タイ語、ヒンディー語等の文字はアジア諸言語文字としてまとめた。

その組み合わせの状況を示したのが、表5である。

表 5 言語景観の地域・文字種別サンプル数内訳

地域名	地域名と文字種の対応																			
	漢字	ひらがな	カタカナ	ローマ字	漢+ひ	漢+カ	漢+ロ	ひ+カ	ひ+ロ	カ+ロ	漢+ひ+カ	漢+ひ+ロ	漢+カ+ロ	漢+ひ+ロ+カ	漢字+漢+ひ	漢字+漢+カ	漢字+漢+ロ	漢字+漢+ひ+カ	漢字+漢+ひ+ロ	漢字+漢+カ+ロ
東京	100	4	18	141	22	50	38	3	0	19	6	5	36	0	0	0	0	0	0	0
東京 豊島区	20	0	7	137	2	29	24	0	0	22	5	2	8	1	0	0	0	0	0	0
東京 新宿区	28	6	19	27	16	29	9	1	2	9	2	6	10	1	0	0	0	0	2	0
東京 秋葉原	41	2	16	48	19	51	20	3	1	23	21	4	25	23	0	0	0	0	1	4
東京 門前仲町	64	8	16	34	65	70	14	3	2	16	12	11	13	5	0	0	0	0	0	0
東京 豊洲	25	2	0	41	1	3	155	0	0	0	0	0	1	0	33	0	0	0	20	0
東京 新大塚	2	0	0	38	0	0	23	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	1	0
東京 清瀬	119	1	0	10	0	0	38	0	0	0	0	1	0	0	61	0	0	0	8	1
東京 浦和	45	8	11	23	76	33	26	2	0	15	15	8	8	10	0	0	0	0	4	1
東京 日本橋電気街	13	2	7	22	7	20	6	1	0	2	5	4	2	5	0	0	0	0	0	5
心斎橋	25	0	10	88	9	25	13	0	0	8	4	1	28	7	0	0	0	0	0	1
心斎橋 心斎橋	11	0	0	7	0	0	6	0	0	0	0	1	0	0	59	1	0	0	4	0
心斎橋 心斎橋	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	48	0	0	0	0	0
心斎橋 心斎橋	0	0	0	36	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0
心斎橋 心斎橋	3	1	0	16	0	0	1	0	0	1	1	2	1	0	18	0	0	0	0	0
心斎橋 心斎橋	0	0	0	80	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	0
合計	574	34	102	804	217	301	426	13	5	115	71	45	134	52	259	1	163	2	1	8

2.3 研究方法

ここでは、言語景観に関する研究方法を理論的分析視点と分析技法との2つの側面から論じる。

2.3.1 理論的分析視点

研究方法としては理論的分析が、研究目的により、様々ある。本節では、いくつかの対となる視点で、本研究を位置づけることにする。

2.3.1.1 批判理論的視点と実証科学的視点

言語景観という事象を社会言語学的に取り上げる場合、批判理論的視点と実証科学的視点に区別できる。この2つの方向は、いわばそれぞれの視点からそれぞれの研究をすすめようとするもので、簡単に融合されるものではない。

批判理論的視点による研究は言語景観の領域において、外国語の誤用、異体字の使用、文法の乱れ、方言の使用、外国人向けの多言語表示の欠如等のような研究課題が挙げられる。個々の言語景観を見るのが楽しいが、事例研究にすぎず、全容が見えてこない。欧米では、このような研究がほとんどである。

実証科学的視点による研究は言語景観の領域において、大量データを扱うことによって、ある範囲で言語景観の実態を把握することができる。しかし、大量のデータが集められた後、いかに有効に活用するかという課題はまだ解決に至っていない。本研究では、収集した大量データを多変量解析にかけることで、在来の実証科学的視点による研究の不足点を補い、主に実証科学的視点から考察を行っていきたい。

2.3.1.2 量的方法と質的方法

社会科学の領域においては、社会現象へのアプローチの方法として、量的方法と質的方法が区別されている。本研究では、言語景観に見られる言語使用状況の全貌を明らかにするために、個々の言語景観サンプルにおける言語内容を細かく見るより、大量データによる分析に重点を置く。

2.3.1.3 共時的研究と通時的研究

先行研究のような共時態の現状記述は必要不可欠なものであり、これまでの言語景観研究は果たした意義が大きい。しかし一方で、言語景観における通時的研究という視点を導入する必要性が生じていることも事実である。つまり、言語景観における言語使用の変化を進行中の言語変化現象と捉えるべく、将来的変化予測も含めた使用傾向の変化を捉える視点を導入すべきだと考える。

本研究では、先行研究および歴史的写真集、また他の研究者によって提供されたデータを活用し、通時的研究を試みる。

2.3.2 分析技法

本研究では、単純集計の結果と照らし合わせながら、指数、三角グラフ、コレスポネンズ分析によって得られたグラフをマクロ的視点で総合的に考察する。また、実地調査のほかに、補足調査として、歴史的写真集との対比を実施した。さらに、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、本調査結果の分析を補足し、比較するための資料とした。

2.3.2.1 単純集計

地域別で各言語的属性の使用率を比較するために、一定の基準で各地域の順番を並び替え、グラフを作成する。

2.3.2.2 指数

指数とは変動する数値の大小関係を比率の形にして表したものである。

本論では、各地域の言語景観の多言語指数・多文字指数を散布図で表す。他の研究者によるデータもあるため、表6のように点数の付け方の基準を統一した。

表 6 多言語指数点数表

多文字指数点数表

多言語指数			
日 本		中 国	
日本語	1 点	中国語	1 点
英語	2 点	英語	2 点
その他	3 点	その他	3 点

多文字指数	
母国語文字	1点
ローマ字	2点
その他	3点

ただし、日本に限って、文字種の比較しかできないデータもあるため、また下記の表 7 のように、地域別で文字を数値化し、平均値を算出する。

表 7 文字種点数 (日本)

漢字	ひらがな	カタカナ	ローマ字
0	1	2	3

2.3.2.3 三角グラフ

三角グラフは、正三角形の各辺をグラフ化する 3 項目とし、それらの項目の比率を正三角形内部の点から各辺への垂線の長さで表現したグラフである。正三角形内部の任意の点から各辺への垂線の和が一定値になることを利用しており、この一定値が三項目の比率の和である 100%に相当する。本論では、各地域言語景観に使用された言語を母国語、英語、その他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の 3 種に分類し、三角グラフの作成を試みた。

2.3.3.4 多変量解析

ここでは、多変量解析法のコレスポンデンス分析の原理及びグラフの読み取り方等について、簡単に説明する。

コレスポンデンス分析は、1960年代にパリ第6大学のジャン＝ポール・ベンゼクリ (Jean-Paul Benzécri) が多次元の質的データを対象とした主成分分析型手法として考案した。フランス語では「AFC (analyse factorielle des correspondances)」という。1970年代に「CA (correspondence analysis)」として英語圏に紹介されると、統計解析ソフトに搭載されるなど世界に広まった。数理的には数量化III類、双対尺度法など同種の手法である。

コレスポンデンス分析は多次元集計されたデータを多次元空間にマッピングして、データ要素同士の関係性を視覚的に表現する多変量解析の1つである。一般には、2次元の行列（分割表、クロス集計表）の行要素（サンプル）と列要素（カテゴリ）に定性データが与えられているとき、同一のサンプルに反応したカテゴリ同士、同一のカテゴリに反応したサンプル同士を集め、それを空間に配置するのに適した原点（座標）を算出する。そして、これに基づいて散布図（ポジショニングマップ）を作成して要素をプロットする。具体的には、類似度・関係性の強い要素同士は近くに、弱い要素同士は遠くにプロットされる（ただし、相対的な関係である）。この時、軸がクロスする原点付近にプロットされる要素は比較的特徴が薄いと解釈できる。直観的・感覚的にデータの傾向を把握できることもあって、ブランドポジショニング分析や消費者特性分析、パーセプションマップの作成など、マーケティング分野でよく用いられる。

3 横断的考察

本章では、先行研究の問題点を踏まえて、国別、地域別で細かく考察する前に、筆者の調査によるすべての地域及び関連資料によるデータを分析し、言語景観における業種と言語使用の相関関係、共通性、通時的变化等を考察する。

まず、3.1 では、言語景観における業種と言語使用について単純集計をし、現状を把握する。

次に、3.2 では、言語景観の多言語指数・多文字指数を散布図で表し、各国、各地域の世界範囲における位置づけについて、考察する。

また、3.3 では、各地域言語景観に使用された言語を母国語、英語、その他の3種に分類し、三角グラフの作成を試みる。

最後に、3.4 では、各地域のデータを多変量解析法コレスポンデンス分析に適用し、言語景観に見られる言語的属性項目の使用傾向を探り、言語景観の形成過程における社会的属性の働きについて、一般的法則性を見出すことを試みる。

3.1 単純集計

3.1.1 言語種と業種

後に第4、5章では、国別・地域別で言語的属性を集計・分析するが、ここでは、言語景観における社会的属性項目の業種に注目する。

表 8 業種別の言語種内訳

業種	言語種															合計			
	J	E	C	ヨ	ア	E+ヨ	E+C	E+C+ア	C+ヨ	C+ア	J+E	J+E+C	J+ヨ	J+C	J+ア		J+C+E+ヨ	J+E+C+ア	J+E+C+ヨ+ア
飲食関係	472	122	161	81	2	1	111	0	3	3	36	0	8	1	3	1	2	2	1009
ファッション関係	60	116	45	109	0	2	39	0	5	0	10	0	0	1	0	0	0	0	387
事務所等	246	52	23	5	0	0	14	0	0	0	30	0	1	0	0	0	0	0	371
医療、健康、美容関係	127	70	31	20	1	0	22	0	0	0	18	0	8	0	0	0	0	0	297
建物の名称	146	26	18	0	0	0	23	0	0	0	11	0	1	0	0	0	0	0	225
デパート、モール等	29	22	18	3	0	0	23	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	98
銀行、金融関係	43	6	3	0	0	0	25	0	0	0	11	0	0	0	1	0	0	0	89
芸術、工芸品関係	86	51	123	32	0	0	78	0	1	0	16	1	2	0	0	0	0	0	390
娯楽施設	41	30	16	1	0	0	12	0	0	0	21	0	0	0	3	0	0	0	124
書店	7	1	3	0	0	0	1	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	17
電気製品	68	32	16	1	1	0	6	0	0	0	19	4	1	0	0	0	13	1	162
その他	59	26	25	2	0	0	12	1	0	0	10	1	0	0	0	0	0	0	136
ホテル、旅館	0	4	12	0	0	0	11	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	28
複合・総合ショップ	25	12	1	0	0	0	6	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	53
合計	1408	570	495	254	4	3	383	1	9	3	200	7	21	2	7	1	15	3	3396

言語景観に見られる言語は何種類の言語によって構成されているかで、表 8 のように分類できる。言語景観に使用された言語は1つのサンプルに最多5種類もある。単一言語か、多言語化という観点から見ると、1種しか含まれていないものは単一言語表示、複数の言語があるのは多言語表示と2種類に分類することも考えられる。

表 9 言語種組み合わせかたによる分類

1種					2種							3種		4種		5種	
J	E	C	ヨ	ア	E+ヨ	E+C	C+ヨ	C+ア	J+E	J+ヨ	J+C	J+ア	E+C+ア	J+E+C	J+C+E+ヨ	J+E+C+ア	J+E+C+ヨ+ア

業種が言語景観における使用言語種類の単一言語か多言語かをいかに影響するかを見るために、表 9 を作成した。

図 1 は表 10 に基づき、1種が多い順番でソートしたものである。図から明らかのように、業種において、単一言語表示を多用するタイプと多言語表示を好むタイプに分かれる。

表 10 業種別の言語種内訳（言語種組み合わせかたによる分類）

	1種	2種	3種	4種	5種
事務所等	326	45	0	0	0
ファッション関係	330	57	0	0	0
建物の名称	190	35	0	0	0
医療、健康、美容関係	249	48	0	0	0
飲食関係	838	166	0	3	2
その他	112	22	2	0	0
芸術、工芸品関係	292	97	1	0	0
電気製品	118	26	4	13	1
デパート、モール等	71	26	1	0	0
複合・総合ショップ	38	15	0	0	0
娯楽施設	88	36	0	0	0
書店	11	6	0	0	0
銀行、金融関係	52	37	0	0	0
ホテル、旅館	16	12	0	0	0

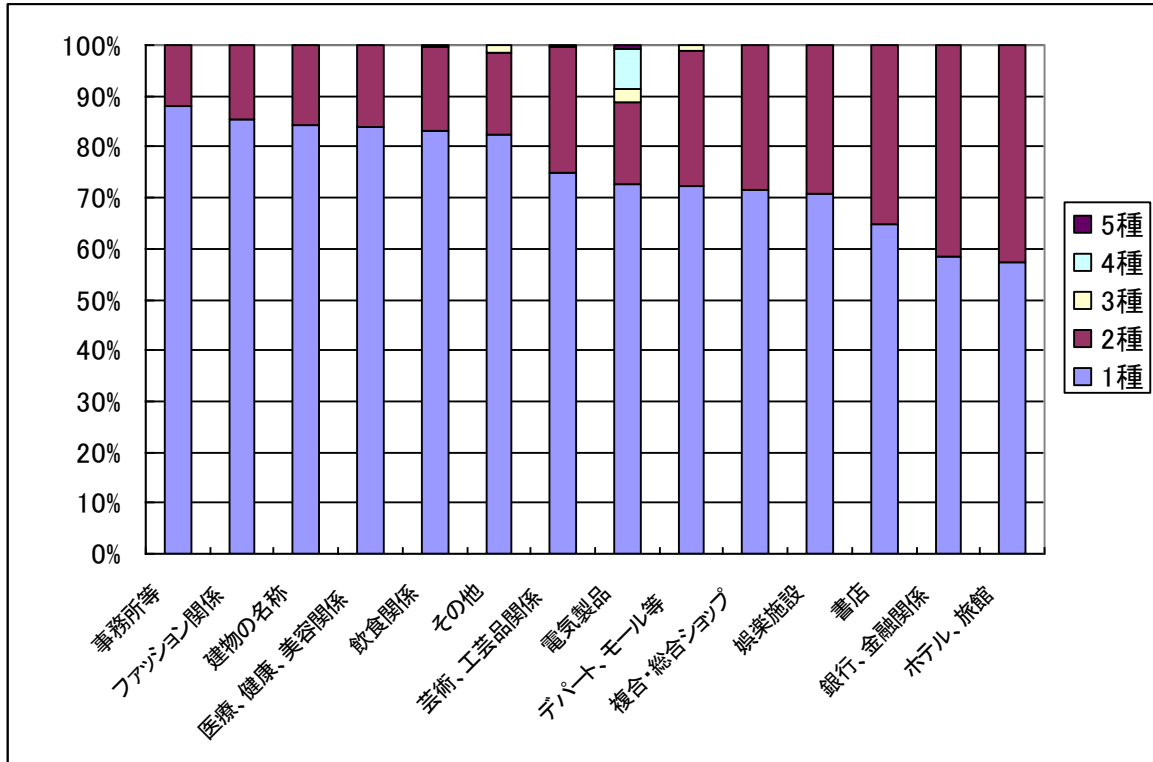


図 1 業種別の言語種

3.2 指数

表 11 は表 12 の基準で、各地域における多言語・多文字指数の平均値を算出し、クロス集計表にしたものである。

表 11 多言語・多文字指数得点一覧表

	多言語指数	多文字指数
旧 Facets of Life (上海)	1	1
旧 Urban Development (上海)	1.03	1.03
旧 Scenes of City「上海)	1.07	1.07
新 Urban Development (上海)	1.13	1.13
門前仲町(東京)	1.19	1.18
道頓堀(大阪)	1.22	1.2
豫園(上海)	1.22	1.21
新 Historical Architecture (上海)	1.27	1.28
秋葉原(東京)	1.34	1.3
旧 Historical Architecture (上海)	1.34	1.34
三河島(コリアンタウン)	1.35	1.17
新 Scenes of City(上海)	1.37	1.37
日本橋電気街(大阪)	1.38	1.34
新 Facets of Life(上海)	1.39	1.39
新宿(東京)	1.43	1.37
銀座(東京)	1.44	1.38
南京路(上海)	1.52	1.39
伊勢佐木町(コリアンタウン)	1.56	1.27
新今里(コリアンタウン)	1.57	1.31
心齋橋(大阪)	1.6	1.5
油麻地(香港)	1.77	1.9
新大久保(コリアンタウン)	1.78	1.52
新天地(上海)	1.85	1.69
表参道(東京)	1.93	1.64
旺角(香港)	1.98	1.84
蘭桂坊(香港)	2.21	2.03
銅羅灣(香港)	2.34	2.23
尖沙咀(香港)	2.67	2.25

表 12 多言語指数点数表

多言語指数			
日 本		中 国	
日本語	1 点	中国語	1 点
英語	2 点	英語	2 点
その他	3 点	その他	3 点

多文字指数点数表

多文字指数	
母国語文字	1 点
ローマ字	2 点
その他	3 点

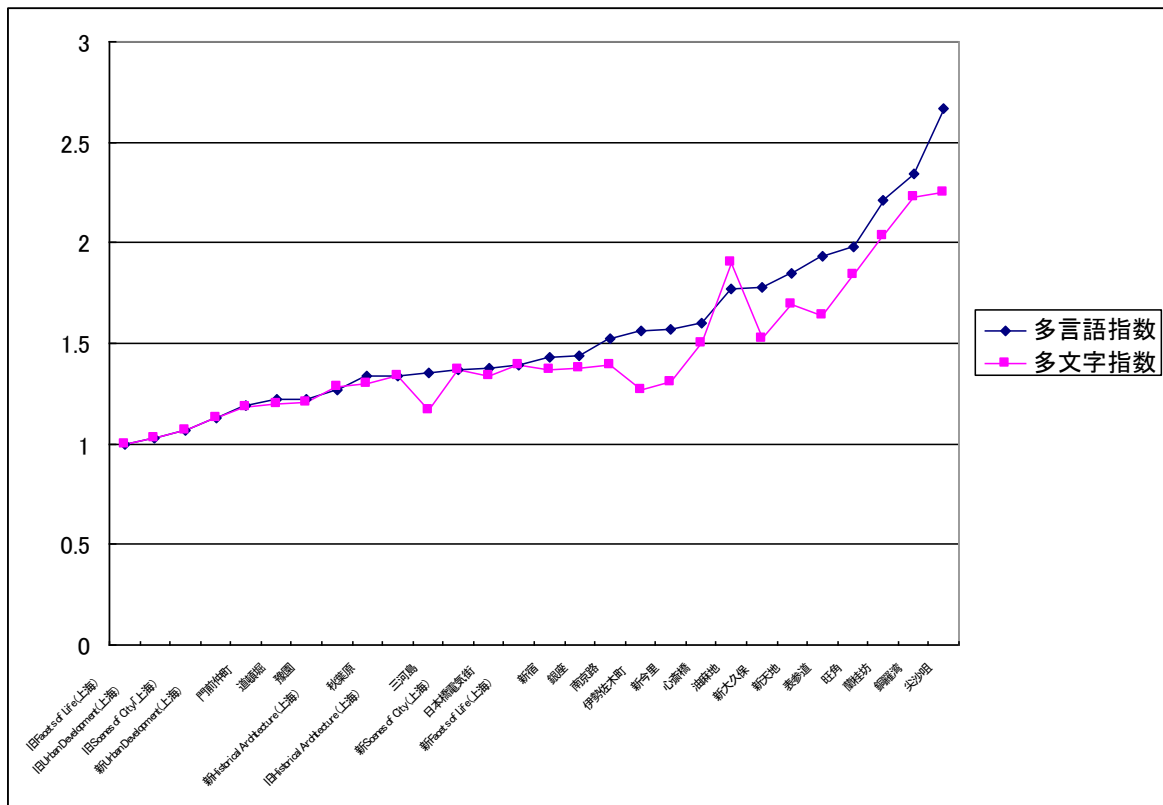


図 2 多言語・多文字指数折れ線

図 2 は表 11 を図化したものである。図 2 から明らかなように、2 本の線ともに、右上がりの推移

の傾向が見られ、多言語化、多文字化の経年的変化が観察される。

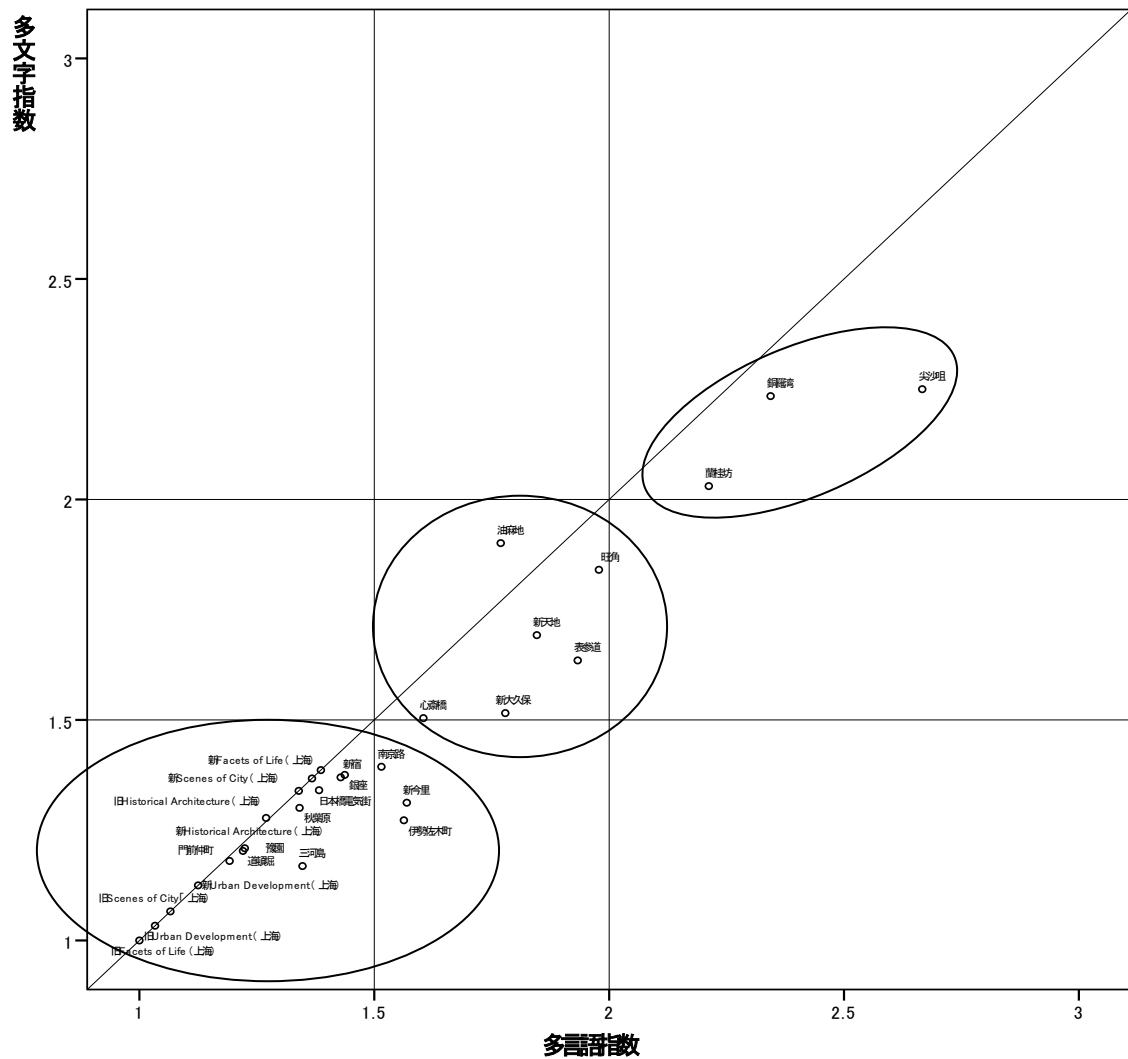


図 3 多言語・多文字指数散布図

図 3 は表 11 に基づいて、横軸を多言語指数得点で、縦軸を多文字指数得点で表した散布図である。

図 3 では、多言語化と多文字化の進み具合で、各地域は 3 つのグループに分けられ、左下からそれぞれ多言語化・多文字化到達レベルの低、中、高を示す。そして、香港の各地域は多言語・多文字指数の点数がともに高いことがわかる。これは長年イギリスの植民地であったことから、英語の使用が浸透した結果だと考えられる。

3.3 三角グラフ

表 13 言語景観における言語種使用割合の内訳

	母国語	英語	その他
旧 Facets of Life(上海)	1.00	0.00	0.00
旧 Urban Development(上海)	0.94	0.06	0.00
旧 Scenes of City(上海)	0.91	0.09	0.00
新 Urban Development(上海)	0.85	0.15	0.00
門前仲町(東京)	0.82	0.15	0.03
道頓堀(大阪)	0.76	0.19	0.05
豫園(上海)	0.72	0.26	0.02
油麻地(香港)	0.71	0.29	0.00
三河島(コリアンタウン)	0.71	0.24	0.05
新 Historical Architecture(上海)	0.67	0.30	0.02
銀座(東京)	0.67	0.20	0.13
秋葉原(東京)	0.66	0.28	0.07
新宿(東京)	0.66	0.26	0.09
旧 Historical Architecture(上海)	0.65	0.35	0.00
旺角(香港)	0.62	0.28	0.10
日本橋電気街(大阪)	0.60	0.28	0.12
新 Scenes of City(上海)	0.59	0.40	0.01
新今里(コリアンタウン)	0.58	0.28	0.15
新 Facets of Life(上海)	0.57	0.43	0.00
南京路(上海)	0.56	0.35	0.09
心齋橋(大阪)	0.56	0.30	0.14
伊勢佐木町(コリアンタウン)	0.54	0.35	0.11
新大久保(コリアンタウン)	0.44	0.34	0.22
ウプサラ(スウェーデン)	0.43	0.34	0.23
表参道(東京)	0.35	0.37	0.28
新天地(上海)	0.35	0.53	0.13
チューリッヒ(スイス)	0.32	0.32	0.35
銅羅湾(香港)	0.31	0.46	0.23
尖沙咀(香港)	0.19	0.46	0.36
蘭桂坊(香港)	0.12	0.88	0.00

図 4 は、表 13 のデータを視覚化し、左から、母国語の使用率が高い順番で並べ変えたものである。

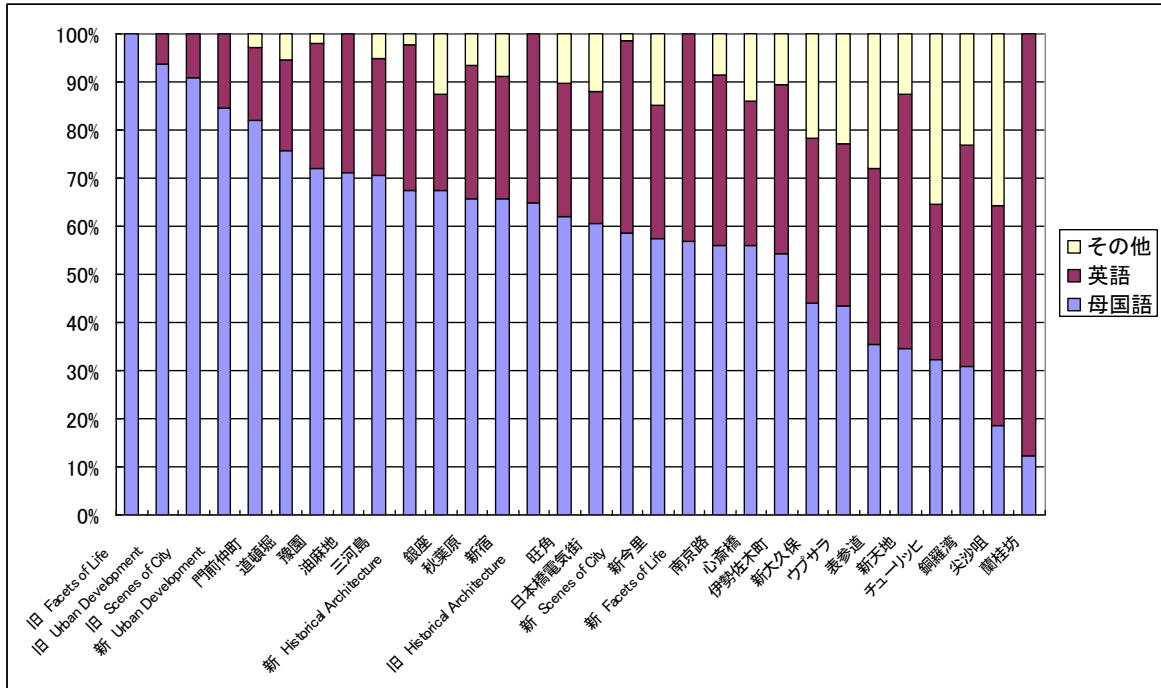


図 4 言語景観における言語種使用割合

図 4 では、各地域の言語景観における言語種の割合が分かるが、3 種類の言語の相関関係を捉えるために、図 5 のように三角グラフを作成してみた。以下のことが読み取れる。

まず、母国語使用は、原点である。ほとんどの場合、中国では中国語を使用し、日本では日本語を使用する次に、英語使用増加は、国際化の象徴である。また、多様化した国際化の風潮はその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の言語の使用を盛んにしている。

次の第 4、5 章では、また国別で考察するが、各地域はまとめてみると、ともに、図 5 上の矢印のような使用言語変化の傾向が観察される。つまり、言語使用の趨勢は母国語の使用から出発し、一旦英語使用が増加し、上に向かい、またその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の取り入れによる共同作用で、バランスが取れた位置に到達するというプロセスである。図 5 上矢印のように、歴史事情と照合し近代から現代までの言語景観における言語使用の変遷が見られ、将来の変化の進行方向も推測できる。

3.4 多変量解析

3.4.1 業種と言語種

ここでは、業種による言語景観の社会経済的属性と言語種の相関関係を考察する。

表 14 コレスポネンス分析による言語種ポイントの概要

行ポイントの概要 ^a									
言語種	マス	次元の得点		概要イナーシャ	寄与率				
		1	2		次元のイナーシャに対するポイント		ポイントのイナーシャに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
J	.416	-.524	.132	.062	.283	.025	.744	.035	.778
E	.168	.327	-.371	.025	.045	.079	.289	.271	.560
C	.146	.369	.304	.042	.049	.046	.191	.094	.285
ヨ	.075	1.549	-.441	.088	.447	.050	.825	.049	.873
ア	.001	-.630	-1.528	.002	.001	.009	.086	.368	.454
E+ヨ	.001	2.256	-1.003	.003	.011	.003	.628	.090	.719
E+C	.113	.310	.471	.034	.027	.086	.130	.219	.349
E+C+ヨ	.000
E+C+ア	.000	-.642	.354	.007	.000	.000	.007	.002	.008
E+C+ヨ+ア	.000
C+ヨ	.003	2.020	-.658	.006	.027	.004	.754	.058	.812
C+ア	.001	-.062	.614	.002	.000	.001	.001	.047	.047
J+E	.059	-.603	-.300	.027	.053	.018	.318	.057	.375
J+E+C	.002	-1.112	-3.748	.015	.006	.099	.069	.570	.639
J+ヨ	.006	-.235	.022	.008	.001	.000	.017	.000	.017
J+C	.001	1.677	-.599	.001	.004	.001	.559	.052	.610
J+ア	.002	-.528	.495	.011	.001	.002	.021	.013	.034
J+E+ヨ	.000
J+C+E+ヨ	.000	-.062	.614	.001	.000	.000	.001	.047	.047
J+E+C+ア	.004	-1.945	-6.110	.065	.042	.565	.103	.741	.844
J+E+C+ヨ+ア	.001	-.786	-1.972	.002	.001	.012	.089	.405	.493
合計	1.000			.402	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

ここでは、表 14 の寄与率の欄の中で言語種が次元のイナーシャに対する得点を見ながら、図 6 上の配置を確認する。

次元 1 においては、得点が高い言語種にはヨーロッパ諸言語 0.447、日本語 0.283 がある。これは日本語あるいはヨーロッパ諸言語しか使わない業種との違いが一番大きいことを意味する。

次元 2 においては、得点が高い言語種には日本語+英語+中国語+アジア諸言語 0.565 がある。電気製品の店はできるだけ各国から来た顧客を取り込もうというような努力がうかがえる。

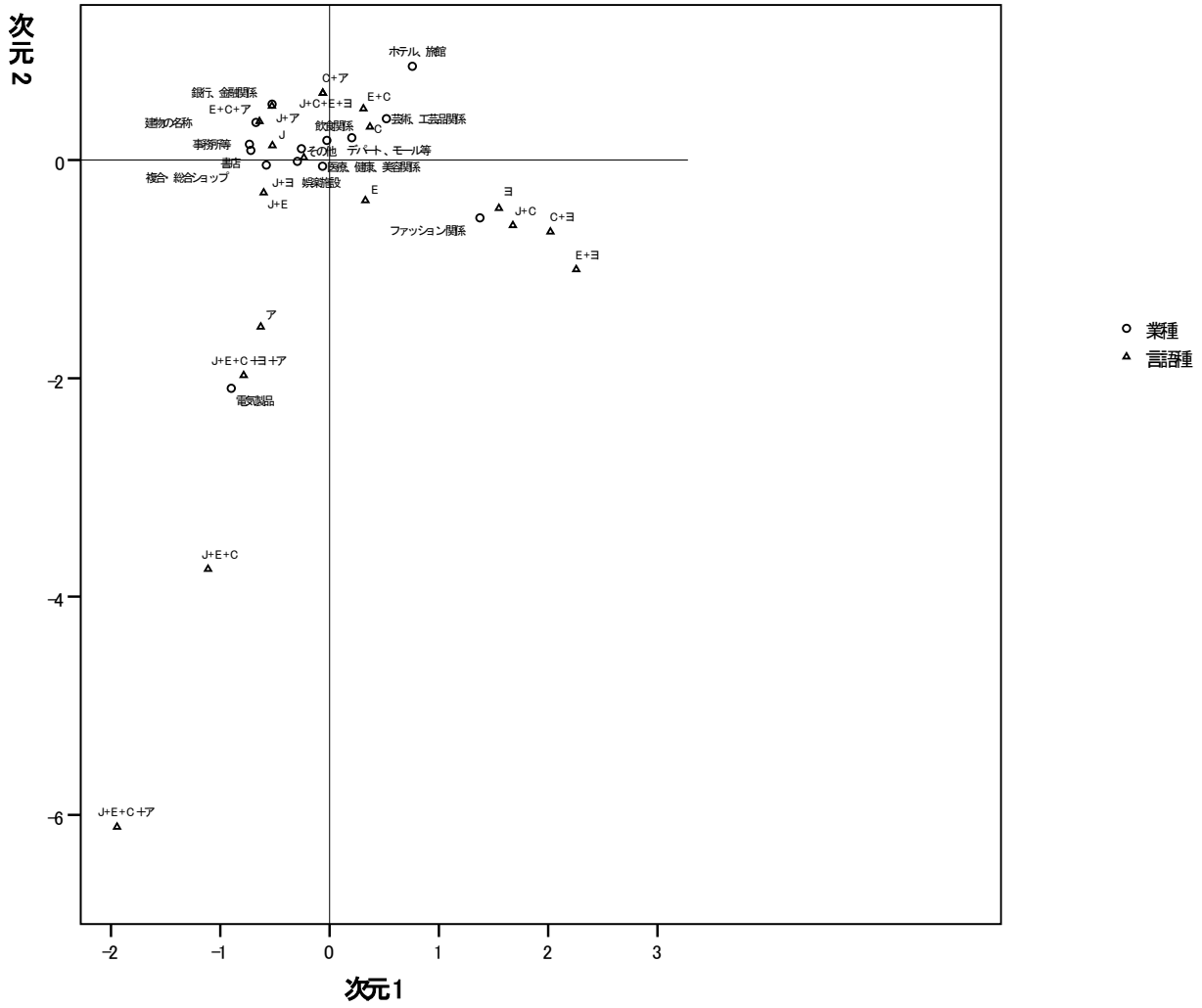


図 6 コレスポンド分析による業種と言語種

3.4.2 業種と文字種

ここでは、業種による言語景観の社会経済的属性と文字種の相関関係を考察する。

表 15 コレスポネンス分析による文字種ポイントの概要

行ポイントの概要 ^a										
文字種	マス	次元の得点			概要インシャー	寄与率				
		1	2	概要インシャー		次元のインシャーに対するポイント		ポイントのインシャーに対する次元		
						1	2	1	2	概要合計
漢字	.170	-1.125	.174	.022	.006	.015	.053	.081	.133	
ひらがな	.010	-1.128	1.198	.014	.029	.041	.392	.348	.740	
カタカナ	.030	.903	.107	.013	.055	.001	.857	.009	.867	
ローマ字	.237	-.324	-.868	.081	.056	.514	.136	.765	.901	
漢+ひ	.064	-.972	1.203	.075	.137	.266	.359	.433	.793	
漢+カ	.107	1.442	.118	.113	.501	.004	.872	.005	.876	
漢+ロ	.126	-.419	.065	.046	.050	.002	.211	.004	.215	
ひ+カ	.004	.884	1.227	.010	.007	.017	.136	.206	.342	
ひ+ロ	.001	-.542	.252	.004	.001	.000	.047	.008	.054	
カ+ロ	.034	.492	.009	.030	.019	.000	.121	.000	.121	
漢+ひ+カ	.021	.238	.631	.018	.003	.024	.029	.163	.193	
漢+ひ+ロ	.013	-.647	1.238	.015	.013	.059	.163	.471	.634	
漢+カ+ロ	.040	.977	.233	.030	.085	.006	.549	.025	.574	
ひ+カ+ロ	.000	
漢+ひ+カ+ロ	.015	.555	.459	.023	.011	.009	.090	.048	.139	
漢字(繁)	.070	-2.78	.132	.020	.012	.004	.121	.021	.142	
漢字(繁)+ひ	.000	-1.102	-3.628	.002	.001	.011	.069	.591	.661	
漢字(繁)+カ	.000	
漢字(繁)+ロ	.048	-.022	-.053	.013	.000	.000	.001	.004	.004	
漢字(繁)+ひ+カ	.000	
漢字(繁)+ひ+ロ	.000	
漢字(繁)+カ+ロ	.001	-1.351	1.732	.001	.002	.005	.343	.444	.787	
漢字(繁)+ひ+カ+ロ	.000	-1.312	-2.700	.010	.001	.006	.023	.076	.098	
アジア諸言語文字	.001	-.016	.572	.003	.000	.001	.000	.062	.063	
漢+アジア諸言語文字	.004	.955	.453	.066	.009	.003	.027	.005	.032	
ひ+アジア諸言語文字	.000	
カ+アジア諸言語文字	.000	
漢+ひ+アジア諸言語文字	.000	-1.351	1.732	.001	.001	.003	.343	.444	.787	
漢+カ+アジア諸言語文字	.001	-.772	1.333	.003	.002	.006	.102	.238	.340	
ひ+カ+アジア諸言語文字	.000	
漢+ひ+カ+アジア諸言語文字	.001	-.122	.968	.003	.000	.003	.002	.114	.117	
合計	1.000			.617	1.000	1.000				

a. 対称的正規化

ここでは、表14の寄与率の欄の中で文字種が次元のインシャーに対するポイント得点を見ながら、

図7上の配置を確認する。

次元1においては、得点が高い文字種には漢字+カタカナ 0.501、漢字+ひらがな 0.137 がある。

各業種は漢字+カタカナをよく使用するか、漢字+ひらがなをよく使用するかによって左右に分かれる。

次元2においては、得点が高い文字種にはローマ字 0.514、漢字+ひらがながある。縦方向から見ると、当然ながら、大半の業種の言語景観には漢字などの母国文字を多用する傾向がわかる。

3.4.3 業種と表記法

ここでは、業種による言語景観の社会経済的属性と表記法の相関関係を考察する。

表 16 コレスポネンダ分析による表記法ポイントの概要

行ポイントの概要 ^a									
表記法	マス	次元の得点		概要イネーシャ	寄与率				
		1	2		次元のイネーシャに対するポイント		ポイントのイネーシャに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
縦書き	.189	.905	-.027	.030	.799	.001	.991	.001	.991
左横書き	.719	-.198	-.098	.009	.146	.039	.612	.135	.747
両方	.069	-.228	1.448	.029	.019	.815	.024	.895	.919
右横書き	.023	-.554	-1.059	.025	.036	.146	.056	.185	.241
合計	1.000			.093	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

ここでは、表 16 の寄与率の欄の中で表記法が次元のイネーシャに対するポイント得点を見ながら、

図 8 上の配置を確認する。

次元 1 においては、得点が一番高い表記法には縦書き 0.799 がある。特に事務所は縦書き表記をよく採用することがわかる。

次元 2 においては、得点が一番高い表記法は両方 0.815 である。縦方向からみると、横軸の上部にある業種は両方、下部にある業種は右横書き表記、原点付近にある業種は左横書き表記を多数使用する傾向が見られる。

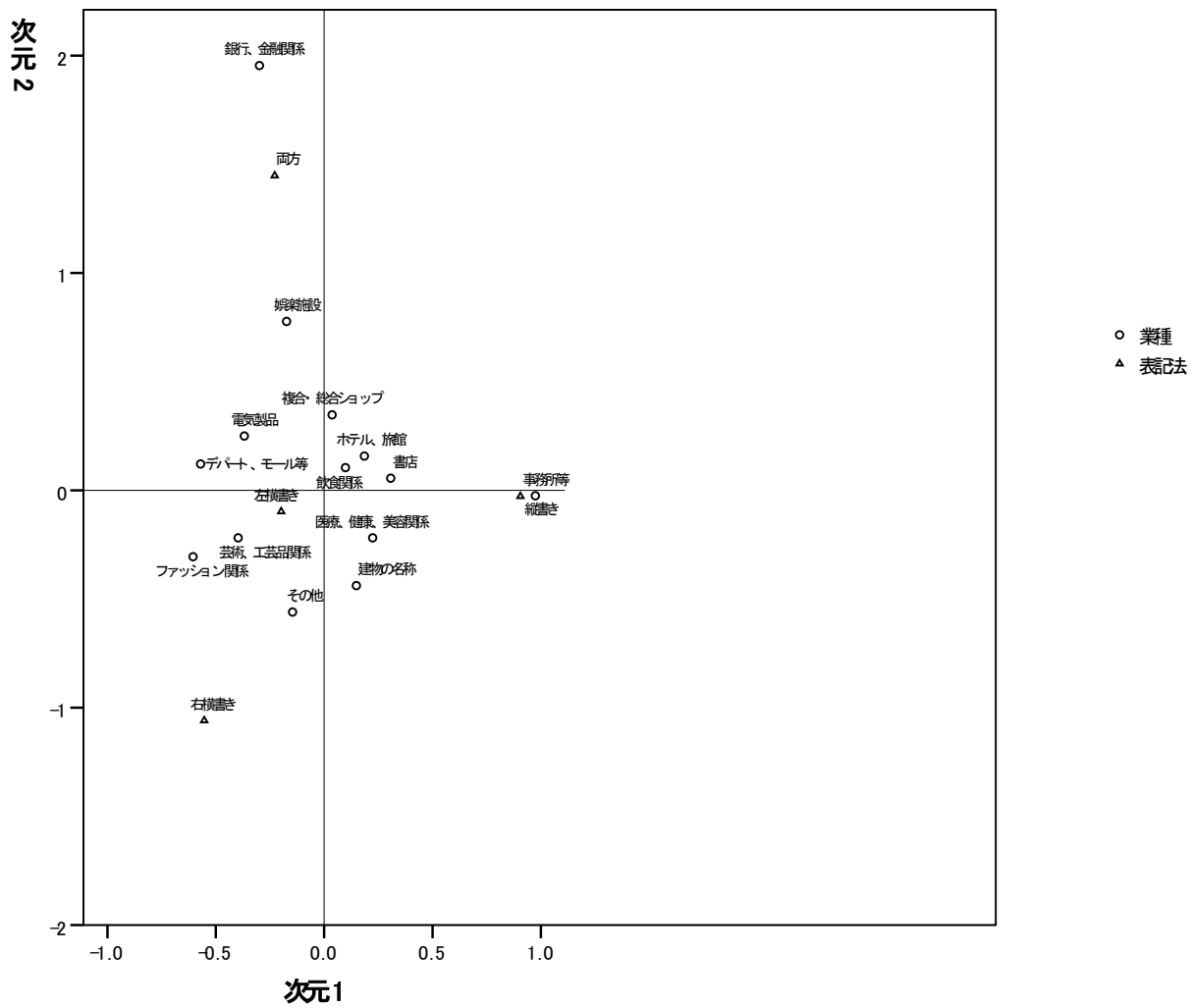


図 8 コレスポンド分析による業種と文字種

3.4.4 総合的考察

ここでは、言語景観のすべての項目のデータを一遍に多変量解析法のコレスポンデンス分析にかかけ、言語景観の形成過程について、1つの国に限らず、一般的法則性を探る。言語景観には言語的属性項目と社会的属性項目があるが、下位項目まで見ていくと、数が増える。言語景観も様々な要因が複雑に絡み合っており、共同作用で形成した結果だと考えられる。1つの次元を1つの要因と解釈できることから、今回のコレスポンデンスによる分析は普段の次元2までよりもっと多く、次元5まで分解した。各次元が持つ意味の解釈を試みる。

表 17 コレスポンデンス分析による全項目ポイントの概要

カテゴリ	P値	次元の得点					概要ポイント	寄与率												
		次元の得点						次元の得点に対するポイント					ポイントの得点に対する次元					概要合計		
		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5			
銀座	.025	-702	307	-987	768	-225	.154	0.17	0.04	0.05	0.28	0.02	0.05	0.09	0.02	0.08	0.04	0.04	0.04	0.19
表参道	.013	078	1830	-266	252	407	.171	0.00	0.70	0.02	0.02	0.04	0.00	0.15	0.03	0.02	0.02	0.06	0.16	0.16
新宿	.010	-761	238	-670	205	-135	.168	0.08	0.01	0.09	0.01	0.00	0.25	0.02	0.14	0.01	0.01	0.01	0.43	0.43
秋葉原	.015	-908	-164	2222	1312	445	.152	0.18	0.01	0.12	0.51	0.06	0.58	0.02	0.26	0.09	0.10	0.10	0.21	0.21
門前仲町	.016	-1053	-471	-711	-813	541	.156	0.26	0.06	0.15	0.21	0.09	0.81	0.14	0.28	0.05	0.15	0.15	0.173	0.173
南京路	.018	964	-153	013	-531	-1818	.146	0.24	0.01	0.00	0.10	0.119	0.81	0.02	0.00	0.18	0.208	0.309	0.309	0.309
新天地	.004	865	604	329	-2003	-165	.167	0.04	0.02	0.01	0.30	0.00	0.12	0.05	0.01	0.48	0.00	0.67	0.67	0.67
豊田	.014	1446	-1073	-285	-041	-2140	.159	0.42	0.26	0.02	0.00	0.127	0.130	0.63	0.04	0.00	0.205	0.403	0.403	0.403
道頓堀	.015	-983	-680	146	-1972	559	.151	0.20	0.10	0.01	0.110	0.09	0.65	0.26	0.01	0.193	0.15	0.301	0.301	0.301
日本橋電気街	.005	-780	-246	1886	783	-056	.164	0.04	0.01	0.34	0.06	0.00	0.13	0.01	0.58	0.10	0.00	0.83	0.83	0.83
心斎橋	.011	-379	883	-515	1173	-354	.166	0.02	0.14	0.06	0.29	0.03	0.07	0.32	0.09	0.47	0.04	0.99	0.99	0.99
飲食関係	.050	-065	-301	-078	-1577	464	.124	0.00	0.07	0.01	0.243	0.21	0.01	0.23	0.01	0.520	0.44	0.94	0.94	0.94
ファッション関係	.019	767	1897	-273	073	120	.167	0.16	0.12	0.03	0.00	0.01	0.48	0.259	0.05	0.00	0.01	0.312	0.312	0.312
事務所等	.019	-830	000	-449	1499	-152	.158	0.18	0.00	0.07	0.81	0.01	0.57	0.00	0.13	0.16	0.01	0.207	0.207	0.207
医療・健康・美容関係	.015	-150	318	-753	837	567	.163	0.00	0.02	0.16	0.20	0.09	0.01	0.06	0.27	0.33	0.15	0.82	0.82	0.82
建物の名称	.011	-633	-187	-452	1186	148	.158	0.06	0.01	0.04	0.31	0.00	0.20	0.02	0.08	0.52	0.01	0.82	0.82	0.82
デパート・モール等	.005	765	545	-238	436	-1342	.171	0.04	0.02	0.01	0.02	0.17	0.12	0.05	0.01	0.03	0.26	0.47	0.47	0.47
銀行・金融関係	.004	-210	157	-226	202	-1275	.150	0.00	0.00	0.00	0.00	0.14	0.01	0.01	0.01	0.01	0.24	0.24	0.24	0.24
芸術・工芸品関係	.020	891	-423	-396	397	-1386	.154	0.22	0.06	0.06	0.06	0.97	0.71	0.14	0.10	0.10	0.161	267	267	267
娯楽施設	.006	-335	-340	568	-805	081	.161	0.01	0.01	0.04	0.08	0.00	0.03	0.03	0.07	0.13	0.00	0.25	0.25	0.25
書店	.001	-125	-023	-900	526	722	.165	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.02	0.01	0.01	0.04	0.04	0.04
電気製品	.008	-440	-397	3850	1427	386	.154	0.02	0.02	0.27	0.32	0.02	0.07	0.05	0.11	0.65	0.04	483	483	483
複合・総合ショップ	.003	-602	-231	2041	1439	1435	.151	0.01	0.00	0.21	0.11	0.11	0.04	0.01	0.39	0.19	0.18	0.81	0.81	0.81
ホテル・旅館	.001	1502	-714	102	-361	-3652	.169	0.04	0.01	0.00	0.00	0.37	0.13	0.03	0.00	0.01	0.56	0.72	0.72	0.72
その他	.007	280	-746	-622	612	1748	.169	0.01	0.06	0.05	0.05	0.41	0.02	0.14	0.08	0.08	0.62	0.94	0.94	0.94
縦書き	.043	-952	-521	-547	021	-174	.125	0.55	0.19	0.24	0.00	0.03	0.219	0.58	0.54	0.00	0.05	0.337	0.337	0.337
左横書き	.134	217	298	146	-054	-005	.039	0.09	0.19	0.05	0.01	0.00	0.113	0.187	0.38	0.05	0.00	0.343	0.343	0.343
右横書き	.004	2717	-3118	-1365	1218	2202	.178	0.41	0.61	0.14	0.11	0.37	0.113	0.132	0.22	0.17	0.54	0.337	0.337	0.337
J	.083	-992	-282	-172	079	143	.084	0.116	0.11	0.05	0.01	0.03	0.682	0.49	0.15	0.03	0.10	0.760	0.760	0.760
E	.059	549	572	489	-020	-057	.105	0.25	0.31	0.27	0.00	0.00	0.119	0.114	0.71	0.00	0.01	0.305	0.305	0.305
C	.046	1427	-938	025	-017	-530	.120	0.133	0.65	0.00	0.00	0.26	0.550	0.209	0.00	0.00	0.55	814	814	814
ヨーロッパ諸言語	.014	572	2600	-442	-369	536	.174	0.07	0.17	0.05	0.04	0.08	0.19	0.347	0.09	0.06	0.12	0.393	0.393	0.393
アジア諸言語	.002	-511	-1275	7490	-973	-1136	.122	0.01	0.04	0.175	0.03	0.04	0.02	0.14	0.42	0.07	0.09	0.434	0.434	0.434
漢字	.102	-331	-447	-001	-090	-507	.062	0.16	0.33	0.04	0.02	0.52	0.128	0.206	0.20	0.07	0.216	576	576	576
ひらがな	.022	-1150	-622	-001	-1300	505	.131	0.42	0.14	0.00	0.73	0.11	0.158	0.41	0.00	0.148	0.22	0.368	0.368	0.368
カタカナ	.043	-1044	-106	-031	738	222	.114	0.67	0.01	0.00	0.45	0.04	0.288	0.03	0.00	0.105	0.09	406	406	406
ローマ字	.087	399	850	157	-003	076	.081	0.20	0.12	0.04	0.00	0.01	0.120	0.479	0.14	0.00	0.03	615	615	615
アジア諸言語文字	.002	-511	-1275	7490	-973	-1136	.122	0.01	0.04	0.175	0.03	0.04	0.02	0.14	0.42	0.07	0.09	0.434	0.434	0.434
繁体字	.020	2025	-1479	-237	526	1308	.147	0.119	0.72	0.02	0.11	0.69	0.399	0.188	0.04	0.20	0.120	731	731	731
旺角	.007	1878	-1306	-159	382	2854	.173	0.35	0.25	0.00	0.02	0.11	0.099	0.56	0.01	0.03	0.165	324	324	324
油麻地	.005	2539	-2189	-195	1430	2945	.173	0.42	0.35	0.00	0.18	0.78	0.120	0.78	0.01	0.28	0.116	342	342	342
尖沙咀	.002	1461	3264	084	097	671	.184	0.07	0.41	0.00	0.00	0.02	0.020	0.86	0.00	0.00	0.103	109	109	109
銅鑼灣	.006	1383	1150	-154	455	1550	.178	0.17	0.14	0.00	0.03	0.30	0.48	0.29	0.00	0.04	0.44	126	126	126
蘭桂坊	.003	906	1651	915	-3871	1841	.193	0.04	0.15	0.05	0.96	0.22	0.010	0.29	0.08	0.132	0.29	208	208	208
合計	1.000						6.474	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000								

a. 対称的正規化

まず、表 17 の寄与率⁴の欄の中で言語種が次元のイナーシャに対するポイント得点を見ながら、**図 9**上の配置を確認する。

次元 1 においては、得点が高い項目として中国語 0.133 日本語 0.116 がある。使用言語によっては、中国か日本かというような国の区別がつく。

次元 2 においては、得点が高い項目としてヨーロッパ諸言語 0.157、ファッション関係 0.112 がある。次元 2 は欧米志向を表した属性があると考えられる。

次元 3 においては、得点が高い項目として電気製品 0.227、アジア諸言語 0.175、アジア諸言語文字 0.175、秋葉原 0.147 がある。次元 3 は秋葉原を代表とした電気専門街が近隣諸国の顧客を取り込もうという動きを意味する。

次元 4 においては、得点が高い項目として飲食関係 0.243、道頓堀 0.110 がある。次元 4 は日常生活と密接に関係する飲食関係の店が多い道頓堀を代表とした日本昔ながらの商店街を意味する。

次元 5 においては、得点が高い項目として豫園 0.127、南京路 0.119、旺角 0.111 がある。

3.4.4.1 節から、分解した次元をそれぞれ組み合わせて各次元の相関関係を考察していく。

⁴ イナーシャに対するポイントの寄与率とは、各項目が次元に対する影響度を表すものである。項目の数値が大きいほど、この項目はこの次元に対する影響度が高いことを意味する。

まず、**図9**のように、横方向からみると、次元1は使用言語（中国語か日本語）によって、縦軸を境に、日本が左側、中国が右側というように、左右に分かれる。

そして、**図10**のように、縦方向からみると、次元2はヨーロッパ諸言語及ヨーロッパ諸言語を多用するファッション関係であるかどうかを基準に、言語景観にける言語的属性と社会的属性のすべての項目が上下にプロットされる。

言語使用の視点から総合的に考察すると、上から下まで、ヨーロッパ諸言語と英語を多用するグループ、母国語の日本語・中国語また英語を満遍なく使用するグループ、母国語の日本語あるいは中国語を中心に使用するグループの3つに分類できる。この3つのグループは言語的特徴により、それぞれ言語景観の欧米志向型、折衷志向型、本国志向型（日本志向か中国志向）と名付けてみた。この分類から、言語景観の言語使用においては、国が異なるものの、共通している使用パターンがあると推察される。そして、社会が言語に影響するという観点から考えると、各グループの特徴は、言語的属性項目の使用状況は社会的属性項目の共同作用でもたらした結果であり、逆に言えば、社会的属性項目はいかに言語景観の形成に影響するかが言語的属性項目の使用状況により、解明される。

まず、欧米志向型のグループでは、欧米諸語またローマ字が多用されており、左横書き表記もそれに応じて多く用いられていることがわかる。業種のファッション関係、医療、健康、美容関係は欧米から多くものを摂取しているため、英語及びヨーロッパ諸言語使用の多いことがこの結果に表れている。次に、折衷志向型のグループでは、バラエティーに富んだ業種に対応する多言語と多文字種の併用が多数存在している。そして、本国志向型のグループでは、漢字あるいは繁体字（中国語）ならびに、縦書き表記と右横書き表記が主であることが特徴的である。

4 日本における言語景観

本章では、第3章の横断的考察の結果を踏まえて、日本の東京・大阪における言語景観をさらに細かく分析、考察する。最初に使用率を項目別に概観するのは、言語景観の使用傾向が全体として把握しきれないことを確認し、本研究において単純集計以外の方法を導入して、より明確な分析を試みる。

本章の構成は下記のようなものである。

まず、業種による東京・大阪の調査地域が担う都市機能から、地域概況を紹介し、調査地域の分類を行う。そして、地域別で各言語的属性の使用率を見た上、言語的属性項目と社会的属性項目の間の相関関係を多変量解析法コレスポンデンス分析で考察する。また、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、通時的変化の考察を試みる。単純集計以外の分析技法による考察結果について述べる。

4.1 地域概況

本節では、業種によって、東京・大阪における調査地域の特徴を概観する

4.1.1 東京

調査地域は、銀座地域、青山通り表参道周辺、新宿駅東口、秋葉原、門前仲町周辺という5つの地域のメインストリート⁵を選んだ。本研究では、便宜上銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町と呼ぶことにする。

図13では、各地域における業種の分布を見ると、業種の地理的差が大きくかつ分布が非常に整然としていることを明示している。地域は、①秋葉原、②門前仲町、③新宿、銀座、表参道に3区分される。

秋葉原では、電気製品を扱う売場と漫画本および関連グッズを扱う複合・総合ショップが数多くある。門前仲町は、昔ながらの下町として、飲食関係の店と各種の日常生活と関わりが深い施設が圧倒的に多い。さらに、業種が秋葉原や門前仲町より豊富という意味で、新宿、銀座、表参道を一つのグループにまとめることが考えられる。各地域における言語景観もこの業種の分布と各地域の一般的イメージを反映することが推察される。

⁵ 銀座は東京高速道路高架下にある銀座通り入口交差点から銀座8丁目交差点にかけての区間。表参道は原宿駅前付近から青山通りと交差する表参道交差点までの区間。秋葉原は蔵前橋通り末広町交差点から万世橋を通り、靖国通りの須田町交差点までの区間。新宿は新宿大ガード東交差点から四谷四丁目交差点にかけての区間。門前仲町は清澄通り一門前仲町交差点から富岡二丁目牡丹三丁目交差点までの区間。

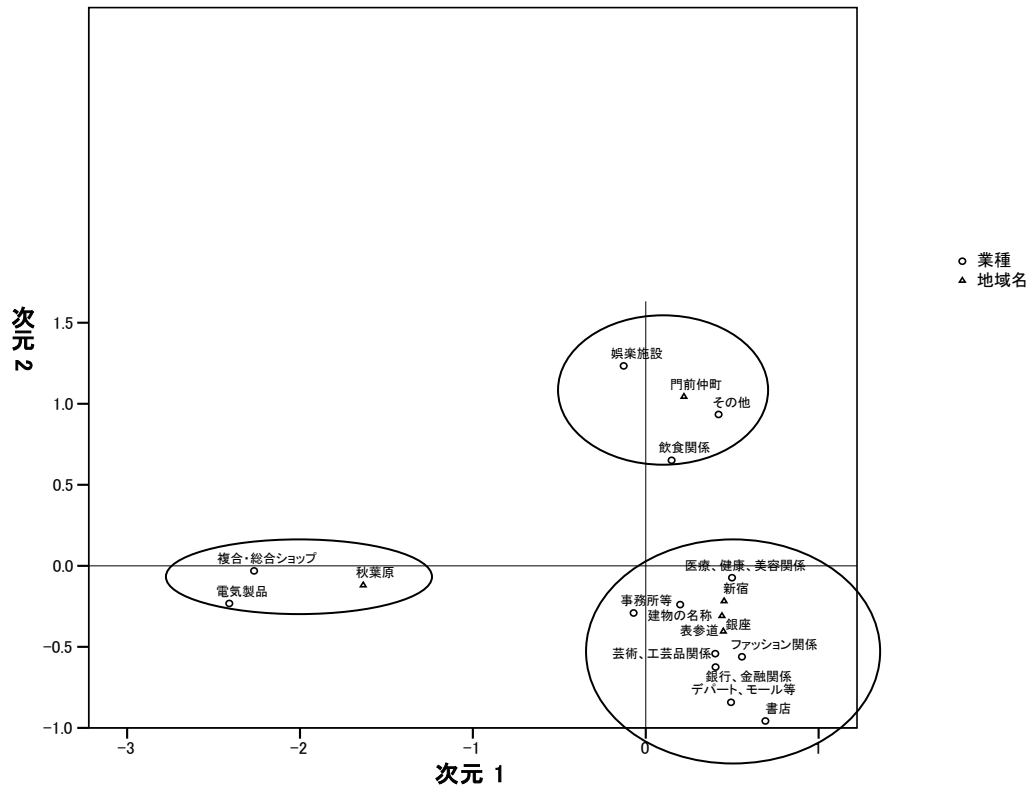


図 13 コレスポンド分析による地域と業種（東京）



写真 1 銀座



写真 2 新宿



写真 3 門前仲町



写真 4 表参道



写真 5 秋葉原

4.1.2 大阪

大阪の業種による地域分類は、**図 14** のようである。

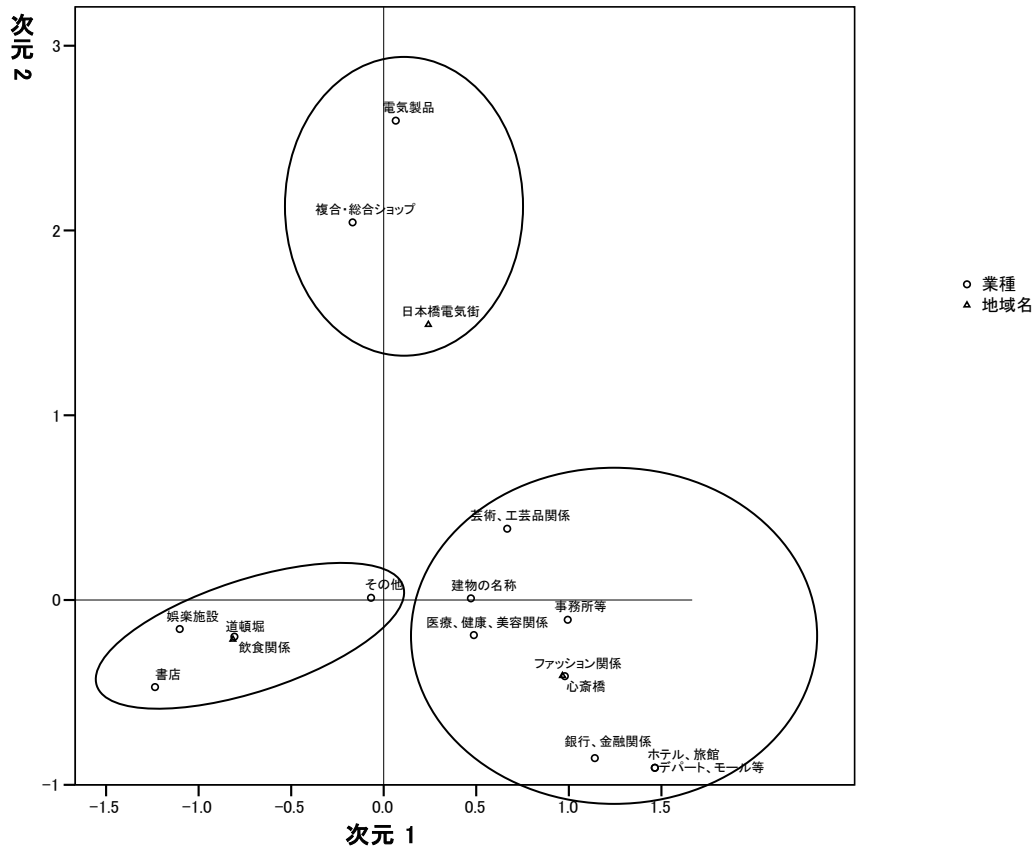


図 14 コレスポネンス分析による地域と業種 (大阪)

大阪に関しては、心齋橋、道頓堀、日本橋電気街の3つの地域のメインストリートを選んだ。

図 14 では、各地域における業種の分布を見ると、業種の地理的差が大きくかつ分布が非常に整然としていることがわかり、きれいに3区分される。

心齋橋は、業種が豊富であり、繁華街の類に入る。道頓堀は、昔ながらの下町として、飲食関係の店と各種の日常生活と関わりが深い施設が圧倒的に多い。そして、日本橋電気街では、東京の秋葉原と同様電気製品を扱う売場と漫画本および関連グッズを扱う複合・総合ショップが数多くある。



写真 6 心齋橋



写真 7 日本橋電気街



写真 8 道頓堀

4.1.3 総合

図 15 では、東京と大阪を総合的に見ても、各地域における言語景観は業種の分布が各地域の一般的イメージを反映すると推察される。各地域が担う都市機能も東京と大阪に類似性があり、日本における大都市の代表的パターンと見なされ、以下の3つに分類できる。

- ① 繁華街（銀座、新宿、心斎橋等）
- ② 下町商店街（門前仲町、道頓堀等）
- ③ 電気街（秋葉原、日本橋電気街）

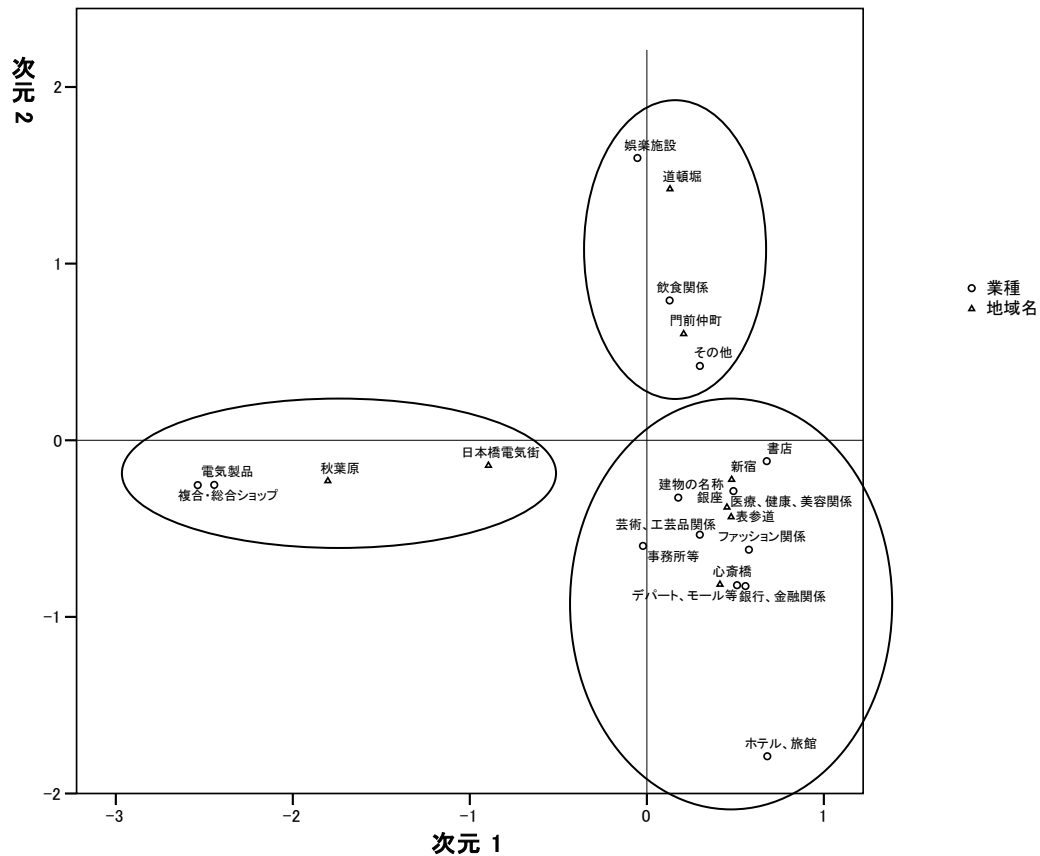


図 15 コレスポネンス分析による地域と業種（日本）

4.2 単純集計

本節では、地域別で言語的屬性項目の使用率を算出し、地域差を考察する。

4.2.1 言語種

表 18 言語景観の地域・言語種別 01 型データサンプル数内訳

	J	C	アジア諸言語	ヨーロッパ諸言語	E
門前仲町	281	6	0	4	53
道頓堀	271	8	11	0	68
銀座	360	9	3	55	108
秋葉原	236	11	5	8	99
新宿	141	0	2	17	59
日本橋電気街	81	7	6	3	37
心齋橋	136	0	1	35	76
表参道	99	3	1	74	102

各地域の言語景観における日本語の使用率が高いほうからソートすると、**図 16** で示した順番になっている。まず、門前仲町と道頓堀では、言語景観における日本語の使用率が7割以上であり、非常に高いことが特徴的である。

その一方、表参道と心齋橋では、言語景観における日本語の使用率はともに6割以下であり、特に表参道において、4割のレベルに止まっている。

他の地域では、日本語の使用率は6割と7割の間の範囲にあり、一定の水準に達している。

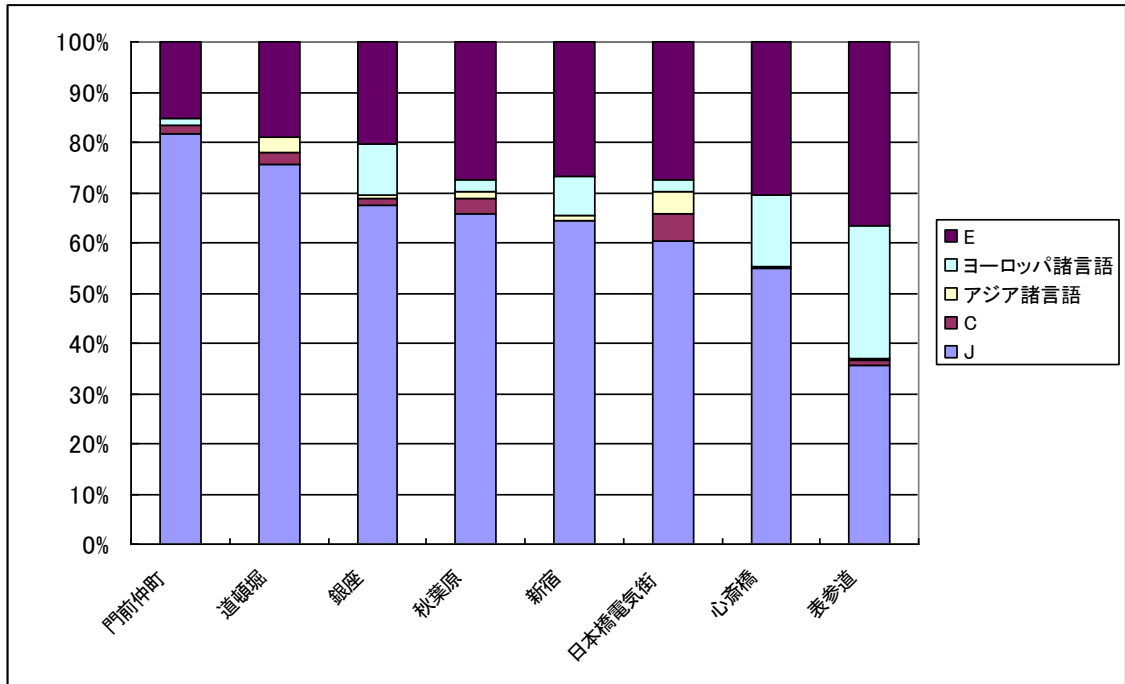


図 16 地域別言語種割合 (日本)

一方、英語及びヨーロッパ諸言語は使用率を見ると、日本語の使用率と反比例していることが分かる。

言語景観の使用言語選択においては、門前仲町、道頓堀の日本志向、表参道、心齋橋の欧米志向が顕著であると言えよう。地域の特徴が言語景観における言語使用に反映されていることがわかる。

4.2.2 文字種

表 19 言語景観の地域・文字種別 01 型データサンプル数内訳

	漢字	ひらがな	アジア諸言語文字	カタカナ	ローマ字
門前仲町	254	106	0	135	85
道頓堀	232	123	11	100	101
銀座	307	40	3	173	242
日本橋電気街	68	25	6	43	47
秋葉原	208	73	5	164	149
新宿	111	34	2	77	96
心齋橋	114	21	1	83	146
表参道	92	10	1	73	195

日本語の場合、文字体系には、漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字がある。ほとんどの欧米諸言語にはローマ字が使われている。中国語は漢字、その他のアジア諸言語の場合、朝鮮語はハングル、ヒンディー語はインド文字、タイ語はタイ文字を使っている。実際の言語景観における言語使用ではいくつかの文字種を組み合わせているものも多い。

図 17 は表 19 の数値を各地域における漢字使用率が高いほうからソートしたものである。

漢字使用率で並び替えられた各地域の順番は図の順番と対応し、ほぼ一致する。門前仲町、道頓堀は漢字使用率が高く、表参道、心齋橋は漢字使用率が低いことが読み取れる。この結果に応じて、漢字使用率が高い地域では、ひらがなの使用率も高い。

一方、ローマ字及びカタカナ表記は使用率を見ると、漢字の使用率と反比例していることが分かる。

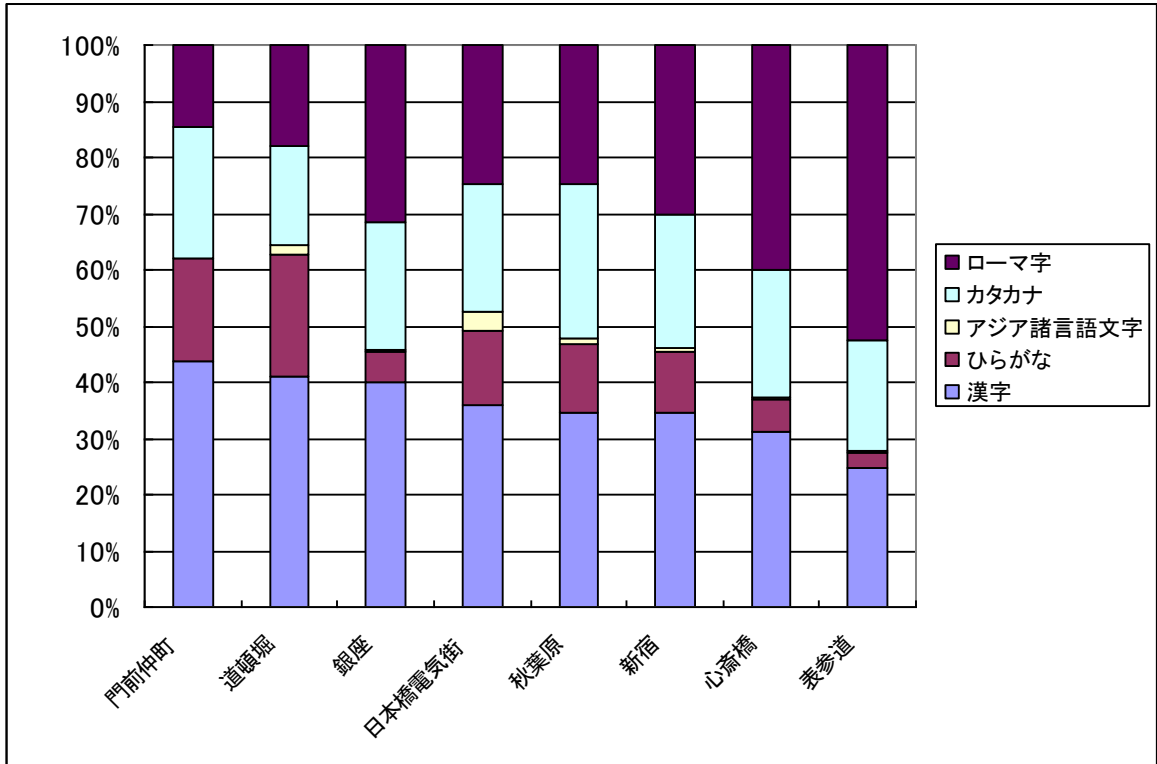


図 17 地域別文字種割合 (日本)

4.2.3 表記法

表 20 言語景観の地域・表記法別 01 型データサンプル数内訳

	縦書き	右横書き	左横書き
新宿	99	0	123
銀座	232	0	297
門前仲町	122	0	223
道頓堀	103	4	214
日本橋電気街	29	0	78
秋葉原	86	0	245
心齋橋	44	0	193
表参道	22	0	244

本研究での表記法という用語は特に言語景観における縦書き、右横書き、左横書きあるいは両方（縦書きと横書きを組み合わせたもの）という4種の言語表記のいずれかを指すものである。

なぜこの表記法に注目したかという点、縦書きと右横書きは中国語と日本語の伝統的な表記習慣であり、左横書きは欧米諸語表記の影響を受けたものであり、両方は両者を融合したものだからである。つまり、左横書きは欧米志向のシンボルで、縦書きと右横書きは日本志向のシンボルで、縦書きと横書きを組み合わせたものは両方に配慮を加えたものだという点を前提とした。データを加工する際に、両方はそれぞれ縦書きと左横書きに分解した。

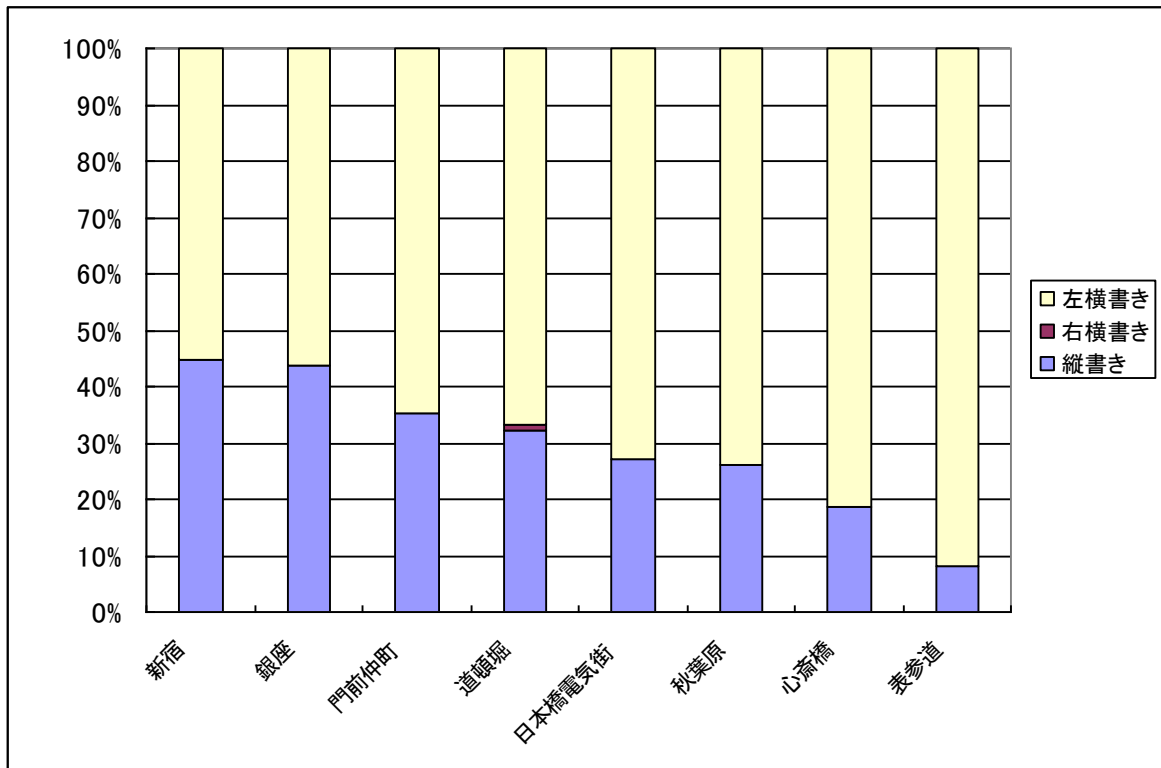


図 18 地域別表記法割合 (日本)

図 18 は表 20 の数値を各地域における縦書き使用率が高いほうからソートしたものである。

表参道と心齋橋では、言語景観における左横書き表記が約 8 割以上の高使用率が目立つ。これは言語種、文字種使用の調査結果と同様に表参道と心齋橋の欧米志向を反映した結果である。

地域別表記法の比較において、縦書き表記の使用率が一番高いのは門前仲町、道頓堀でなく、新宿、銀座のような繁華街であることから、表記法使用には日本志向、欧米志向以外に、他の物理的条件（立地条件等）による影響があることも考えられる。

4.3 多変量解析

ここまでは単純集計の結果を考察したが、各項目間の相関関係が立体的に見えてこないという問題点がある。この問題を解決するために、この節では、多変量解析法コレスポンデンス分析を適用し、東京、大阪における各地域の言語種、文字種、表記法をそれぞれ組み合わせて、そして、すべての項目の相関関係を多角的に考察し、相関関係を見出していく。

4.3.1 地域と言語種

表 21 コレスポンデンス分析による言語種ポイントの概要（日本）

言語種	マス	次元の得点		概要イナーシャ	寄与率				
		1	2		次元のイナーシャに対するポイント		ポイントのイナーシャに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
J	.623	.338	.166	.032	.178	.093	.892	.099	.991
E	.178	-.646	-.158	.035	.186	.024	.856	.024	.879
C	.010	.137	1.132	.006	.000	.067	.012	.366	.378
ヨ	.077	-1.649	-.034	.087	.527	.000	.970	.000	.970
ア	.002	.028	.884	.004	.000	.008	.000	.059	.059
E+ヨ	.001	-2.108	-1.075	.005	.015	.009	.496	.059	.555
E+C	.000
E+C+ヨ	.000
E+C+ア	.000
E+C+ヨ+ア	.000
C+ヨ	.000
C+ア	.000
J+E	.085	.344	-.664	.014	.025	.204	.292	.500	.792
J+E+C	.002	.771	-1.193	.011	.003	.014	.038	.042	.080
J+ヨ	.010	-.698	.658	.006	.012	.022	.314	.128	.442
J+C	.000
J+ア	.003	.069	-.747	.004	.000	.010	.002	.091	.093
J+E+ヨ	.000
J+C+E+ヨ	.000	-3.548	-1.016	.003	.014	.003	.670	.025	.695
J+E+C+ア	.007	1.331	-3.736	.027	.030	.518	.180	.653	.833
J+E+C+ヨ+ア	.001	1.498	-1.983	.004	.008	.029	.284	.230	.514
合計	1.000			.238	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

ここでは、表21の寄与率の欄の中で言語種の次元のイナーシャに対するポイント得点を見ながら、

図19上の配置を確認する。

次元 1 においては、得点が高い言語種としてヨーロッパ諸言語 0.527、英語 0.186、日本語 0.178 がある。横方向から見ると、各地域は日本語をよく使用するか、英語、ヨーロッパ諸言語をよく使用するかによって、左右に分かれる。縦軸の左側には欧米志向、右側には日本志向の地域が集まっている。

次元 2 においては、得点が高い言語種としてヨーロッパ諸言語 0.527、英語 0.186、日本語 0.178 がある。日本語+英語+中国語+アジア諸言語 0.518、日本語+英語 0.024 がある。

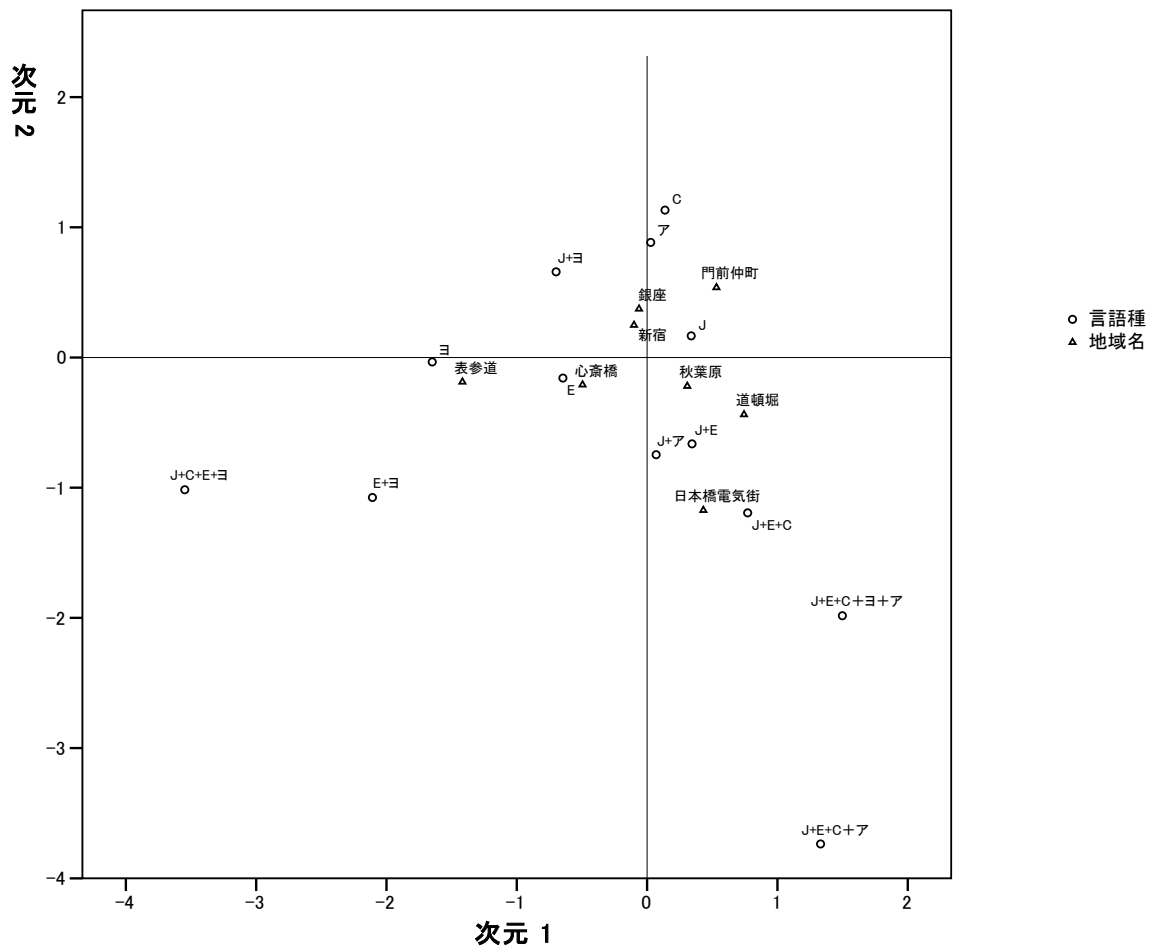


図 19 コレスポネンス分析による地域と言語種 (日本)

4.3.2 地域と文字種

表 22 コレスポネンス分析による文字種ポイントの概要（日本）

列ポイントの概要^a

文字種	マス	次元の得点		概要インシャー	寄与率				
		1	2		次元のインシャーに対するポイント		ポイントのインシャーに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
漢字	.157	.173	.348	.014	.011	.084	.142	.306	.448
ひらがな	.014	1.003	.594	.009	.033	.021	.644	.121	.764
カタカナ	.046	.135	-.194	.004	.002	.008	.086	.095	.181
ローマ字	.246	-.889	.033	.088	.462	.001	.935	.001	.935
漢+ひ	.098	1.229	.369	.074	.353	.059	.848	.041	.889
漢+カ	.163	.105	.156	.009	.004	.018	.084	.100	.184
漢+ロ	.069	-.108	-.045	.005	.002	.001	.074	.007	.080
ひ+カ	.006	.703	-.209	.002	.007	.001	.591	.028	.619
ひ+ロ	.002	.670	.713	.005	.002	.005	.090	.054	.144
カ+ロ	.052	-.095	-.243	.006	.001	.014	.032	.109	.141
漢+ひ+カ	.032	.631	-.984	.013	.030	.137	.396	.516	.912
漢+ひ+ロ	.019	.735	.228	.007	.024	.004	.610	.031	.641
漢+カ+ロ	.060	-.308	-.273	.015	.013	.020	.156	.065	.222
ひ+カ+ロ	.000
漢+ひ+カ+ロ	.024	.597	-2.044	.027	.020	.439	.132	.826	.957
漢字(繁)	.000
漢字(繁)+ひ	.000
漢字(繁)+カ	.000
漢字(繁)+ロ	.000
漢字(繁)+ひ+カ	.000
漢字(繁)+ひ+ロ	.000
漢字(繁)+カ+ロ	.000
漢字(繁)+ひ+カ+ロ	.000
アジア諸言語文字	.002	-.258	.315	.004	.000	.001	.011	.009	.021
漢+アジア諸言語文字	.006	.896	-2.508	.019	.012	.178	.113	.473	.585
ひ+アジア諸言語文字	.000
カ+アジア諸言語文字	.000
漢+ひ+アジア諸言語文字	.000	2.362	-.065	.003	.006	.000	.359	.000	.359
漢+カ+アジア諸言語文字	.002	.358	.406	.003	.001	.001	.032	.022	.054
ひ+カ+アジア諸言語文字	.000
漢+ひ+カ+アジア諸言語文字	.002	1.924	-.938	.008	.016	.007	.340	.043	.383
合計	1.000			.316	1.000	1.000			

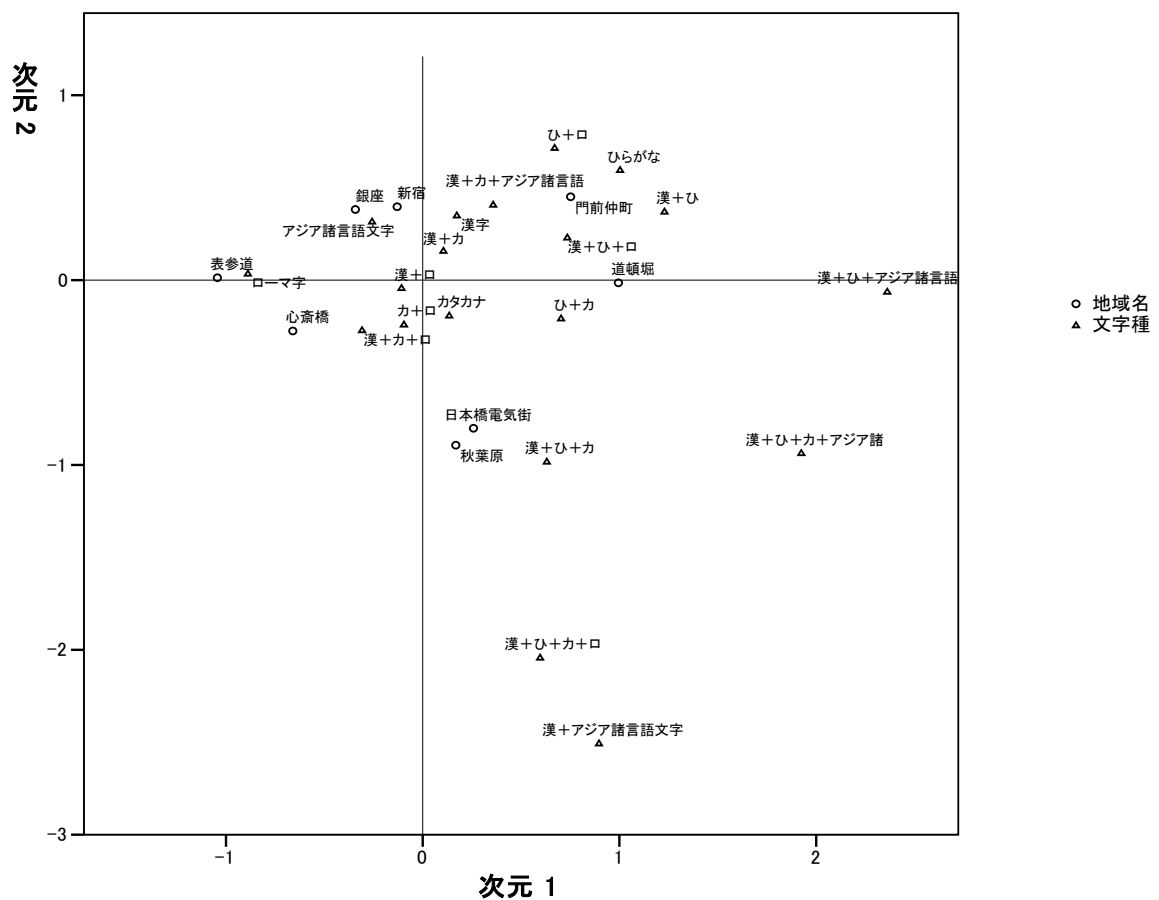
a. 対称的正規化

ここでは、表 22 の寄与率の欄の中で文字種の次元のインシャーに対するポイント得点を見ながら、

図 22 上の配置を確認する。

次元1においては、得点が高い文字種としてローマ字 0.462、漢字+ひらがな 0.353 がある。各地域はローマ字をよく使用するか、漢字+ひらがなをよく使用するかで左右に分かれる。横方向からみると、縦軸の左側には欧米志向、右側には日本志向の地域が多いことが確認できる。

次元2においては、得点が高い文字種として漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字 0.439、漢字+ひらがな+カタカナ 0.137 がある。縦方向からみると、横軸を境に、下部の秋葉原、日本橋電気街には様々に組み合わせて使用するという特徴があることが観察される。



4.3.3 地域と表記法

表 23 コレスポンド分析による文字種ポイントの概要 a (日本)

列ポイントの概要^a

表記法	マス	次元の得点		概要イータ	寄与率				
		1	2		次元のイータに対するポイント		ポイントのイータに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
縦書き	.261	-.846	.099	.053	.669	.021	.992	.006	.998
左横書き	.662	.364	.040	.025	.313	.009	.993	.005	.998
両方	.075	-.262	-.523	.006	.018	.171	.249	.425	.674
右横書き	.002	-.144	-7.235	.012	.000	.799	.001	.956	.957
合計	1.000			.095	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

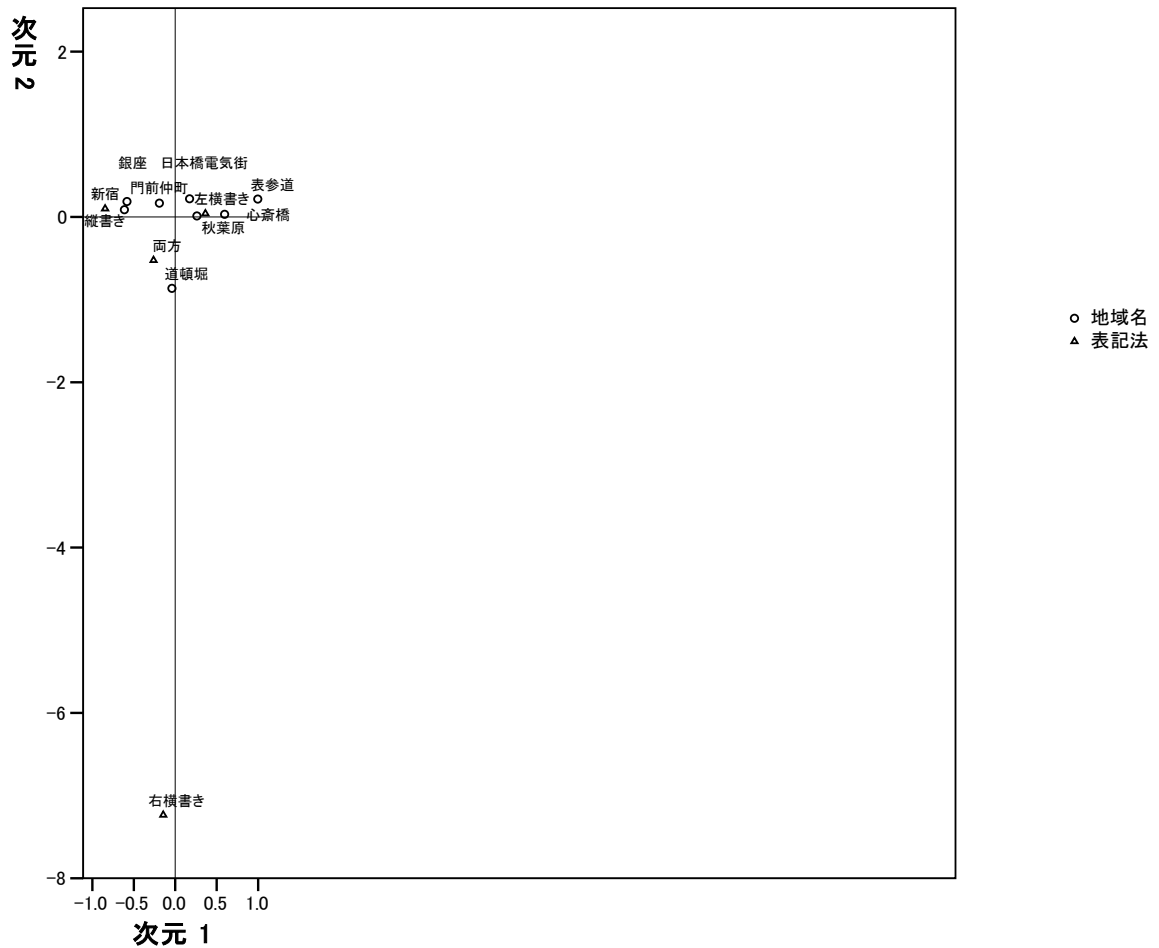


図 21 コレスポンド分析による地域と表記法 a (日本)

ここでは、表23の寄与率の欄の中で表記法が次元のイナーシャに対するポイント得点を見ながら、
 図21上の配置を確認する。

次元1においては、得点が高い表記法として縦書き0.669、左横書き0.313がある。各地域は縦書きと左横書きのどちらを多用するかで区分される。

次元2においては、得点が高い表記法として右横書き0.799がある。しかし、道頓堀で数例の右横書きサンプルが採取されただけで、他の地域は図のように、原点付近で極端に固まっているように見える。道頓堀以外の地域の区別をより明確にするために、道頓堀にある右横書き表記を例外と扱い、それを外してもう一回地域と表記法の相関分析を行った。

表24 コレスポネンス分析による表記法ポイントの概要b (日本)

列ポイントの概要 ^a									
表記法	マス	次元の得点		概要イナーシャ	寄与率				
		1	2		次元のイナーシャに対するポイント		ポイントのイナーシャに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
縦書き	.262	-.846	-.136	.053	.669	.069	.994	.006	1.000
左横書き	.663	.363	-.050	.025	.313	.024	.995	.005	1.000
両方	.075	-.261	.922	.006	.018	.907	.242	.758	1.000
合計	1.000			.083	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

2回目の考察では、再び表24の来寄与率の欄の中で言語種の次元のイナーシャに対するポイント得点を見ながら、図22上の配置を確認する。

次元1においては、得点が高い表記法には縦書き0.669、左横書き0.313がある。この数値は1回目と変わらない。

次元2においては、一番得点が高い表記法は両方（縦書きと横書きを組み合わせたもの）に変わった。図22から、横方向からみると、縦軸の左側には縦書き表記を多用する日本志向、右側には左横書き表記を多用する欧米志向地域が分布することが読み取れる。

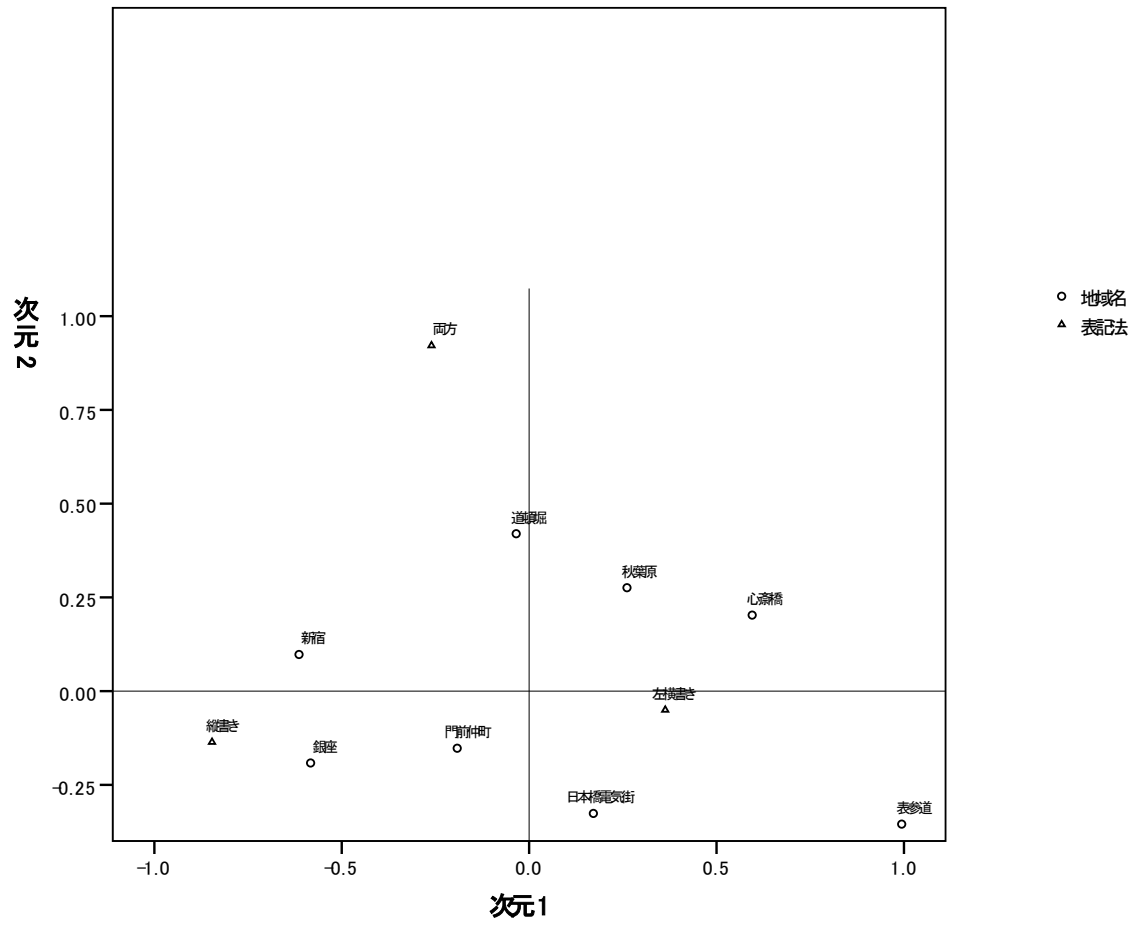


図 22 コレスポンド分析による地域と表記法 b (日本)

4.3.4 総合的考察

表 25 コレスポネンス分析による全項目ポイントの概要（日本）

列ポイントの概要^a

変数	マス	次元の得点		概要イナージャ	寄与率				
		1	2		次元のイナージャに対するポイント		ポイントのイナージャに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
銀座	.038	-.171	.550	.141	.002	.020	.005	.046	.051
表参道	.020	-1.812	.153	.164	.102	.001	.256	.002	.258
新宿	.016	-.073	.464	.163	.000	.006	.000	.012	.012
秋葉原	.023	.270	-1.311	.143	.003	.072	.008	.159	.166
門前仲町	.025	.782	.528	.147	.024	.012	.066	.027	.093
道頓堀	.022	.936	.004	.143	.031	.000	.088	.000	.088
日本橋電気街	.008	.240	-1.378	.161	.001	.027	.002	.052	.054
心斎橋	.017	-.894	.353	.160	.021	.004	.055	.007	.062
飲食関係	.047	.603	.231	.126	.027	.004	.087	.011	.098
ファッション関係	.016	-2.170	.309	.174	.114	.003	.270	.005	.275
事務所等	.026	.105	.326	.151	.000	.005	.001	.010	.011
医療・健康・美容関係	.017	-.312	.462	.161	.003	.006	.007	.013	.019
建物の名称	.014	.321	.425	.157	.002	.004	.006	.009	.015
デパート・モール等	.003	-1.231	.244	.187	.007	.000	.016	.001	.017
銀行・金融関係	.005	-.055	.223	.155	.000	.000	.000	.001	.001
芸術・工芸品関係	.012	-.772	.349	.167	.011	.003	.028	.005	.033
娯楽施設	.007	.270	-.387	.158	.001	.002	.002	.004	.006
書店	.001	.087	.525	.162	.000	.000	.000	.001	.001
電気製品	.011	.188	-3.018	.149	.001	.177	.002	.378	.380
複合・総合ショップ	.003	.295	-.971	.150	.000	.006	.001	.012	.014
ホテル・旅館	.000	-1.878	-.317	.162	.001	.000	.002	.000	.002
その他	.007	.287	.514	.168	.001	.003	.002	.006	.008
縦書き	.057	.834	.443	.112	.062	.020	.226	.056	.283
左横書き	.125	-.432	-.123	.048	.036	.003	.312	.022	.334
右横書き	.000	1.516	1.085	.183	.001	.001	.002	.001	.004
J	.124	.546	.190	.043	.058	.008	.546	.058	.604
E	.047	-1.037	-.592	.124	.078	.029	.259	.074	.334
C	.003	.784	-4.838	.142	.003	.141	.009	.315	.325
ヨーロッパ諸言語	.015	-2.346	.430	.170	.130	.005	.313	.009	.323
アジア諸言語	.002	1.128	-7.337	.121	.004	.214	.015	.562	.577
漢字	.107	.605	.130	.056	.061	.003	.445	.018	.463
ひらがな	.033	1.011	.201	.120	.053	.002	.182	.006	.189
カタカナ	.066	.340	.093	.092	.012	.001	.053	.003	.056
ローマ字	.079	-1.083	-.099	.092	.145	.001	.646	.005	.650
アジア諸言語文字	.002	1.128	-7.337	.121	.004	.214	.015	.562	.577
合計	1.000			4.875	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

表 25 中にあるイナージャに対するポイントの寄与率を次元別で見てみる。

次元 1 では、文字種のローマ字 0.145、言語種のヨーロッパ諸言語 0.130、業種のファッション関係 0.114 の順番でイナージャに対するポイントの寄与率の数値が大きい。

次元 2 では、言語種のアジア諸言語 0.214、文字種のアジア諸言語文字 0.214、業種の複合・総合ショップ 0.177 の順番でイナージャに対するポイントの寄与率の数値が大きい。

次に縦方向からみると、横軸を境に、中国語及びアジア諸言語・文字の高使用率によって、秋葉原と日本橋電気街は他の地域と分別されている。

言語景観の多言語使用パターンは多用される言語の特徴を基準に、本国志向型、欧米志向型、アジア志向型の3つに分類できることが考えられる。

本国志向型のグループでは、同じグループに入っている銀座、新宿、門前仲町、道頓堀を比較すると、繁華街と下町との区別があるものの、言語景観の言語使用において、縦書きで、しかも日本語の使用が主であることによって、いずれも日本志向がうかがえる。業種分布を見ても、建物の名称、各種の事務所、飲食関係が多い。

欧米志向型のグループでは、表参道、心齋橋は外国高級ブランド店の林立するおしゃれな町として、横書きで、しかも英語、ヨーロッパ諸言語を中心とする西洋言語の使用率が高いことによって、欧米志向がうかがえる。医療・健康・美容関係、芸術・工芸品関係との二つの業種も西洋から取り入れた部分が大きいため、西洋言語の使用が多いことがその結果に表れている。その原因は表参道、心齋橋に通っている利用者が日本人か外国人かを問わず、業種構成によるイメージ作りが言語景観の言語使用における多言語化を促進したためだと思われる。

アジア志向型のグループでは、秋葉原、日本橋電気街は、日本語の使用が割合的に、銀座や新宿とかわらないが、複数言語の使用と表記法の使用傾向に特徴がある。二種以上の複数の言語、例えば日本語、英語、中国語、韓国語との4ヶ国語によるものが多い。また、電気製品売り場、世界中に漫画ブームを引き起こした書店、娯楽施設としてのゲームセンターは、秋葉原に多いことがわかる。秋葉原は通っている顧客が日本人、外国人ともに多いため、それぞれの言語習慣に従って、縦書きと横書きを組み合わせたものを多用していると考えられる。これは、この3つの業種が日本人以外に、世界各地から来た顧客の利用を意識しているからだと推察される。したがって、秋葉原は、複数の言語を同時に扱い、縦書きと横書きを組み合わせたものを多用するという点から考えると、真の意味の多言語化が一番進んでいると言えよう。

以上の考察から、日本の言語景観における言語使用は本国志向型、欧米志向型、アジア志向型との3つのパターンに分類できた。そして、地域と社会経済的要因が言語景観における言語使用に大きな影響を与えたことを示唆した。また、日本の東京・大阪における景観に見られる言語使用の実態も把握できた。

4. 4 通時的考察

先行研究のような共時態の現状記述は必要不可欠なものであり、これまでの言語景観研究が果たした意義が大きい。しかし一方で、言語景観における通時的研究という視点を導入する必要性が生じていることも事実である。つまり、言語景観における言語使用の変化を進行中の言語変化現象と捉えるべく、将来的変化予測も含めた使用傾向変化を捉える視点として導入すべきである。

本節では、様々な先行研究及び他の研究者のデータを活用し、各地域間の比較を試みる。

4. 4. 1 文字種

表 26 各研究における文字種の内訳

文字種の組み合わせ	正井 (1969/1972)	染谷 (2002)	江 (2007) 銀座	江 (2007) 門前仲町	江 (2007) 新宿	江 (2007)・ 秋葉原	江 (2007) 表参道
漢字	1249	197	108	64	28	41	22
ひらがな	91	21	4	8	6	2	0
カタカナ	205	49	18	16	15	18	7
漢+ひ	330	220	35	65	16	19	2
漢+カ	399	130	91	52	39	52	29
漢+口	154	30	26	14	9	39	23
ひ+カ	44	10	3	3	1	3	0
ひ+口	64	10	0	2	2	1	0
カ+口	179	42	19	16	9	23	22
漢+ひ+カ	34	77	6	12	2	21	5
漢+ひ+口	25	27	5	11	6	4	2
漢+カ+口	120	44	37	13	10	25	16
ひ+カ+口	17	9	0	0	0	0	0
漢+ひ+カ+口	4	24	0	5	1	23	1
ローマ字	75	109	142	24	59	49	144

通時的変化を見るために、本研究と同質の先行研究を比較することを試みた。正井（1969/1972）と染谷（2002）のものは、調査目的、調査地域あるいは調査範囲が本研究と異なるが、いわゆる私的看板を扱ったという点で、本研究と同質なものと見なされる。ここでは、文字種の組み合わせ方という項で正井（1969/1972）や染谷（2002）の研究によるデータと比較する。文字種の各種組み合わせの件数はそれぞれの調査で得られたサンプルの総件数の占める割合を算出し、視覚化したものが図 24 である。

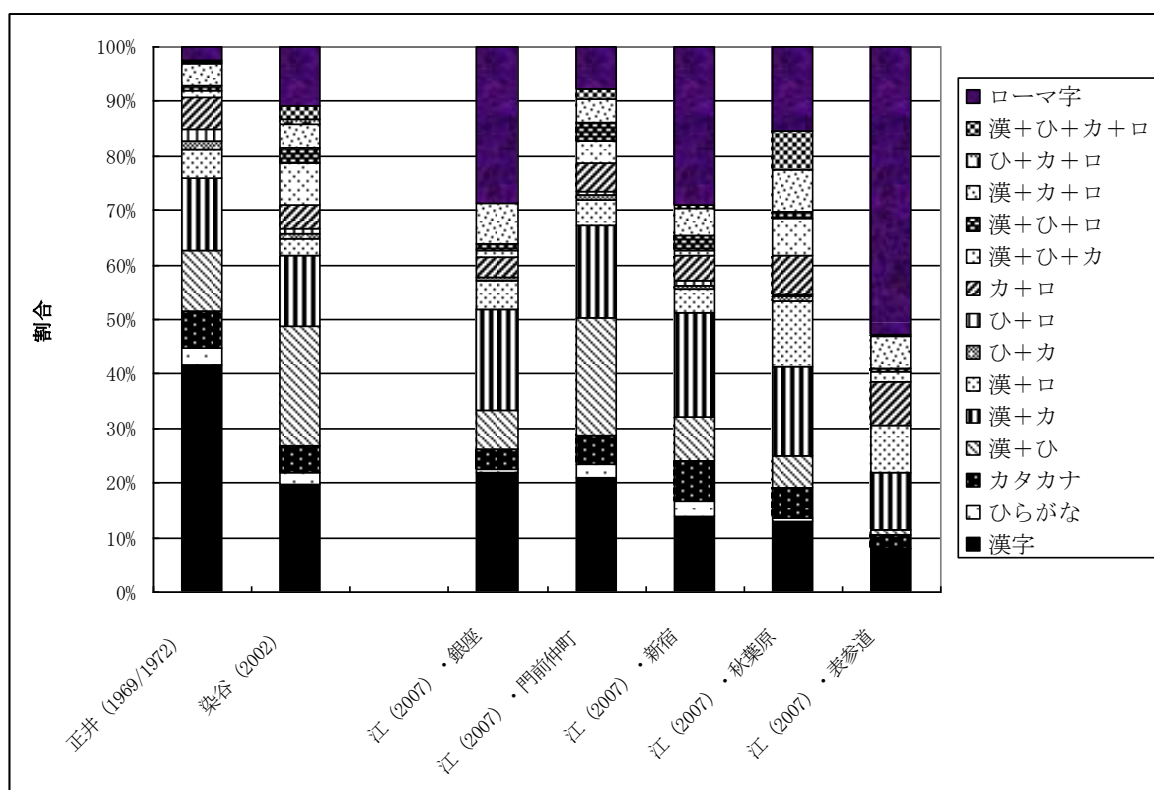


図 24 文字種の通時的変化

図 24 では、以下のようなことが読み取れる。

漢字のみでの表記は年代順で顕著に減少していることが観察される。言語景観における日本語使用は減少傾向にある。

ローマ字のみでの表記は急速に増加していることが観察される。西洋諸言語使用は増加傾向にある。門前仲町で得られた文字種の組み合わせ方の状況は、染谷（2002）による文字種の組み合わせ方の集計結果と比べると、似たようなパターンであることが観察された。

調査した5つの地域における漢字のみの表示の使用率を比較することによって、各地域の漢字のみの表示の使用率はそれぞれの地域の歴史の長さと同比例をなすのではないかと考えられる。このことから、同時点での地域別調査を中心とした本研究でも、ある程度通時的変化が推察されたとと言えるだろう。

つまり、本研究と正井（1969/1972）や染谷（2002）の研究との比較によって得られた漢字（日本語）使用の減少傾向とローマ字（欧米諸言語）使用の増加傾向が見られた。このことから、多言語化は通時的に進んでいることが証明できたといえる。

4.4.2 指数

4.4.2.1 多言語・多文字指数による散布図

表 27 日本における言語景観の地域別多言語・多文字指数平均値内訳

	多言語指数	多文字指数
表参道	1.93	1.64
新大久保	1.78	1.52
心齋橋	1.6	1.5
新今里	1.57	1.31
伊勢佐木町	1.56	1.27
銀座	1.44	1.38
新宿	1.43	1.37
日本橋電気街	1.38	1.34
秋葉原	1.34	1.3
三河島	1.35	1.17
道頓堀	1.22	1.2
門前仲町	1.19	1.18

表 27 は表 28 の基準で、日本各地域における多言語・多文字指数の平均値を算出したものである。

表 28 多言語指数点数表

多文字指数点数表

多言語指数			
日本		中国	
日本語	1点	中国語	1点
英語	2点	英語	2点
その他	3点	その他	3点

多文字指数	
母国語文字	1点
ローマ字	2点
その他	3点

図 25 は横軸を多言語指数得点で、縦軸を多文字指数得

点で表

したものである。

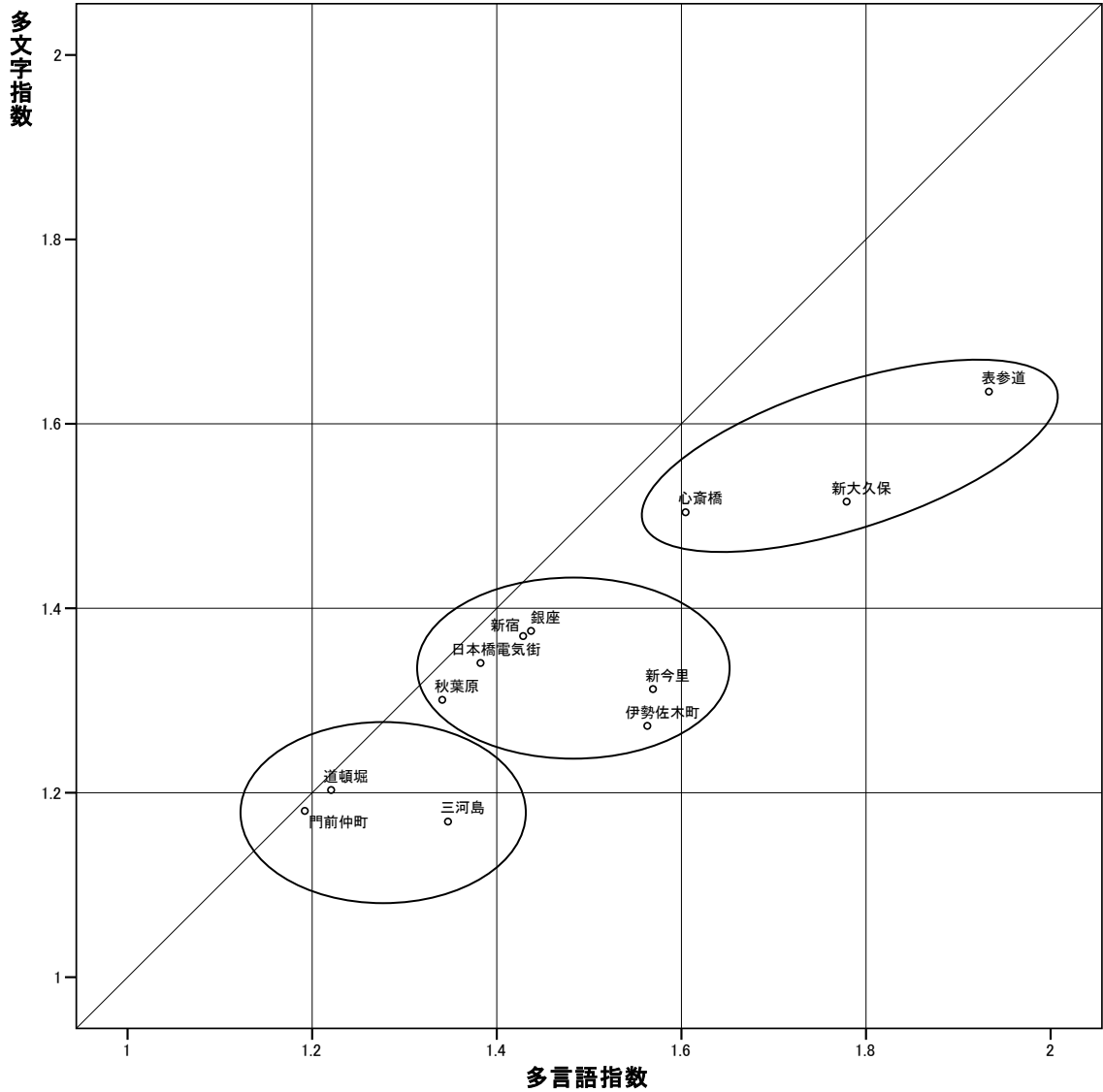


図 25 多言語・多文字指数散布図 (日本)

各地域が図 25 における位置をみると、右上がり、3つのグループに分けられる。

左下に位置するグループでは、言語景観における多言語・多文字指数の得点がともに低いことから、伝統を守り、多言語化が進んでいないことが考えられる。

中間に位置するグループでは、各地域は多言語化の途中段階にあると考えられる。

右上に位置するグループでは、言語景観における多言語・多文字指数の得点がともに高いことから、積極的に外国語を取り入れ、多言語化を進めている傾向がある。

4.4.2.2 文字指数に見られる通時的変化

表 29 日本における言語景観の地域別文字指数平均値内訳

明治横浜	伊勢佐木町明治	0.513513514
	中華街明治	1.39869281
	馬車道明治	1.681318681
山形県	Station Street Yonezawa	1.227642276
	Station Street Sagae	1.391304348
	Station Street Tendo	1.418181818
	Route 112 Sagae	1.585774059
	Station Street Yamagata	1.56281407
	Jasco Kita-Yamagata	1.625
	SATY Yonezawa	1.693430657
	Lala Park Tendo	1.737588652
コリアン	三河島	0.959363842
	伊勢佐木町	1.389170146
	新今里	1.448615588
	新大久保	1.796795877
近郊	生田	1.273001508
	新百合ヶ丘	1.729787234
米軍基地	相模原	1.731182796
	福生旧赤線区域	1.73245614
	福生国道16号線沿い	2.376344086
	1 横須賀中央駅	1.49
	2 中間	2.12
	3 横須賀基地付近	2.57
東京横浜	Sugamo Jizo-dori	0.78
	Azabu Juuban	1.21
	Landmark Plaza	2.14
	Roppongi Hills	2.4
東京	Akebono Shotengai 1995	0.97

	Akebono Shotengai 2000	1.081
	Omote Sando 1995	2.14
	Omote Sando 2000	2.293
	La foret Harajuku 1995	2.596
	La foret Harajuku 2001	2.952

表 30 日本における言語景観の地域別文字指数平均値内訳続き

大阪・江	道頓堀	1.245704467
	日本橋電気街	1.43627451
	心齋橋	1.765909091
東京・江	門前仲町	1.202786378
	秋葉原	1.374177632
	新宿	1.522167488
	銀座	1.547667343
	表参道	2.209302326

上記の表 29 と表 30 は表 31 の基準で地域別の文字指数平均値を算出したものである。

表 31 文字指数点数表

漢字	ひらがな	カタカナ	ローマ字
0	1	2	3

図 26 は表 29 と表 30 のデータを用い、各地域分類の中で最高得点地域の順番でソートしたものである。

図 26 では、言語景観における文字の多様化の進行状況には、右上がりの経年的変化と近郊が都会より遅れている現象が観察される。

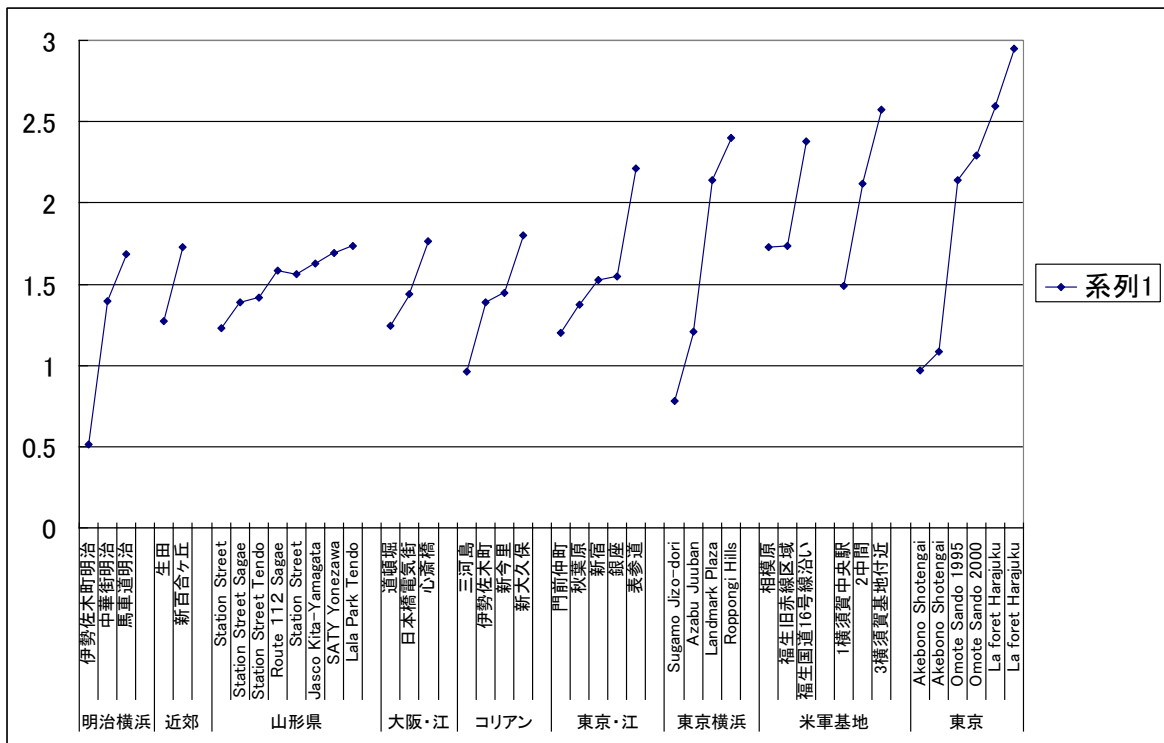


図 26 文字指数折れ線 (日本)

4.4.3 言語種による三角グラフ

表 32 日本の言語景観における言語種使用割合の内訳

	母国語	英語	その他
門前仲町	0.82	0.15	0.03
道頓堀	0.76	0.19	0.05
三河島	0.71	0.24	0.05
銀座	0.67	0.20	0.13
秋葉原	0.66	0.28	0.07
新宿	0.66	0.26	0.09
日本橋電気街	0.60	0.28	0.12
新今里	0.58	0.28	0.15
心齋橋	0.56	0.3	0.14
伊勢佐木町	0.54	0.35	0.11
新大久保	0.44	0.34	0.22
表参道	0.35	0.37	0.28

図 27 は、表 32 のデータを視覚化し、左から、母国語の使用率が高い順番でソートしたものである。

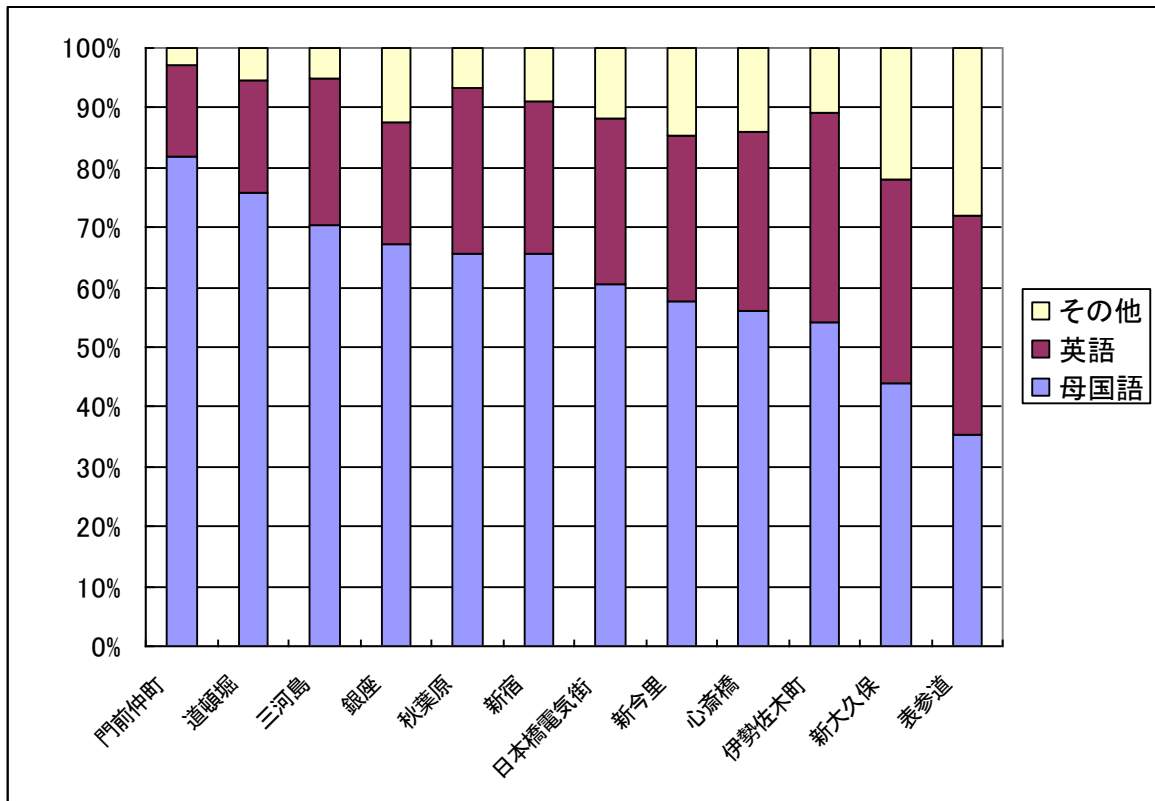


図 27 日本の言語景観における言語種使用割合

図 27 では、各地域の言語景観における言語種の割合が分かるが、3 種類の言語の相関関係を捉えるために、図 28 のように三角グラフを作成した。

英 語

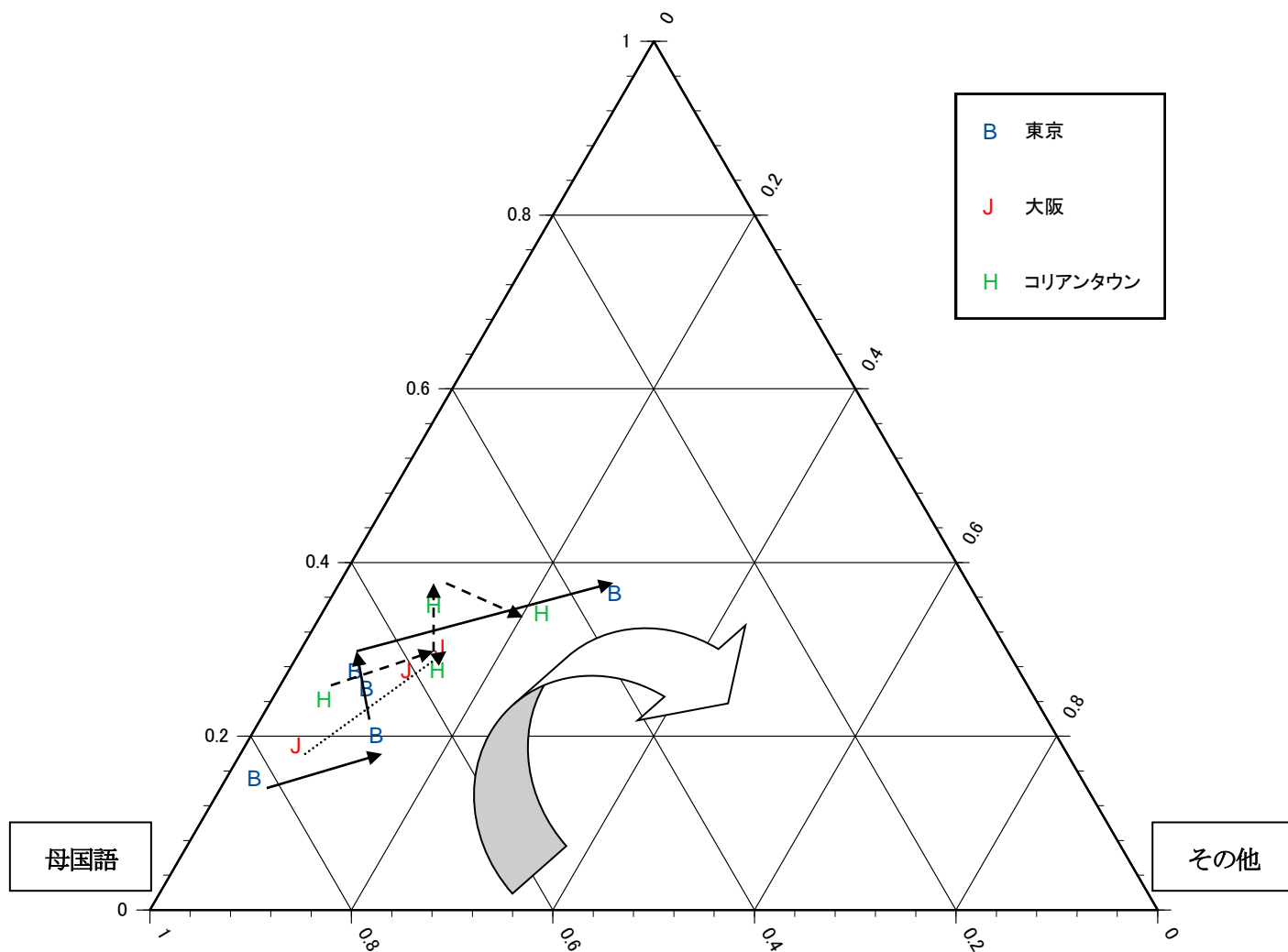


図 28 日本における言語種（母国語・英語・その他）使用割合による三角グラフ

日本語の使用は、原点である。英語使用増加は、欧米文化圏への接近を象徴する。多様化した国際化の風潮はその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の言語の使用を盛んにしている。

東京、大阪、コリアンタウンの各地域は大まかにみると、ともに右上がりの傾向が観察される。

つまり、言語使用の趨勢は母国語の使用から出発し、一旦英語使用が増加し、上に向かい、またその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の使用による共同作用で、バランスが取れた位置に到達するというプロセスである。図上矢印のように、日本は近代から現代までの言語景観における言語使用の変化過程が見られ、将来の多言語化の進行方向も推測できる。

5 中国における言語景観

本章では、第3章の横断的考察の結果を踏まえて、中国の上海・香港における言語景観をさらに細かく分析、考察する。最初に使用率を項目別に概観するのは、言語景観の使用傾向が全体として把握きれないことを確認し、本研究において単純集計以外の方法を導入して、より明確な分析を試みる。

本章の構成は下記のようなものである。

まず、業種による上海・香港の調査地域が担う都市機能から、地域概況を紹介し、調査地域の分類を行う。そして、地域別で各言語的属性の使用率を見た上で、言語的属性項目と社会的属性項目の間の相関関係を多変量解析法コレスポネンス分析で考察する。また、先行研究及び他の研究者の調査によって得られたデータを活用し、通時的変化の考察を試みる。単純集計以外の分析技法による考察結果について述べる。

5.1 地域概況

この節では、業種によって、中国の上海と香港における調査地域の概況を紹介する。

5.1.1 上海

調査地域は、南京路、豫園、新天地という3つの地域を選んだ。

図 29 の各地域における業種の分布を見ると、業種の地域差が日本ほど整然としていないが、日本の東京・大阪と似たようなパターンが読み取れる。南京路は、業種が豊富という意味で、上海一の繁華街に誇る。豫園は、昔ながらの下町として、飲食関係の店と各種の日常生活と関わりが深い施設が圧倒的に多い。新天地では、飲食関係の洋食レストラン、バーが多数ある。



写真 9 南京路



写真 10 新天地



写真 11 豫園

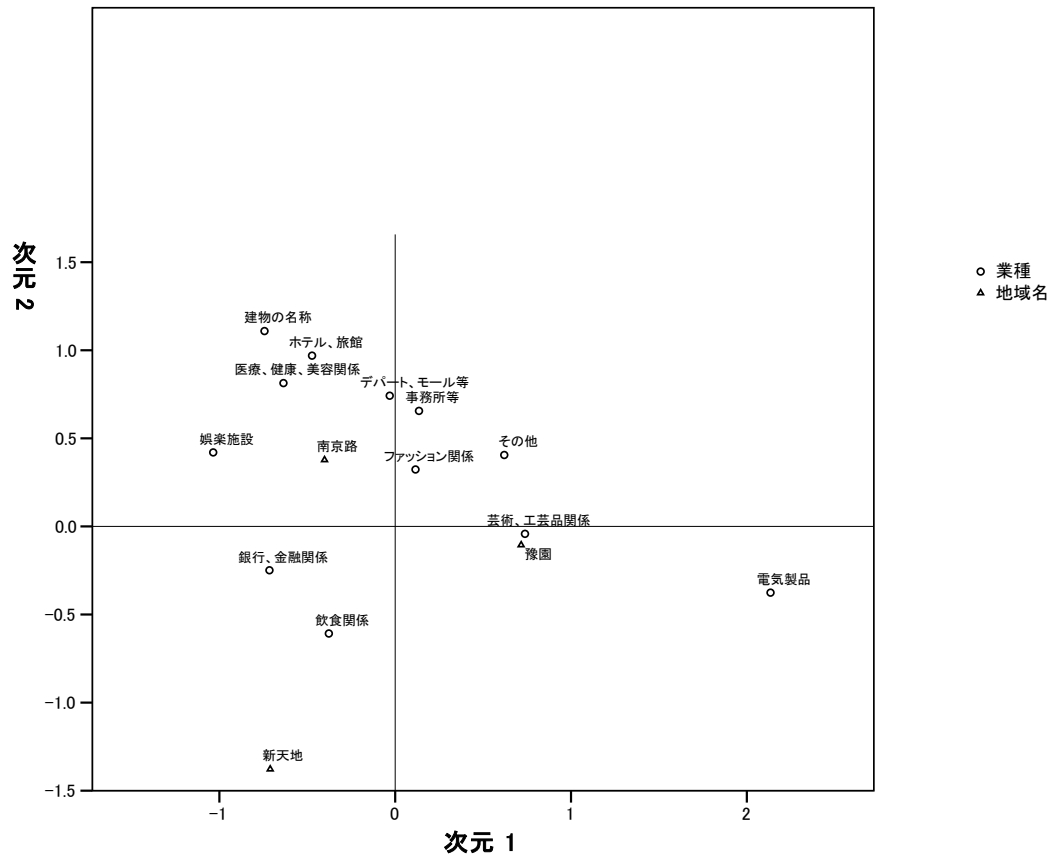


図 29 コレスポンド分析による地域と業種（上海）

5.2.2 香港

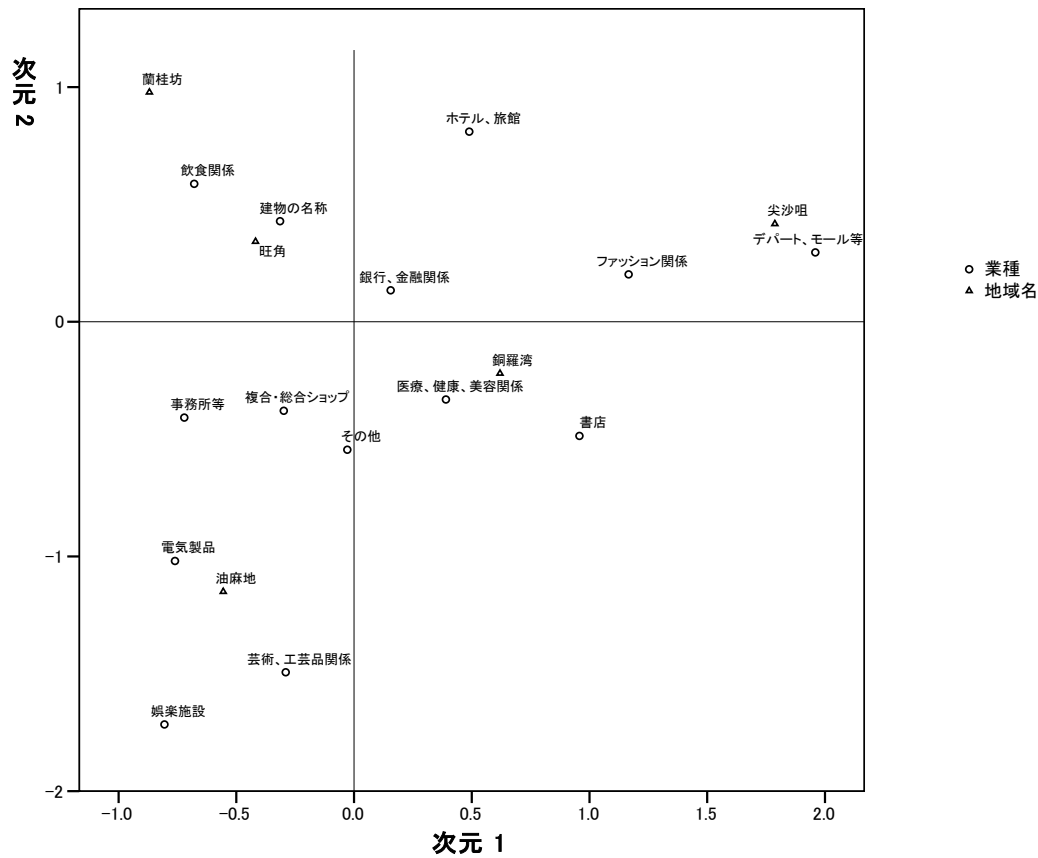


図 30 コレスポネンダンス分析による地域と業種 (香港)

調査地域は、油麻地、旺角、銅羅湾、尖沙咀、蘭桂坊という5つの地域を選んだ。

図 30 の各地域における業種の分布を見ると、上海と同様に日本ほどきれいに区分できないが、類似した傾向が見られる。銅羅湾、尖沙咀は、業種が豊富という意味で、繁華街の類に入る。油麻地、旺角は、昔ながらの下町として、飲食関係の店と各種の日常生活と関わりが深い施設が圧倒的に多い。蘭桂坊は上海の新天地と同様に、他の業種と比べると、飲食関係の洋食レストラン、バーの数が圧倒的に多い。

5.2.2.1 ストリートビューの応用

香港に関する調査⁶は、「Google ストリートビュー」による言語景観の研究を試みた。

「Google ストリートビュー」とは、2007年にアメリカで「Google」が、「Google マップ」と「Google Earth」のサイトページを使ってビルの上まで街路写真を見ることができる「Google ストリートビュー」のサービスを開始したものである。現在では、「Google マップ」で日本、アメリカ、フランス、イタリア、オーストラリアなどの主要都市でインターネットを使って、街路写真が見られる。日本では、札幌、小樽、仙台、東京、千葉、埼玉、横浜、川崎、鎌倉、大阪、京都、旭川、沖縄、名古屋等の地域をみることができるが、それ以外地域も順次に見られるようになりつつある。

「Google ストリートビュー」の利点は

- ① 現地まで行く必要がない。
- ② 現地に行くと現地の人に邪魔をされることがあるが、ストリートビューは現地の人への干渉がない。

しかし、その一方で「Google ストリートビュー」の欠点は

- ① 場所によってはストリートビューで見ることができない地域がある。
- ② 写真の解像度が低くて、何が書いてあるかが分からない場合がある。
- ③ 街の写真をいつ撮影したのかが分からない。

Google ストリートビューは車の上にカメラを載せて、写真を撮っている。そのため車が通れないような細い道は Google ストリートビューでは見られない。また、Google ストリートビューはいつ撮影されたのかが判断できない。工事用看板からおおよその日時は予想できるが、同じ地域でも撮影された日時は違っており、詳しくいつ撮影されたかわからないのである。

なお、「Google ストリートビュー」は昼間に撮影された写真を使って構成されている。そのため、実地調査も同様に昼間に撮影をした。

⁶ 香港においては、筆者が2009年香港の学会に行った際に、路上観察によって得た印象と比べても、大差がないことが確認されている。

5.2.2.2 歴史及び言語政策

周知のように、中国は多言語国家である。一般的に中国語とは共通語の北京語を指し、かつては官話と呼ばれていたが、国と地域により呼称が異なっている。中国大陸ではあまねく、広く通じるということから普通話（北京語を基にした簡体字標準語）と称され、あるいは漢語と表記されている。しかし、香港、シンガポールなどを含む東南アジアの華人社会では、華語と呼ばれている。

1997年中国に返還される前の香港では、公用語は英語と繁体字の中国語であるが、一般の生活用語は広東語という多重言語社会であった。

しかし、1997年に中国へ返還された後、普通話是中国の共通語であるため、香港に普及してくる。これまでの英語、広東語とともに普通話（北京語を基にした簡体字標準語）も香港の実質的公用語となり、学校でも教えられるようになった。

5.2 単純集計

5.2.1 言語種

中国は茫漠とした国土と悠久の歴史の中に多くの民族を擁しており、中国語以外の言語も多数存在する。概観すると、下記のようなものである。

- 55 の少数民族のうち回族と満州族が漢民族の言語と文字を使用
- 他の 53 の少数民族は独自の言語を使用
- うち 21 の少数民族は独自の文字を持っており 27 種類の文字が使用されている

中国に関する実地調査では、外国語以外に、中国の少数民族⁷の言語と文字はほとんど観察されなかったため、調査対象は中国語に限る。

表 33 中国における言語景観の地域・言語種別 01 型データサンプル数内訳

	C	J	アジア諸言語	E	ヨーロッパ諸言語
豫園	267	3	1	97	3
油麻地	89	0	0	36	0
旺角	114	18	0	51	1
南京路	304	18	3	192	25
新天地	36	3	0	55	10
銅羅湾	48	15	0	72	21
尖沙咀	11	2	0	27	19
蘭桂坊	7	0	0	50	0

⁷ 唯一観察されたのは少数民族のウイグル族のレストランの看板に使用されているウイグル語である。

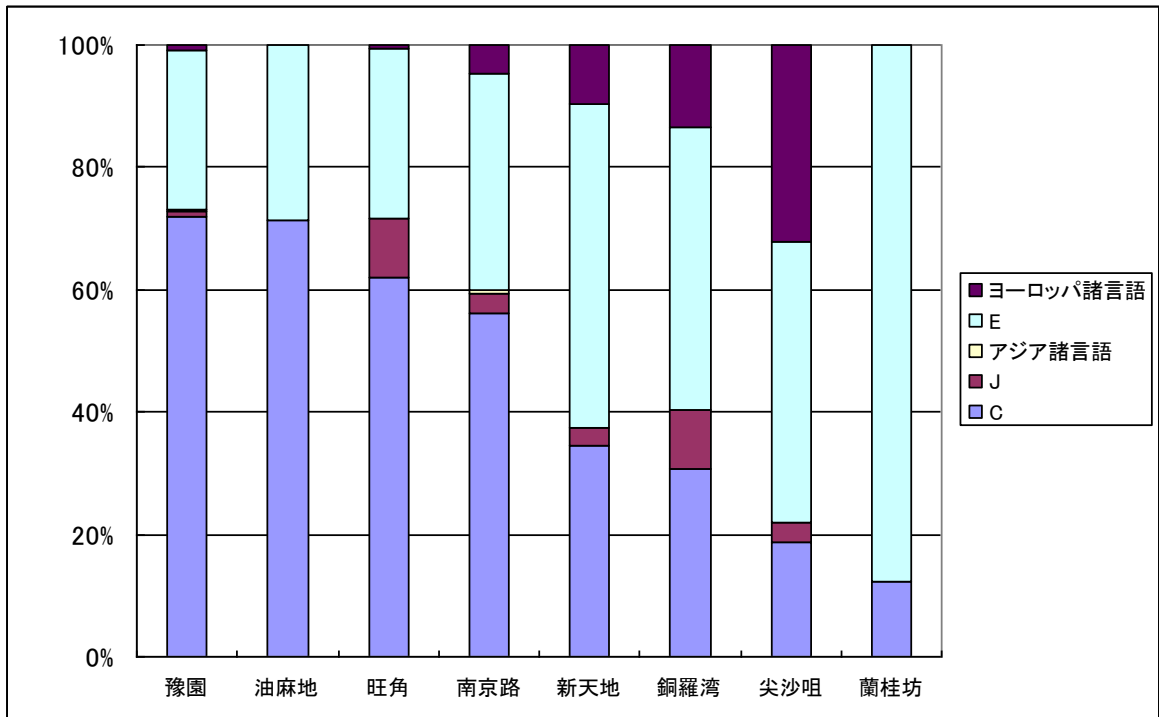


図 31 地域別言語種割合 (中国)

各地域の言語景観における中国語の使用率の順番に並べ替えると、図 31 で示した順番になっている。

豫園、油麻地、旺角、南京路では、言語景観における中国語の使用率がともに6割以上であり、高いことが特徴的である。それと対照的に、新天地、銅羅湾、尖沙咀、蘭桂坊では、言語景観における中国語の使用率が低いレベルで止まっており、ともに4割以下である。一方、英語及びヨーロッパ諸言語は使用率を見ると、中国語の使用率と反比例していることが見られる。

以上のことから、豫園、油麻地、旺角、南京路では、言語景観の本国志向、新天地、銅羅湾、尖沙咀、蘭桂坊では言語景観の欧米志向が顕著であることが考察される。

5.2.2 文字種

日本語の場合、文字体系には、漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字がある。ほとんどの欧米諸言語にはローマ字が使われている。中国語は漢字、その他のアジア諸言語の場合、朝鮮語はハングル、ヒンディー語はインド文字、タイ語はタイ文字を使っている。実際の言語景観における言語使用ではいくつかの文字種を組み合わせているものも多い。現在、中国で正書法として採用されている簡略化された漢字の内、正確には字全体が簡略化されたものだけを簡体字という。偏や旁など一部が簡略化されたものを含めたものは簡化字という。これらの漢字は『簡化字総表』にまとめられている。

1955年、中国文字改革委員会が「漢字簡化方案草案」を発表し、1956年1月、「漢字簡化方案」が正式に公布され、514字の簡体字と54の簡略化された偏や旁が採用された。数年の使用実験を経て、簡化字は1959年までの4度公布され、1964年には『簡化字総表』にまとめられた。

1977年、中国文字改革委員会は新たに「第二次簡化方案草案」を発表し、さらなる漢字の簡略化を目指した。しかし、この試みは文化大革命の直後ということもあって、あまりにも拙速な方案だったため、字体が簡略化されすぎて、「読みにくい」、「見苦しい」と猛烈に批判されて社会に混乱をもたらして不成功に終わり、8年間の試行で廃止された。これらの簡化字は俗に二簡字と呼ばれる。この後、若干の漢字の取扱に変更があったものの新たな大規模な文字改革は行われておらず、公式に定められた規範としての簡体字は安定期に入っていると言えよう。

現在、中国大陸やシンガポールのほとんどの出版物は完全に簡体字を採用しており、学校教育も簡体字しか教えず、繁体字の読解力が低下しつつある。一方、台湾や香港、北米の華僑社会などでは繁体字を使い続けており、簡体字があまり読めないという人が多い。

表 34 中国における言語景観の地域・文字種別 01 型データサンプル数内訳

	繁体字	漢字	ひらがな	アジア諸言語文字	カタカナ	ローマ字
油麻地	87	0	0	0	0	43
旺角	112	19	2	0	1	57
豫園	72	269	3	1	2	100
銅羅湾	50	8	4	0	2	105
南京路	53	320	3	3	4	229
尖沙咀	11	1	0	0	0	48
新天地	15	40	0	0	1	69
蘭桂坊	6	0	0	0	0	64

図 32 は表 34 を視覚化したものである。

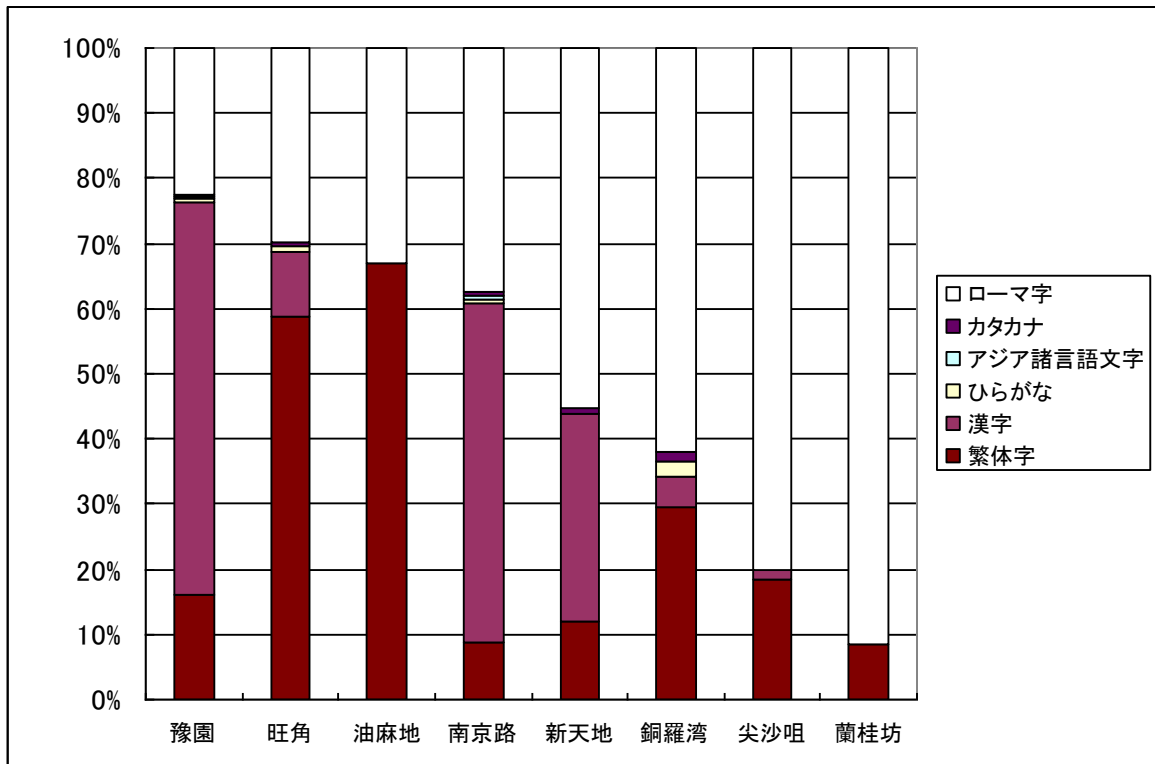


図 32 地域別文字種割合 (中国)

中国各地域の言語景観における文字種割合は図 32 で示した。各地域の言語景観における漢字（繁体字）と繁体字を合わせた漢字使用率の順番で並べ替えた。

漢字使用率順に並べ替えられた各地域の順番は図の順番と対応し、ほぼ一致する。この結果に対応して、漢字（簡体字）・繁体字の使用率が高い地域では、中国語の使用率も高い。一方、ローマ字表記は使用率を見ると、漢字の使用率と反比例していることが分かる。

5.2.3 表記法

ここでは、中国の言語景観における表記法の使用状況について述べる。

表 35 中国における言語景観の地域・表記法別 01 型データサンプル数内訳

	縦書き	右横書き	左横書き
新天地	18	0	70
南京路	72	5	320
豫園	17	30	246
旺角	7	15	116
蘭桂坊	3	1	62
銅羅湾	4	3	121
油麻地	2	20	69
尖沙咀	0	0	48

本研究での表記法という用語は特に言語景観における縦書き、右横書き、左横書きあるいは両方（縦書きと横書きを組み合わせたもの）という4種の言語表記のいずれかを指すものである。なぜこの表記法を注目したかという点、縦書きと右横書きは中国語と日本語の伝統的な表記習慣であり、左横書きは欧米諸語表記の影響を受けたものであり、両方は両者を融合したものだからである。

つまり、左横書きは欧米志向のシンボルで、縦書きと右横書きは中国志向のシンボルで、縦書きと横書きを組み合わせたものは両方に配慮を加えたものだという点を前提とした。データを加工する際に、両方（縦書きと横書きを組み合わせたもの）はそれぞれ縦書きと左横書きに分解した。

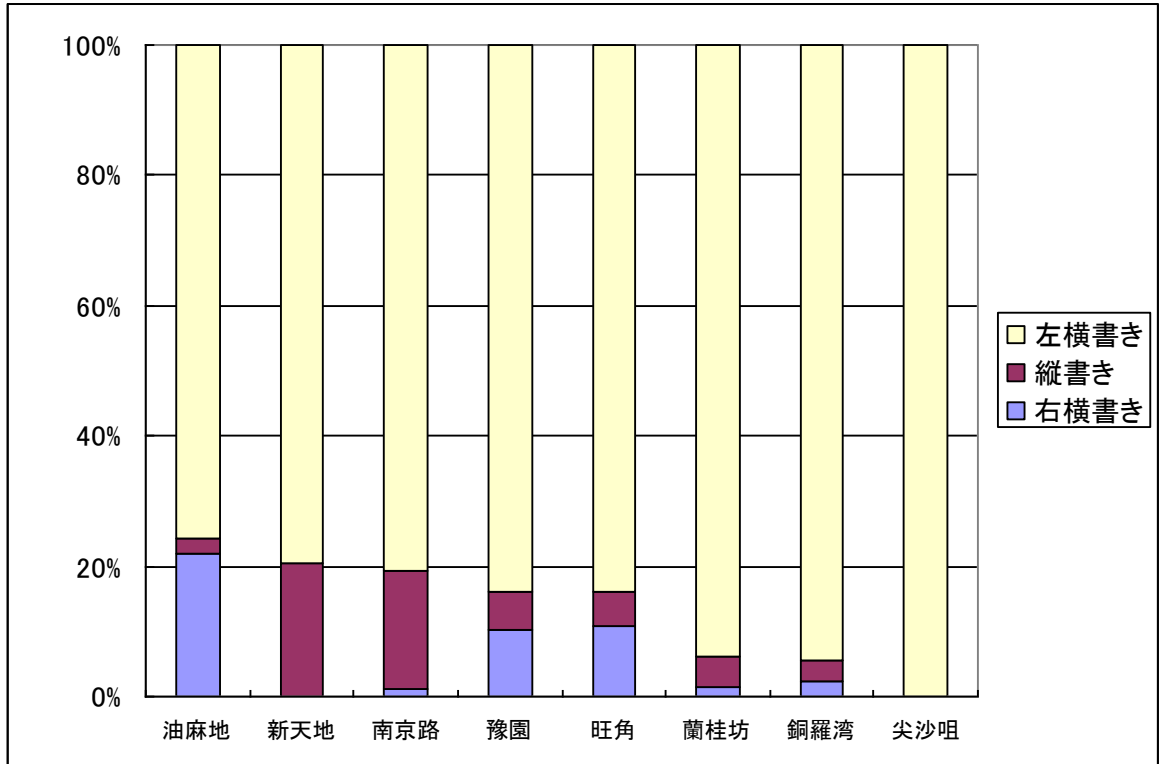


図 33 地域別表記法割合 (中国)

中国においては、各地域の言語景観における右横書き表記と縦書き表記を合わせた表記の使用率の順番で並べ替えると、図 33 に示したようになる。

銅羅湾、尖沙咀、蘭桂坊では、言語景観における左横書き表記が約 9 割以上という高使用率が目立つ。新天地では、右横書き表記がほとんどないことから、縦書きが多い原因は表記の中国志向でなく、デザイン上の考慮の結果だと推察される。これは言語種、文字種使用の調査結果と同様に銅羅湾、尖沙咀、蘭桂坊、新天地の欧米志向を反映している結果である。そして、その他の地域には右横書き表記と縦書き表記が比較的に多く、中国志向がうかがえる。

5.3 多変量解析

5.3.1 地域と言語種

表 36 コレスポネンダ分析による言語種ポイントの概要 (中国)

列ポイントの概要^a

言語種	マス	次元の得点		概要イナーシャ	寄与率				
		1	2		次元のイナーシャに対するポイント		ポイントのイナーシャに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
J	.034	.026	.807	.027	.000	.084	.001	.219	.220
E	.150	1.470	-.396	.221	.508	.088	.939	.029	.967
C	.397	-.570	-.415	.102	.202	.256	.811	.181	.991
ヨ	.070	1.444	.446	.116	.230	.052	.810	.032	.842
ア	.000
E+ヨ	.000
E+C	.322	-.303	.457	.041	.046	.251	.464	.443	.907
E+C+ヨ	.000
E+C+ア	.001	-.962	-2.171	.003	.001	.015	.182	.389	.571
E+C+ヨ+ア	.000
C+ヨ	.008	-.444	2.462	.017	.002	.171	.055	.710	.765
C+ア	.003	-.444	2.462	.006	.001	.057	.055	.710	.765
J+E	.011	.682	.012	.021	.008	.000	.158	.000	.158
J+E+C	.003	-.135	-1.654	.005	.000	.026	.006	.381	.387
J+ヨ	.000
J+C	.002	-.714	-.326	.013	.001	.001	.043	.004	.046
J+ア	.000
J+E+ヨ	.000
J+C+E+ヨ	.000
J+E+C+ア	.000
J+E+C+ヨ+ア	.000
合計	1.000			.570	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

ここでは、表 36 の寄与率の欄の中で言語種の次元のイナーシャに対するポイント得点を見ながら、

図 34 上の配置を確認する。

次元 1 においては、得点が高い言語種として英語 0.508、ヨーロッパ諸言語 0.230、中国語 0.202 がある。各地域では、中国語を多用するか、英語、ヨーロッパ諸言語をよく使用するかを基準に左右に分かれる。縦軸の左側には中国志向、右側には欧米志向の地域が固まっている。

次元 2 においては、得点が高い言語種として中国語+英語 0.251、中国語+ヨーロッパ諸言語 0.171 がある。

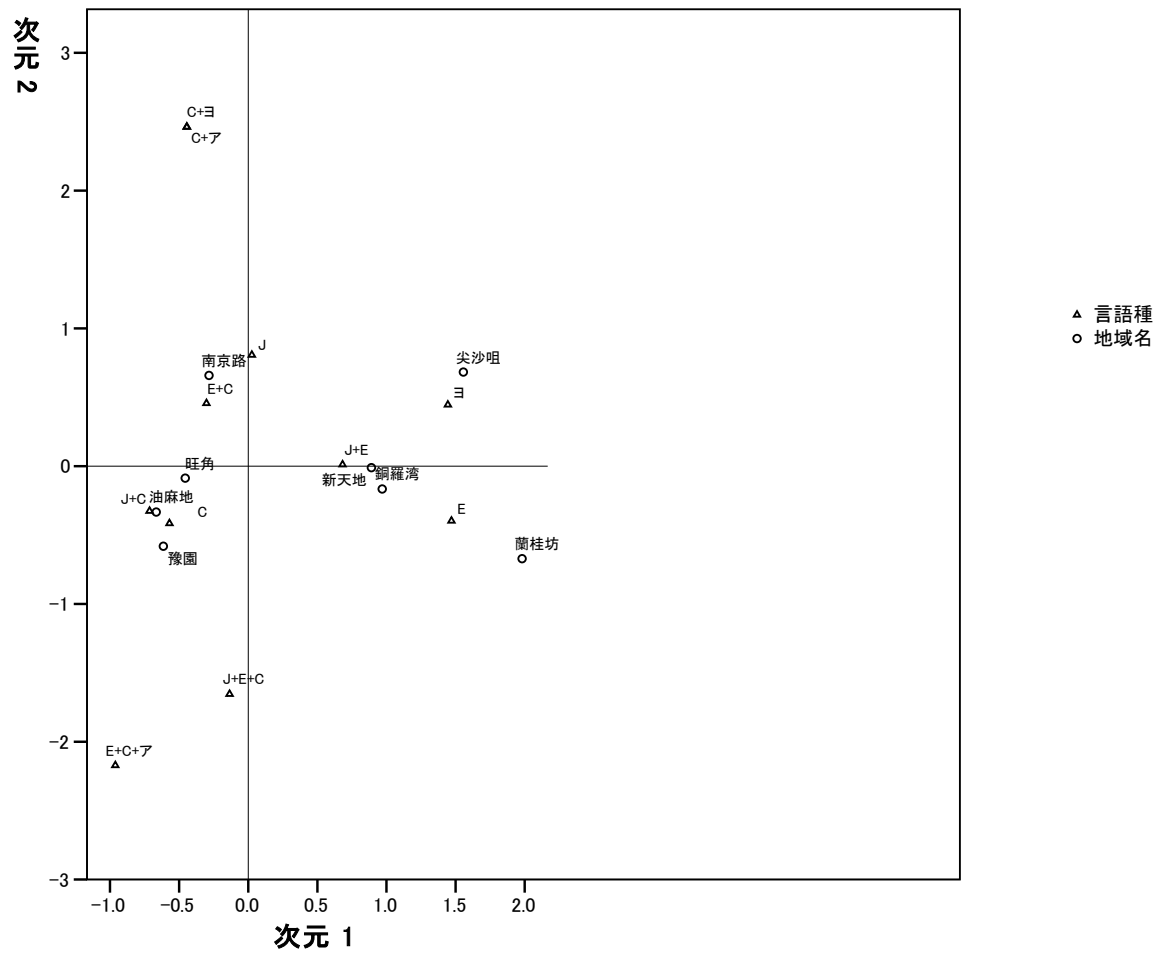


図 34 コレスポンデンス分析による地域と言語種 (中国)

5.3.2 地域と文字種

表 37 コレスポンド分析による文字種ポイントの概要 (中国)

列ポイントの概要^a

文字種	マス	次元の得点		概要インシャー	寄与率				
		1	2		次元のインシャーに対するポイント		ポイントのインシャーに対する次元		
					1	2	1	2	概要合計
漢字	.193	-.911	.235	.139	.230	.019	.803	.045	.848
ひらがな	.003	-.308	.417	.002	.000	.001	.099	.150	.249
カタカナ	.000
ローマ字	.221	1.223	.808	.315	.475	.250	.730	.265	.995
漢+ひ	.001	-.891	.748	.002	.001	.001	.242	.141	.383
漢+カ	.003	-.891	.748	.006	.003	.002	.242	.141	.383
漢+口	.231	-.770	.514	.150	.196	.106	.635	.235	.870
ひ+カ	.000
ひ+口	.000
カ+口	.001	1.684	.123	.007	.003	.000	.237	.001	.238
漢+ひ+カ	.001	1.684	.123	.007	.003	.000	.237	.001	.238
漢+ひ+口	.003	.636	-.501	.007	.002	.001	.132	.068	.200
漢+カ+口	.003	.367	-.475	.003	.000	.001	.069	.096	.165
ひ+カ+口	.000
漢+ひ+カ+口	.000
漢字(繁)	.199	-.021	-1.058	.134	.000	.387	.000	.966	.966
漢字(繁)+ひ	.001	.310	-2.296	.006	.000	.008	.009	.398	.407
漢字(繁)+カ	.000
漢字(繁)+口	.137	.641	-.971	.122	.081	.223	.320	.608	.928
漢字(繁)+ひ+カ	.000
漢字(繁)+ひ+口	.000
漢字(繁)+カ+口	.002	-.156	.589	.007	.000	.001	.004	.051	.056
漢字(繁)+ひ+カ+口	.001	-1.134	.048	.003	.002	.000	.276	.000	.276
アジア諸言語文字	.001	-1.134	.048	.003	.002	.000	.276	.000	.276
漢+アジア諸言語文字	.001	-.891	.748	.002	.001	.001	.242	.141	.383
ひ+アジア諸言語文字	.000
カ+アジア諸言語文字	.000
漢+ひ+アジア諸言語文字	.000
漢+カ+アジア諸言語文字	.000
ひ+カ+アジア諸言語文字	.000
漢+ひ+カ+アジア諸言語文字	.000
合計	1.000			.915	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

ここでは、表 37 の寄与率の欄の中で文字種の次元のインシャーに対するポイント得点を見ながら、

図 35 上の配置を確認する。

次元 1 においては、得点が高い文字種としてローマ字 0.475、漢字 0.230、漢字+ローマ字 0.196 がある。各地域は漢字をよく使用するか、英語、ヨーロッパ諸言語のローマ字をよく使用するかを基準に左右に分かれる。縦軸の左側には中国志向、右側には欧米志向の地域が分布している。

次元 2 においては、得点が高い言語種として繁体漢字 0.387、ローマ字 0.250、繁体漢字+ローマ字 0.223 がある。

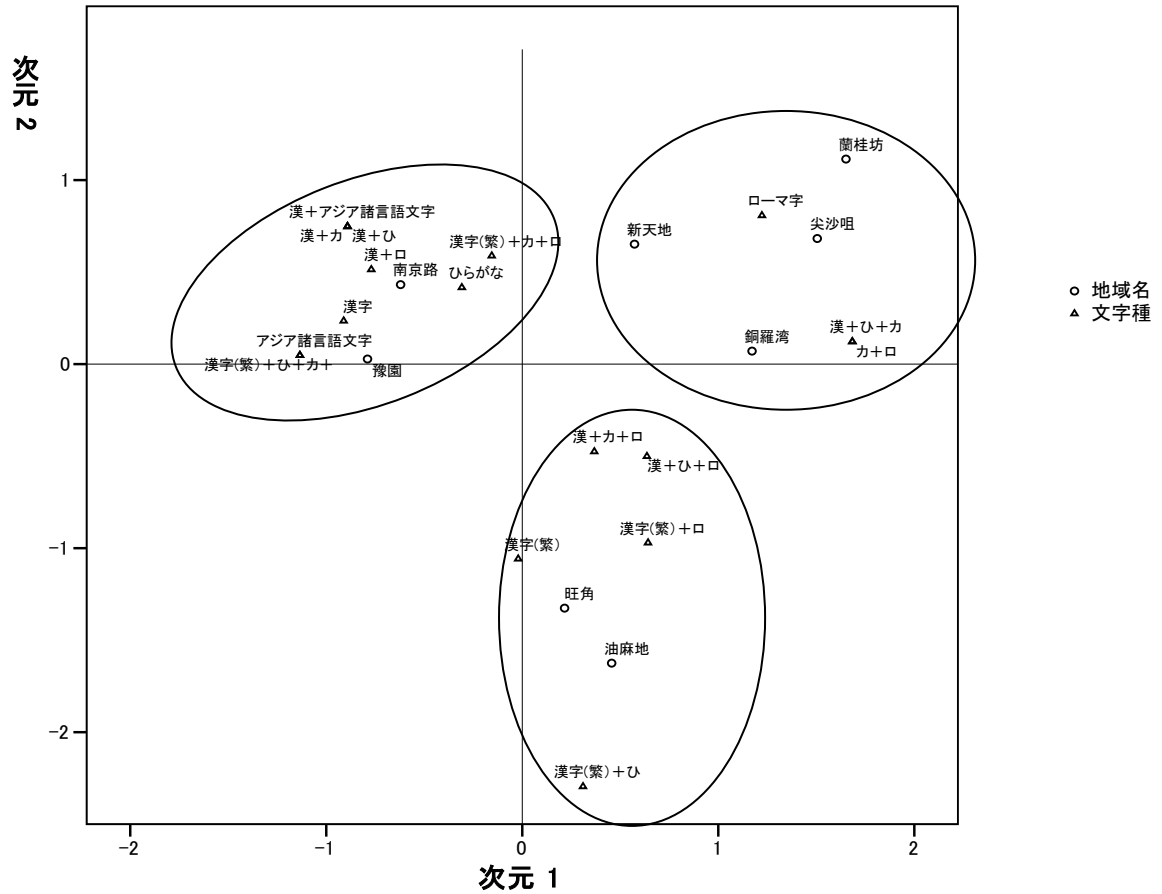


図 35 コレスポネンス分析による地域と文字種 (中国)

5.3.3 地域と表記法

表 38 コレスポネンス分析による表記法ポイントの概要（中国）

列ポイントの概要^a

表記法	マス	次元の得点		概要イネーシャ	寄与率				
		1	2		次元のイネーシャに対するポイント		ポイントのイネーシャに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
縦書き	.056	-1.039	.878	.027	.204	.272	.678	.259	.937
左横書き	.824	.000	-.185	.004	.000	.176	.000	1.000	1.000
両方	.058	-.879	.850	.022	.150	.262	.609	.305	.913
右横書き	.062	1.762	.864	.065	.647	.290	.886	.114	1.000
合計	1.000			.118	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

ここでは、表 38 の寄与率の欄の中で表記法の次元のイネーシャに対するポイント得点を見ながら、

図 36 上の配置を確認する。

次元 1 においては、得点が高い表記法として右横書き 0.647 がある。横方向からみると、縦軸の右側には右横書きを多用するいわゆる下町が集まっている。

次元 2 においては、得点が高い表記法として右横書き 0.290、縦書き 0.272 がある。

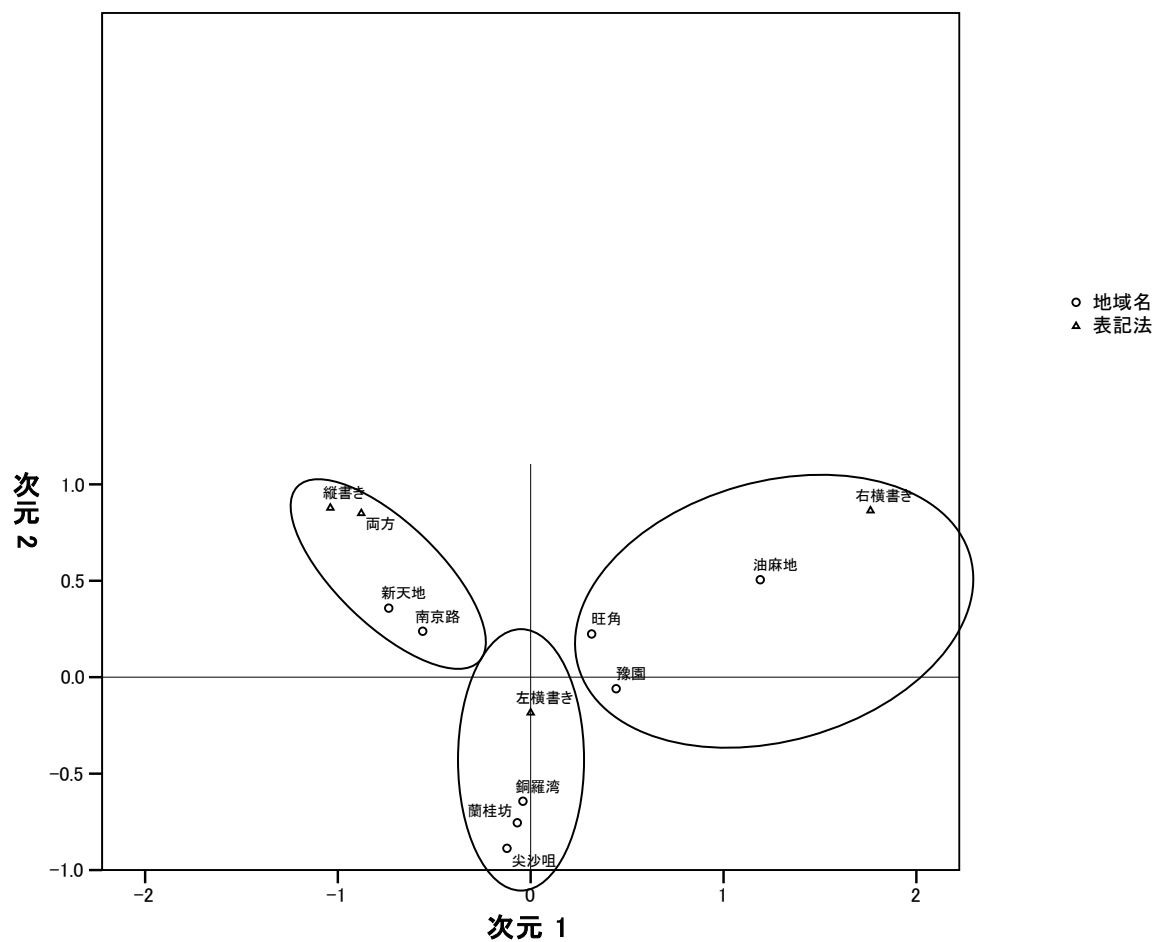


図 36 コレスポンド分析による地域と表記法 (中国)

5.3.4 総合的考察

表 39 コレスポネンス分析による全項目ポイントの概要（中国）

列ポイントの概要^a

インデックス1	マス	次元の得点		概要イネーシャ	寄与率				
		1	2		次元のイネーシャに対するポイント		ポイントのイネーシャに対する次元		概要合計
					1	2	1	2	
南京路	.052	-.018	.994	.113	.000	.090	.000	.255	.255
新天地	.011	-.760	.531	.160	.010	.006	.025	.011	.036
豫園	.040	.741	.816	.133	.035	.047	.103	.113	.216
飲食関係	.056	-.084	.023	.120	.001	.000	.002	.000	.002
ファッション関係	.026	-1.612	-.286	.156	.110	.004	.273	.008	.281
事務所等	.005	1.139	-.445	.170	.011	.002	.025	.003	.028
医療・健康・美容関係	.011	-.088	-1.226	.167	.000	.029	.000	.055	.055
建物の名称	.006	.452	-.401	.158	.002	.002	.005	.004	.009
デパート・モール等	.008	-.471	.552	.159	.003	.004	.007	.009	.016
銀行・金融関係	.004	-.052	1.207	.140	.000	.010	.000	.022	.023
芸術・工芸品関係	.033	.735	.707	.137	.028	.029	.080	.067	.148
娯楽施設	.005	.520	.595	.166	.002	.003	.005	.005	.010
書店	.001	-.202	-2.727	.177	.000	.007	.000	.013	.014
電気製品	.003	1.396	-1.649	.178	.009	.014	.019	.024	.044
複合・総合ショップ	.001	.326	-2.607	.156	.000	.014	.000	.028	.028
ホテル・旅館	.004	.442	1.569	.167	.001	.016	.003	.031	.033
その他	.007	1.009	-2.363	.171	.011	.065	.024	.120	.144
縦書き	.017	.467	1.143	.144	.006	.040	.016	.089	.106
左横書き	.149	-.218	.005	.024	.011	.000	.188	.000	.188
右横書き	.011	2.011	-1.831	.172	.068	.062	.154	.116	.270
J	.008	-.411	.115	.161	.002	.000	.005	.000	.006
E	.082	-.385	.010	.076	.020	.000	.100	.000	.100
C	.124	.561	.069	.042	.063	.001	.575	.008	.583
ヨーロッパ諸言語	.013	-2.926	-.619	.181	.180	.009	.385	.016	.401
アジア諸言語	.001	1.511	1.072	.124	.002	.001	.006	.003	.009
漢字	.093	.391	.887	.071	.023	.130	.125	.583	.708
ひらがな	.002	-.288	.293	.146	.000	.000	.001	.001	.001
カタカナ	.001	-.176	.770	.133	.000	.001	.000	.004	.004
ローマ字	.101	-.705	-.102	.062	.080	.002	.500	.009	.509
アジア諸言語文字	.001	1.511	1.072	.124	.002	.001	.006	.003	.009
繁体字	.058	.867	-1.083	.109	.070	.120	.247	.350	.597
旺角	.020	.779	-1.696	.160	.019	.100	.046	.199	.245
油麻地	.013	1.444	-2.230	.164	.043	.114	.102	.221	.323
尖沙咀	.007	-3.006	-.998	.179	.099	.012	.214	.021	.235
銅羅灣	.018	-1.225	-1.391	.166	.044	.062	.102	.119	.222
蘭桂坊	.009	-1.710	-.426	.187	.044	.003	.091	.005	.096
合計	1.000			5.056	1.000	1.000			

a. 対称的正規化

表 39 の中にあるイネーシャに対するポイントの寄与率を次元別で見てみる。

次元 1 では、言語種のヨーロッパ諸言語、業種のファッション関係はイネーシャに対するポイントの寄与率の数値が最も大きい。

次元 2 では、文字種の漢字、繁体字はイネーシャに対するポイントの寄与率の数値が最も大きい。

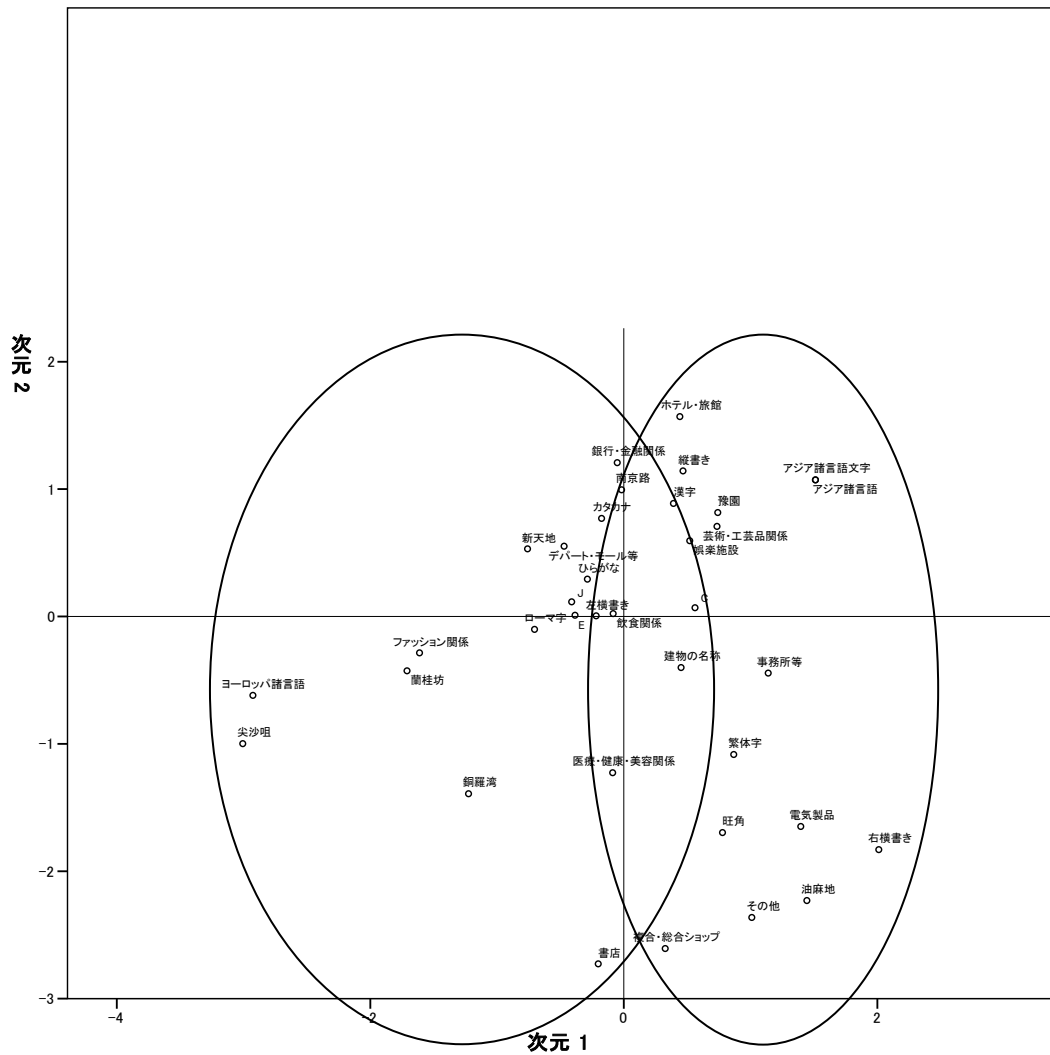


図 37 コレスポネンス分析による全項目 (中国)

2つの非言語的的属性(地域、業種)、3つの言語的的属性(言語種、文字種、表記法)という5つの項目の相互関係、またこれらの要素が上海と香港を組み合わせたグラフにおける位置づけを同時に見るために、多変量解析法のコレスポネンス分析を適用した。図を横方向と縦方向との2つの次元から読み取ることができる。

まず、横方向からみると、縦軸を境に2つのグループに分けられる。この2つのグループ最大の違いは中国語を多く使用するか、それとも英語及びヨーロッパ諸言語を多く使用するかということにある。

次に縦方向からみると、横軸を境に、繁体字が使用されるかどうかで上海と香港が上下に分布している。

第4章では、日本（東京、大阪）の言語景観における言語使用パターンは使用言語の種類を基準に、本国志向型、欧米志向型、アジア志向型の3つに分類できたが、上海と香港における言語景観の言語使用パターンは本国志向型と欧米志向型の2つに分類できる。

5.4 通時的考察

5.4.1 指数

中国の通時的変化を見るために、昨今上海の同じ地点で撮影された写真を収録した写真集を活用し、筆者のデータと比較した。写真集は4つの分類で新旧対比する形のものであり、その中から言語景観に当たるものが映っている写真を抽出・集計し、多言語・多文字指数を算出した。

5.4.1.1 旧上海租界の紹介

新旧上海対比の資料については、そのタイムスパンは写真集のタイトルのように、1850年～2010年の期間である。いわゆる旧は1946年太平洋戦争終結前、新は1946年太平洋戦争終結後を指している。

ここでは、正確かつ客観的に比較の結果を考察するために、上海租界の歴史⁸を簡単に紹介しておく。

まず、上海租界はアヘン戦争の代価に、イギリスが中国から強制的、永久的に土地を得た1842年に誕生した。当初、イギリス、アメリカ、フランスがそれぞれ租界を設定し、後に英米列強の租界を纏めた共同租界と、フランスのフランス租界に再編された。上海租界はこれらの租界の総称である。アヘン戦争によって清国が敗れると、イギリスは江寧（南京）条約で、中国から買い受けた上海の土地で自国の法律を施行し、独自の習慣や文化を享受していた。これ以降の約100年が租界の時代である。また、アロー戦争での敗北によって、その他の列強も上海に利権を持つようになった。租界では治外法権が認められ、多数の列強の干渉と施政のもとで上海は急速に発展を遂げ、1920年代～1930年代にかけて租界は黄金期を迎えた。その後、上海に発生していた歪みや、日中戦争、第二次世界大戦によって上海租界は終わりを迎え、1946年には上海にあった全ての租界は、太平洋戦争終結によって姿を消した。

⁸ 香港にも殖民地であった歴史があるが、本研究では、上海と同様に歴史的資料との比較を行わなかったため、その歴史の紹介を省略することにした。

5.5.1.2 多言語・多文字指数

表 40 中国における言語景観の地域別多言語・多文字指数平均値内訳

	多言語指数	多文字指数
南京路	1.52	1.39
新天地	1.85	1.69
豫園	1.22	1.21
旧 Facets of Life (上海)	1	1
新 Facets of Life (上海)	1.39	1.39
旧 Scenes of City (上海)	1.07	1.07
新 Scenes of City (上海)	1.37	1.37
旧 Urban Development (上海)	1.03	1.03
新 Urban Development (上海)	1.13	1.13
旧 Historical Architecture (上海)	1.34	1.34
新 Historical Architecture (上海)	1.27	1.28
油麻地	1.77	1.9
旺角	1.98	1.84
銅羅湾	2.34	2.23
尖沙咀	2.67	2.25
蘭桂坊	2.21	2.03

表 40 は表 41 の基準で、中国各地域における多言語・多文字指数の平均値を算出したものである。

表 41 多言語指数点数表

多言語指数			
日 本		中 国	
日本語	1 点	中国語	1 点
英語	2 点	英語	2 点
その他	3 点	その他	3 点

多文字指数点数表

多文字指数	
母国語文字	1 点
ローマ字	2 点
その他	3 点

図 38 は横軸を多言語指数得点で、縦軸を多文字指数得点で表したものである。

各地域が図 38 における位置をみると、右上がり、2つのグループに大きく分けられる。

左下に位置するグループでは、言語景観における多言語・多文字指数の得点がともに低いことで、伝統を守り、多言語化が進んでいないことが考えられる。その中の

右上に位置するグループでは、言語景観における多言語・多文字指数の得点がともに高いことで、積極的に外国語を取り入れ、多言語化を進めている傾向がある。

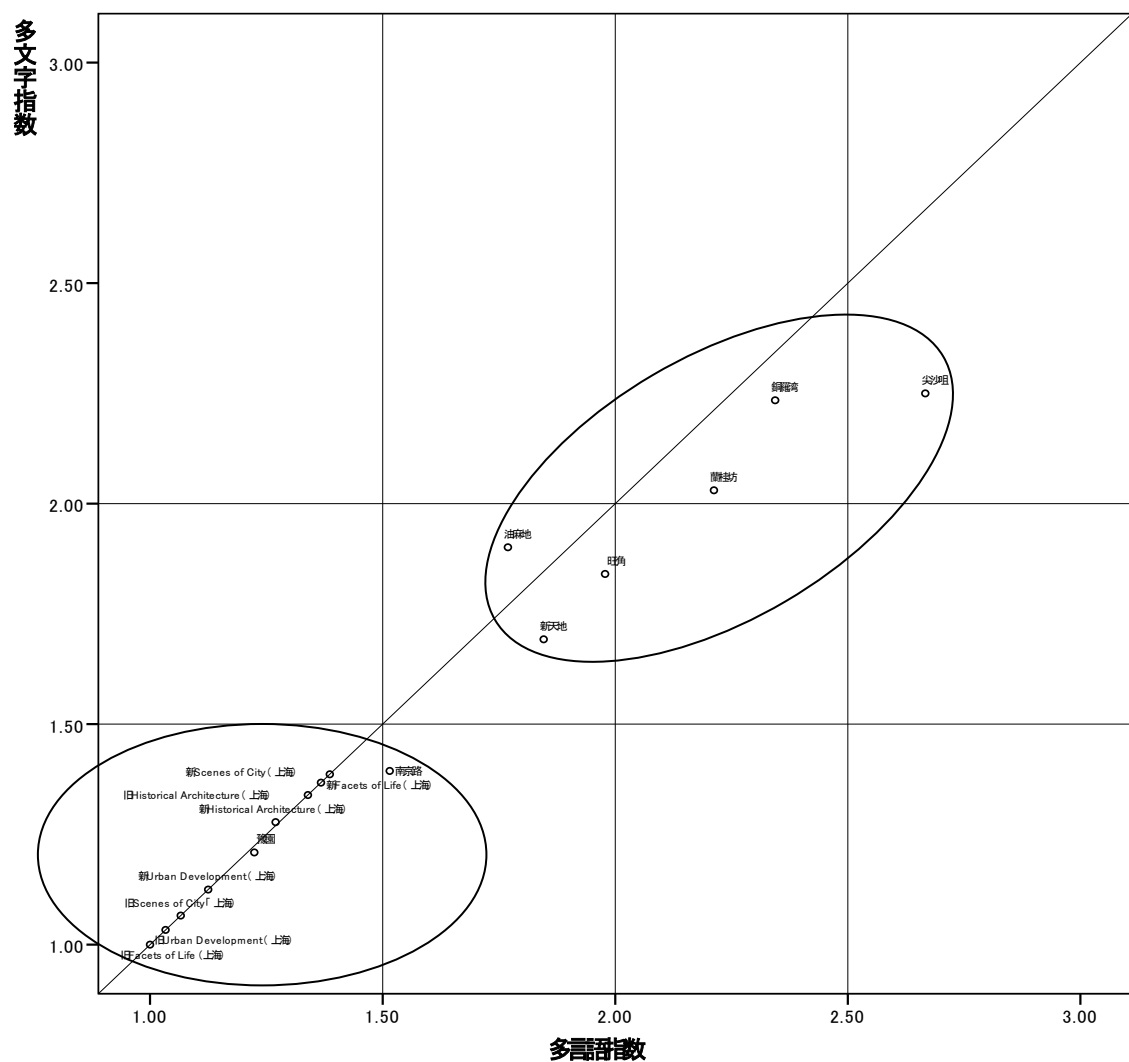


図 38 多言語・多文字指数散布図 (中国)

5.5.2 言語種による三角グラフ

ここでは、言語種使用状況の変化の趨勢を見るために、筆者の調査で得られた資料に写真集資料を加えて、**図 39**のように視覚化し、母国語の使用率の順番でソートした。

表 42 中国における言語景観の地域別・三角グラフ用言語種割合内訳

	母国語	英語	その他
旧 Facets of Life	1.00	0.00	0.00
旧 Urban Development	0.94	0.06	0.00
旧 Scenes of City	0.91	0.09	0.00
新 Urban Development	0.85	0.15	0.00
豫園	0.72	0.26	0.02
油麻地	0.71	0.29	0.00
新 Historical Architecture	0.67	0.30	0.02
旧 Historical Architecture	0.65	0.35	0.00
旺角	0.62	0.28	0.10
新 Scenes of City	0.59	0.40	0.01
新 Facets of Life	0.57	0.43	0.00
南京路	0.56	0.35	0.09
新天地	0.35	0.53	0.13
銅羅湾	0.31	0.46	0.23
尖沙咀	0.19	0.46	0.36
蘭桂坊	0.12	0.88	0.00

図 39 は、表 38 のデータに視覚化し、母国語の使用率の順番で並べ変えたものである。

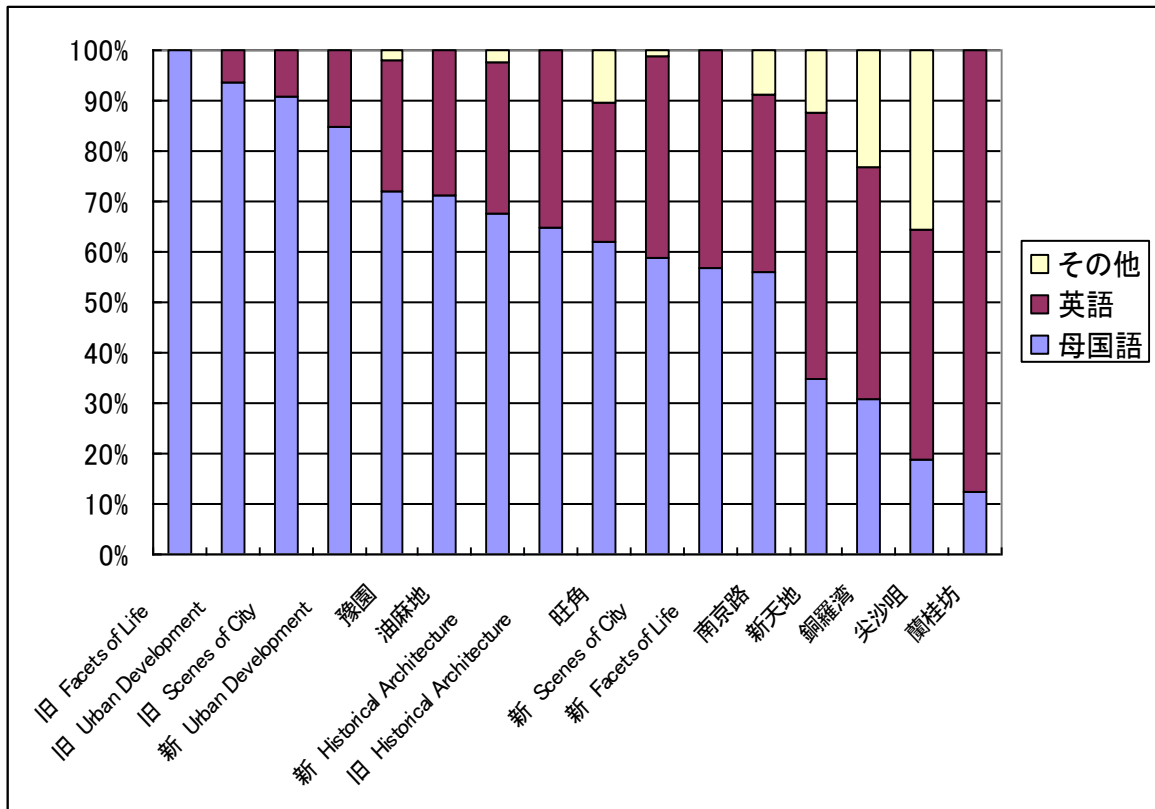


図 39 中国の言語景観における言語種使用割合

図 39 では、各地域の言語景観における言語種の割合が分かるが、3 種類の言語の相関関係を捉えるために、各地域の言語使用状況は三角グラフの中で位置づけてみた。

図 40 が示したように上海、香港の各地域を大まかにみると、図 28 が示した日本の東京、大阪と同様な趨勢が観察される。

つまり、言語使用の趨勢は母国語の使用から出発し、一旦英語使用が増加し、上に向かい、またその他（ヨーロッパ諸言語とアジア諸言語）の取り入れによる共同作用で、バランスが取れた位置に到達するというプロセスである。図上矢印のように、日本は近代から現代までの言語景観における言語使用の変化過程が見られ、将来の多言語化の進行方向も推測できる。

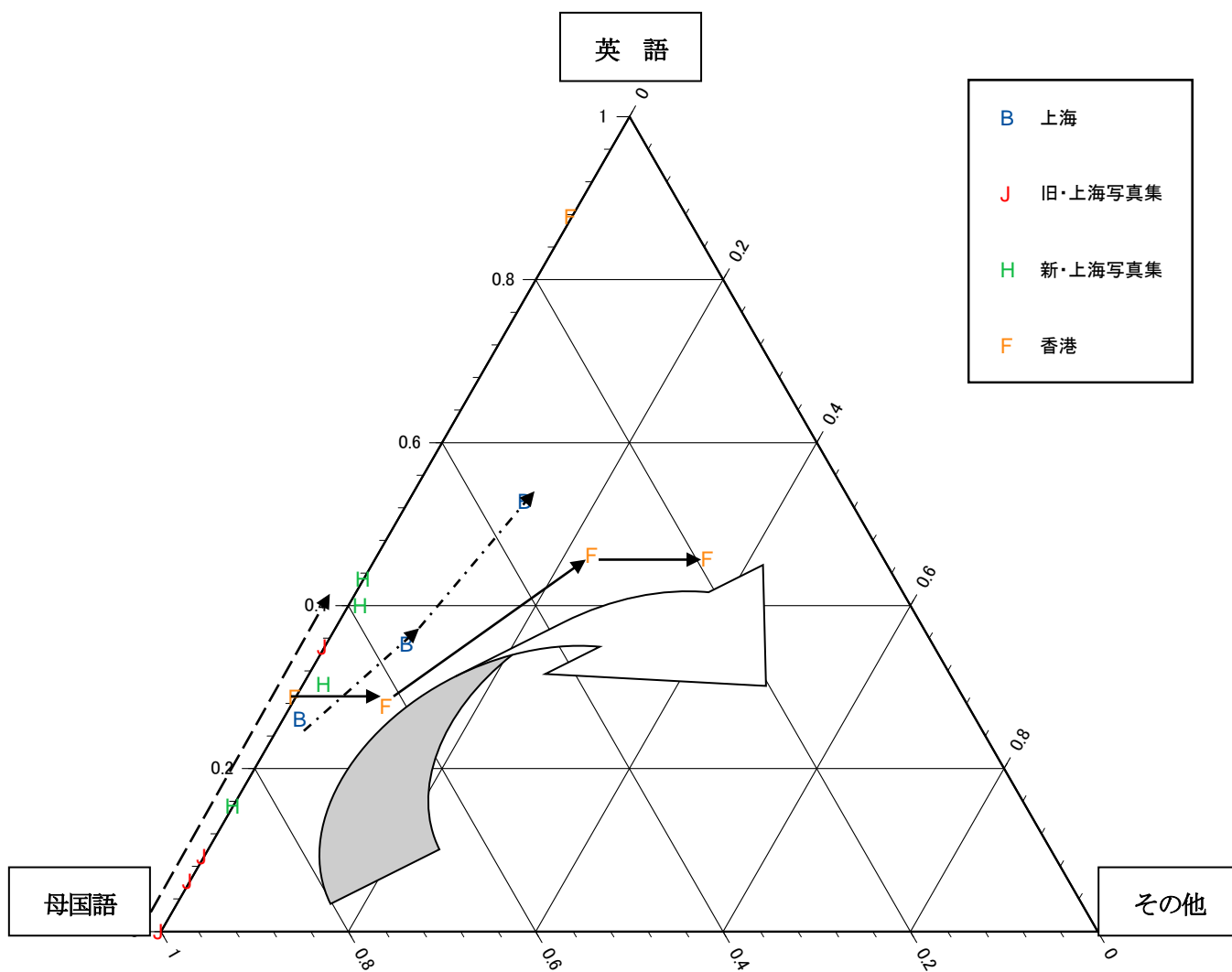


図 40 中国における言語種（母国語・英語・その他）使用割合による三角グラフ

6 結び

本章では、言語景観研究の理論的位置づけを述べた後、本研究の研究結果をまとめ、今後の課題を提示する。

6.1 言語景観研究の位置づけ

第3、4、5章では、先行研究の問題点を踏まえて、筆者による日本（東京・大阪）、中国（上海・香港）の言語景観の単純集計の結果を先行研究及び他の研究者が集めたデータ、歴史的写真集と照らし合わせながら、指数、三角グラフ、コレスポネンス分析によって得られたグラフを用いて、様々な視点から総合的に考察を行った。

ここでは、第3、4、5章の考察の結果を踏まえて、言語景観研究の定義、方法論、言語景観の言語使用に見られる言語変化の現象、より普遍的な言語景観研究の理論的枠組みについて、改めて総括し、言語景観研究を理論的に位置づけていきたい。

6.1.1 言語景観の定義

1.2 でも指摘したように、在来の定義には様々な問題点がある。第3、4、5章の考察では、社会的属性項目（地域、業種）がいかに言語景観にける言語的属性項目（言語種、文字種、表記法）の使用に影響を及ぼすかの法則性がわかったことから、言語景観とは景観における言語の社会的属性を包括的に表現したものだとして新たに定義できる。すなわち、言語と社会が景観によって介されているという構図である。この3者は図41のような関係にあると思われる。

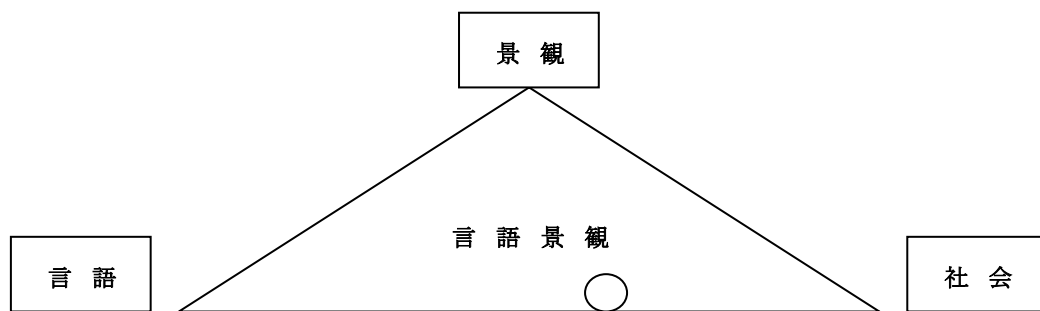


図 41 言語、景観、社会の関係

言語景観に関する社会言語学的研究の領域は研究対象を言語そのものに近づける側面から、反対に研究対象を社会に近づける側面までの広がりとして捉える立場を取りたい。本研究は図41の中で位置づけると、丸印のところにあると考える。1.3で紹介した先行研究もこの図41の中で位置づけることができると考えてよい。

6.1.2 言語景観の方法論について

1.3.3 では、今まで、各種言語景観研究の方法論がそれぞれ異なるため、他の研究と客観的に比較することが困難であることを指摘した。

本研究では、筆者が言語景観を言語的属性の3項目（言語種、表記法、文字種の組み合わせ方）社会的属性の2項目（地域、業種）に分解し、数値化の基準を考案した。数値化することによって、客観的に言語景観を分析・考察することが可能となる。そして、研究者は統一された数値化の方法を採用すれば、各自のデータを共有することができる。さらに、膨大な量のデータを付き合わせることで、世界範囲で言語景観の全貌が見えてくる。

6.1.3 言語変化の現象

言語変化の現象には収斂と分散の2つの流れがある。言語景観の言語使用においては、どのような言語変化がみられるかを再び多変量解析法のコレスポンデンス分析で得られたグラフを内省して考えてみる。

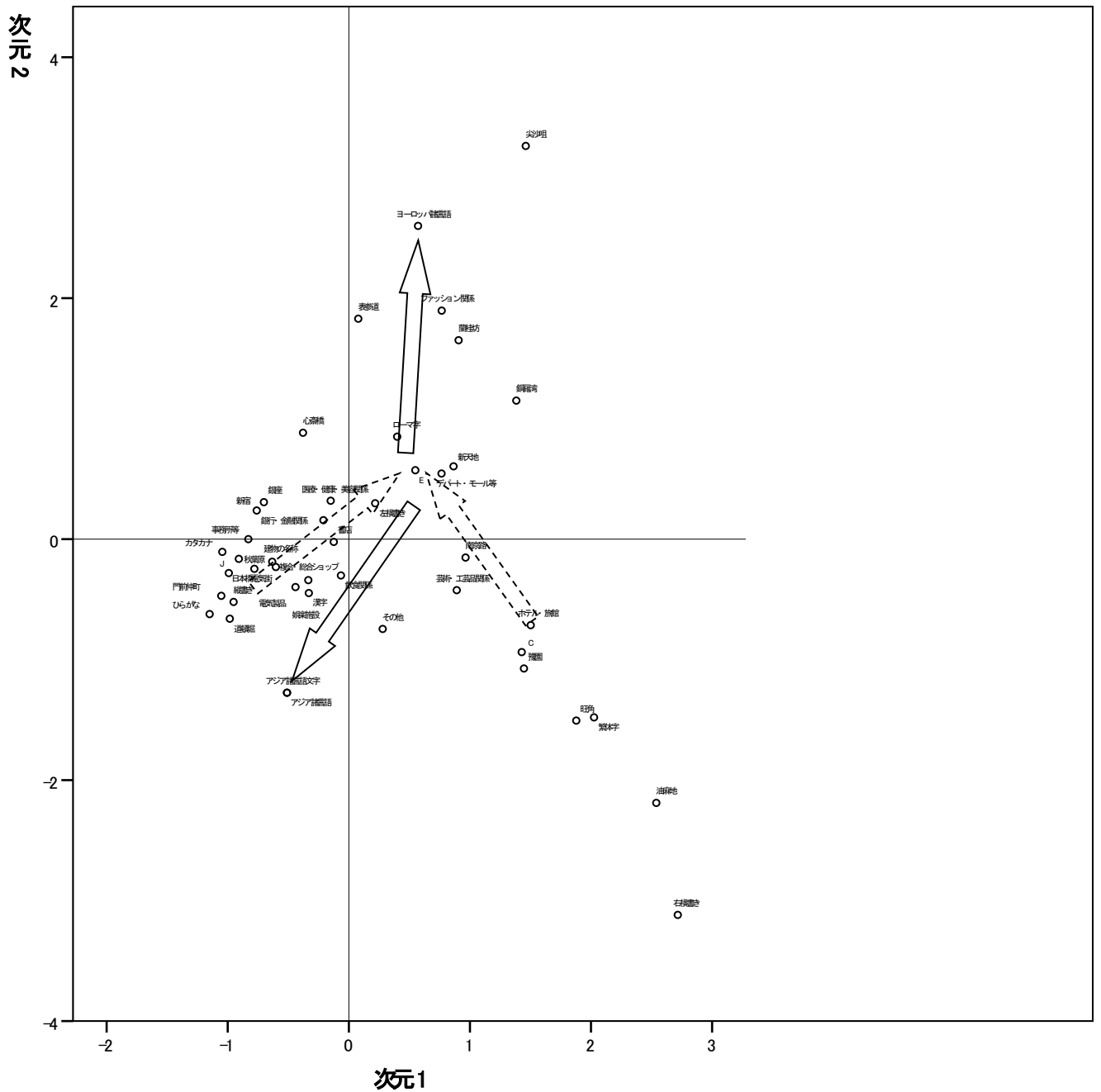


図 42 コレスポンデンス分析による全項目 (次元1 と次元2)

3.4.2.1 では、各項目が図 10 上にある位置により、上から下まで、ヨーロッパ諸言語と英語を多用するグループ、母国語の日本語・中国語また英語を満遍なく使用するグループ、母国語の日本語あるいは中国語を中心に使用するグループ、客観的な基準でこの 3 つに分類している。これは、外的考察の結果だと見なされる。

言語景観に使用される言語種に注目し、内省して考えてみると、図 42 上の矢印が示しているような方向で言語変化の現象が起きている。

まず、図 42 では、それぞれ左側にある日本語、右側にある中国語から、英語に向かう 2 本の矢印が示しているように、日本と中国はそれぞれ母国語としての日本語あるいは中国語の使用から出発し、英語の国際化を背景に、一旦、英語の使用が増加する。この変化は英語の国際化に伴う現象と解釈できる。

次に、英語を使用するだけでは、意思伝達あるいは雰囲気作りの役割がはたしきれないことがあるため、英語からそれぞれヨーロッパ諸言語、アジア諸言語に向かう 2 本の矢印が示してあるように、英語のはたしきれない役割をヨーロッパ諸言語あるいはアジア諸言語に分担してもらっていることが考えられる。例えば、フランス製、イタリア製のブランド品を扱うファッション関係の店舗はやはり英語よりもフランス語、イタリア語をそのまま使用することが多い。同様に、韓国料理の飲食店は、英語でなく、ハングルを店名看板に起用するだろう。この現象は英語の国際化以外に、多様化した国際化を意味する。

以上のような内的考察の結果をみても、言語景観における使用言語種の取捨において、母国語使用から英語使用への収斂、そして英語使用からヨーロッパ諸言語あるいはアジア諸言語使用へ分散という言語変化の現象が見られる。この現象についての解釈は 3.3 での三角グラフによる推測と一致する。

ただ、言語景観に見られる言語変化が言語そのものの変化でない点については、日本語方言の共通語化等のような言語変化の現象と区別すべきである。

6.2 結論

本研究では、言語景観の実態を把握した上で、言語景観のパターンを本国志向型、折衷志向型、欧米志向型に分類し、共通性を示した。さらに、社会経済的要因がいかに関言語景観の形成に影響しているかを解明し、法則性を見出した点では、意義のある研究である。今後、言語景観の研究を考える上で、こうした社会経済的属性を重要な要因として考慮しなければならないことを明らかにしたものと考えている。

また、考察の結果を踏まえて、言語景観とは景観における言語の社会的属性を包括的に表現したものと新たに定義づけている。

そして、方法論、言語景観の言語使用に見られる言語変化の現象、より普遍的な言語景観研究の理論的枠組みについて、改めて総括し、言語景観研究を理論的に位置づけた。

6.3 今後の課題

最後に、今後の課題として、本研究の成果を生かした言語景観研究の理論的枠組みの構築を完成させたい。また、言語景観の資料をさらに充実させ、本研究の資料とあわせることによって、世界の言語景観を対象としたコレスポネンス分析を行い、地域性、業種による経済性以外に、言語景観の形成に影響をもたらす要因を抽出し、より広い視野に立って、言語景観研究の国際比較を行っていく必要性を感じている。

以上をもって、本研究の結びとするが、言語景観研究の理論的枠組みの構築にも、分析手法においても未完成な点は今後の課題とすることとし、本研究によって、言語景観という斬新な研究領域の存在と、研究の意義について理解が得られれば幸いである。

参考文献（和文）

- バックハウス、ペーター（2004）「「内なる国際化」——東京都の言語サービス」河原俊昭（編）『地方自治体の言語サービス：多言語社会への扉をひらく』 春風社 pp.37-53
- （2005）「日本の多言語景観」真田信治・庄司博史（編）『辞典 日本が多言語社会』 岩波 pp.53-56
- （2007）「公共文字と日本の多言語化—東京の言語景観を事例に」国立国語研究所（編）『文字と社会』（新「ことば」シリーズ 20） ぎょうせい pp.92-97
- ダニエル・ロング（2006）「《わんきゃがやらんば！》観光客の目に付く奄美ことばの言語景観論的試み」『日本方言研究会 第 83 回 研究発表会 発表原稿集』日本方言研究会 pp.27-34
- 飛田良文（2002）「西洋語表記の日本語表記への影響」飛田良文・佐藤武義（編）『現代日本語講座 第 6 巻 文字・表記』明治書院 pp.58-84
- 平野桂介（1996）「言語政策としての多言語サービス」『日本語学』 15（13） pp.65-72
- 井上史雄（2000）『日本語の値段』大修館
- （2001）『日本語は生き残れるか——経済言語学の視点から』PHP 新書
- （2007）「多言語表示の経済原理」『社会言語科学会 第 20 回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.255-256
- （2009）「経済財としての言語」『応用言語学研究』 No.11 明海大学大学院応用言語学研究科紀要
- （2009）「経済言語学からみた言語景観」庄司博史（編）『日本の言語景観』三元社
- 石井一郎・元田良孝（1993）『景観工学』鹿島出版会
- 金美善（2005）「言語景観にみえる在日コリアンの言語使用—新来者の登場がもたらしたもの—」真田信治他編『在日コリアンの言語相』和泉書院 pp.195-224
- （2007）「新宿の多言語景観 コリアンニューカマーの経済活動を中心に」『社会言語科学会 第 19 回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.272-275

- 江源 (2008) 「言語景観から見る日本の多言語化状況」 明海大学大学院 応用言語学研究科修士学位論文
- (2008) 「言語景観に見られる東京多言語化の実態—商業集積地域を調査対象に—」 『社会言語科学会 第22回大会発表論文集』 社会言語科学会 pp.86-89
- (2008) 「日本の多言語化状況に関する一考察—言語景観を調査対象に—」 第8回国際日本語教育・日本研究シンポジウム ポスター発表
- (2009) 「言語景観研究の現状について」 『明海日本語 第14号』 明海大学日本語学会
- (2009) 「日本の多言語化状況に関する一考察—言語景観を調査対象に—」 『アジア・オセアニア地域における多文化共生社会と日本語教育・日本研究 (第8回 国際日本語教育・日本研究シンポジウム会議録)』 向日葵出版社 中国・香港
- (2009) 「言語景観の成因に関する社会言語学的考察」 『日本研究文集9』 徐志強 (主編) 華東理工大学出版社 中国・上海
- 河原俊昭 (編) (2004) 『地方自治体の言語サービス：多言語社会への扉をひらく』 春風社
- オバタ・ライマン、エツコ (2005) 「表記法から観察するビジネス・アイデンティティ：表参道商店街の店名 (1)」 『麗澤学際ジャーナル』 13 (1) pp.39-67
- 小野原信善 (2007) 「香川県の言語景観—国際化と言語サービス」 河原俊昭・野山広 (編) 『外国人住民への言語サービス：地域社会・自治体は多言語社会をどう迎えるか』 明石書店 pp.206-229
- 庄司博史 (編) (2007) 『まちかど多言語表示調査報告書』 多言語化現象研究会
- 庄司博史 (2005) 「日本の多言語化」 真田信治・庄司博史 (編) 『辞典 日本の多言語社会』 岩波書店 pp.48-53
- 庄司博史・金美善 (2007) 「京阪神の多言語表示にみえる多言語化現象 —2005年まちかど多言語表示調査から—」 『社会言語科学会 第19回大会発表論文集』 社会言語科学会 pp.324-327
- 染谷裕子 (2002) 「看板の文字表記」 飛田良文・佐藤武義 (編) 『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』 明治書院 pp.221-243
- 田中ゆかり (編) (2007) 『山手線の多言語状況』 日本大学文理学部国文学科

- (2009) 「首都圏の多言語表示」『日本語学』第6号 明治書院
- 田中ゆかり・上倉牧子・秋山智美・須藤央 (2007) 「東京圏の言語的多様性—東京圏デパート言語景観調査から—」『社会言語学 第10巻第1号』社会言語科学会 pp.5-17
- 田中ゆかり・上倉牧子・新坂望 (2007) 「東京圏の言語景観—山手線各駅調査と鉄道会社アンケートから」『日本語学会 2007年度秋季大会予稿集』日本語学会 pp.207-214
- 田中ゆかり (2009) 「首都圏の多言語表示」『日本語学』第6号 明治書院
- 本間勇介 (2010) 「エスニック地域における言語景観」明海大学大学院 応用言語学研究科修士学位論文
- 松村明 (編) (1998) 『大辞林 第二版 机上版 上』三省堂
- 正井泰夫 (1969) 「言語別・文字別にみた新宿における諸設営物の名称と看板広告」『史苑』29巻2号 立教大学史学会 pp.44-55
- (1972) 『東京の生活地図』時事通信社
- (1983) 「新宿の喫茶店名—言語景観の文化地理」『筑波大学地域研究』1 pp.49-61
- 山城完治 (2009) 「視覚障害者にとっての言語景観」庄司博史 (編) 『日本の言語景観』三元社

参考文献 (英文)

- Backhaus, Peter (2006) Multilingualism in Tokyo: A Look into the Linguistic Landscape. *International Journal of Multilingualism*. pp.52-66.
- (2007) *Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multilingualism in Tokyo*. Clevedon • Buffalo • Toronto: *Multilingual Matters*
- Gorter, Durk (2006) Introduction: The study of the linguistic landscape as a new approach to multilingualism. In D. Gorter, (ed). *Linguistic Landscape, A New Approach to Multilingualism*, (pp.1-6). Clevedon • Buffalo • Toronto: *Multilingual Matters*.
- INOUE, Fumio (2005) Econolinguistic Aspects of Multilingual Sign in Japan. *IJSL*
- JIANG, Yuan (2010) Comparative researches about linguistic landscape of China and Japan. *Sociolinguistics*

Symposium 18

- Landry, Rodrigue & Bourhis, Richard Y(1997)Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality:An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16,pp.23-49.
- Scollon,R. & Scollon,S.W. (2003) *Discourses in place: Language in the Material World*. London and New York: Routledge
- Shohamy, E & Gorter, D.(eds) (2009) *Linguistic Landscape: Expanding the Scenery*. London: Routledge.
- Shohamy, E and Ben-Rafael, E and Barni, M.(eds) (2010) *Linguistic Landscape in the City*. Clevdon • Buffalo • Toronto:*Multilingual Matters*.
- Smalley, W.A. (1994) *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*. Chicago,IL: University Press.

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々からご指導やご協力をいただきました。特に主査の井上史雄先生には、5年間にわたり常に的確なご指導をいただき、時には精神面からも強く導いていただきました。研究を幅広い視野で捉えることや、決して固定観念に縛られることなく、守備範囲を広げ、物事の本質を見極めることの重要性を教えていただいたことは、私にとって、博士論文を完成すること以上に意味深いことでした。心より深く感謝申し上げます。

また、副査としてご指導くださった原口庄輔先生、山下暁美先生、ダニエル・ロング先生、大学院の授業でご指導いただいた小池生夫先生、田部滋先生、飛田良文先生、田中慎也先生、田中典子先生、櫻井隆先生、劉勳寧先生、遊佐昇先生にも、心より厚く感謝申し上げます。社会言語学の分野を超えた、幅広い分野からご指導いただくことができ、かけがえの無い貴重なご意見を沢山いただくことができました。

そして、在学中には綿貫国際奨学財団から経済的なご支援をいただき、勉学に集中することができ、本研究を行う際に、大きな糧となりました。

さらに、大学院応用言語学研究科の院生の皆様にも心より感謝申し上げます。素晴らしい先輩、同級生、後輩から、私自身1人では到底学び得ない様々なことを学ぶことができました。特にゼミ先輩の田辺和子さんには、研究に関する様々な相談にのっていただき、論文の日本語ネイティブチェックに快くご協力いただいただけでなく、精神的な面でも常に励ましていただきました。本当に有り難うございました。

最後に、遠くでも一番精神的な支えとなってくれた両親を始めとして、家族の皆に心より感謝いたします。

2011年3月

江 源

付 録

— 写真データ表 —